

地理上は同じ浙江のうちでも福州に近いものには温州がある。その温州には却つて入聲の佛が見えないで、上海の方にそれが見られる。まかもそれが福州式であると云ふことは海路の側の交通が然らしめたので、温州、福州間は自然山脈などの交通を遮断せしめるもののある爲めかと思はれる。上海にKの入聲があるとは云ふものの、浙江省の位置は南方よりも寧ろ、北方の種々の影響を受けることが多いのであるから、従つて入聲はなくなる方の傾向がよく見られるやうである。併し全然なくなるのではなくてKの入聲が喉頭 (Kehkopf) の閉鎖となつて居るものらしい。今その二次的の入聲は多くは普通にHで示されて居る。それを他の方音の入聲に比較して見れば次の如くに見られる。

(3) Giles, Chinese (4) Eddkins: Shanghai dialect

	南	中間 ⁽³⁾	北方
	廣東	福州	上海
K	力 ik	ik	ih
	則 tsak	ɕaik	tsah
.T	竭 k'it	kiek	jih
	疾 tsat	ɕik	dzih
.P	法 fat	huak	feh
			北平
			tsa
			ɕie
			ɕi
			fa

甲	kap	kak	k'ah	cia
	.K, .T, .P	.K, .H		nil

即ち廣東の .K, .T, .P は福州で .K 上海で .H に該當して居る。北方北平には全くない。全くない北平のものを完全して居る廣東のものに比較すると餘程の差のあることがわかる。

(1) Giles: Chinese English Dictionary. (2) Eddkins: Shanghai Dialect.

以上述べたもののうちで .K, .T, .P の入聲の完全して居るものは、即ち安南、廣東、厦門である。皆南方のみであるが北方にも支那をはなれて朝鮮半島とか日本などには古くからそれが傳へられて居る。但し朝鮮の入聲には朝鮮訛りがあつて .T の入聲は悉く .L にうつつて今では一つの例外もそれにはない。又日本の入聲には日本の訛りが加はつて眞の入聲の形はくづれてしまつて、多くはその入聲音のあとに向音を加へて表はされて居る。尙それにこまかな訛りもあるが、それは尙後にそのことを云ふ處で詳述する。今、朝鮮及び日本の入聲を北平の入聲でなくなつて居る今の形のものに比べて見るにその差は宛かも廣東方面のものを北平のに比較したものと似て居る。

朝鮮	K の入聲音	朝鮮 ⁽²⁾	北平
百	p	päik	pa
			牧
			号
			mok
			mu

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

局	쿠	ku	cü	瘡	학	hak	nüe
客	각	kak	ka	食	식	sik	si
督	독	tok	tu	驛	역	yok	i
足	족	cyuk	tsu				

(3) 奎章全韻

Tの入聲音

朝鮮⁽¹⁾

北平

朝鮮

北平

骨	골	kol	ku	日	일	il	ji
乞	걸	köl	ç'i	鬱	억	eul	yü
別	별	pyöl	pie	奪	탈	t'al	to
八	팔	p'al	pa				
物	물	mul	wu				

(1) 奎章全韻

Pの入聲音

急

급

keup

çi

獵

학

yop

lie

甲	갑	kap	cia	業	업	eup	ye
狹	협	kiöp	cia	法	법	döp	fa
合	합	hap	ha	十	십	sip	si
答	답	tap	ta	接	접	cyöp	cie
習	습	seup	si	協	협	hyöp	sie

朝鮮に入聲のTがLとなつて居るのは所謂どちらもが齒音 (dental) 即ち舌齒音 (lingo-dental) の音である爲めに轉訛したものと見える。既にLとなれば入聲音たるの性質は失はれたわけである。何となればこの語尾音そのものはTそのものと同じ入聲ではないことは勿論である。普通入聲はKにせよTにせよYにせよ Genetisch に各その位置をとる迄であつて嚴格 (strict) に云へば閉鎖するだけで破裂はしないのである。朝鮮のLはTと同じ發音機關 (Genetisch) の位置をとることが假りに可能であるとしても全然氣息の出ないT入聲の様なことではない。それ故朝鮮のLは支那の入聲のTにあつて居るとは云ふものの、眞の入聲音ではないと云はなければならぬ。

日本

日本の入聲は K, T, P の全部、眞の入聲ではなくて、凡て日本式になまつて居る。今日のもので全く入聲の併と見えて居ないものもあるが、併しそれは比較的少いので、多くは入聲であつたと云

ふ目當が十分つく。以下にその兩方の場合を見る。

一、入聲音の俵の見えて居ないもの。これは特別のものに多い。

益 ya (yak) Aya 安益 (讃岐郡名)

樂 ra (rak, lak) Sagara 相樂

樂 ra (rak, lak) Sidara 設樂

これらの益、樂は日本式の入聲では益 yak-u 樂 rak-u である。上例ではそれから ya, ra が残つたとすると・K (U), (K)・U は消えたわけである。然るに本来日本語ではその音韻に・K (U) となる時に・K の部分が消滅することが多い。その爲め支那の入聲から来た・K (U) の・K をも同様に drop してしまふ形迹の見られるものがある。即ち、

samu-k → samu-u → samu

takak-u → taka-u → takau, (ō)

にならつて次の如き現象が起つて居る。

格 kaku → kau → kau (ō) 格子

急 kip-u → ki-u → ki-u (yū) 急須

方言に急須を kib-i-šo など云ふこの kib は kip, kif に関係があるがキウス (kinsu) では入聲消滅

である。以上の如き益、樂、格、急はみな入聲が見えて居ない例である。

二、入聲音の俵の辿られるもの

これは逆の同化 (Regressive の Assimilation) の爲めで入聲音の語尾音そのものは次の音綴の語頭音 (Anlaut Konsonant) と同じ音にかはる然しその二重子音 (Doppel Konsonante) と必ずなつて居る點で始めの音綴が素と入聲音であつたことがわかるのである。これには音の力の這入る accent の場所はどこにあらうとも、それには關係しないのである。例へば

・K →

六 rok, (lok) → rop 六本 rop-pon

百 hyak, (pak) → hyak 百間 hyak-ken

骨 kot → kok 骨髻 kok-kak

骨 kot → kot 骨董 kot-tō

・P →

納 nap → nat 納豆 nat-tō

合 kap → kas 合戦 kas-sen

併し上例には入聲本來の三つの區別は到底現はれない。骨 kot の T が T として現はれるのは偶然

的であつて、次に來る子音次第で如何様にでもかはりうる。

骨 kot——骨董 kot-tō 骨骼 kok-kak 骨粉 kop-pun, 骨相 Kos-so などの如く kot, kok, kop, kos ……となる。猪狩幸之助氏はその著、漢文典にこれらの逆の同化 (Regressive の Assimilation) をば 凡べて T となる故に促音ツとなるとある。けれども、T となることは寧ろ場合が少ないやうである。殊に合 kap が合戦 kassen となるといふなどに一旦 kap が kat- となりて後 kas となると考へるの はいかがであらう。むしろ kap-sen 原音がすぐ S の同化で即ち kassen, kassen となつたものであら うと思はれる。

以上、戦、董、粉、相、豆、間などに今假りに入聲でない字音を先に立たしめて發音して見ても、 その間に二重子音 (doppelkonsonante) は起らない。即ち六間 rok-ken 十間 zik-ken 一間 ik-ken などには入聲促音が見えるが二間 niken, sangen 五間 go-ken などには起らない。それ故この促音の 起ることで入聲如何の見わけがつく。

次には音綴がもとは入聲のものであつたが後、日本で母音を添へたもの。これには入聲の語尾音を 幾分か變ずることが多い。T を tch 即ち t となしたり、K を G となしたり、P を F にしたりする日 本訛がある。

麥 bak-u ……………mug-i

剝	hak-u ……………	hag-i
熟	iyuk-u ……………	nig-i
牧	bok-u ……………	mak-i
設	set-č'u ……………	šid-a
節	setč-u ……………	šet-i
秩	šitč-u ……………	čit-i
澁	šip-u ……………	šib-u
悒	yip-u ……………	yib-u
揖	yip-u ……………	yib-u

(一) 倭名抄

今の澁の音 sin 悒 yiu などは中間の p, (b) が drop したものである。それ故字音と認められて居る 澁悒には入聲はたどられない。けれども日本語のうちには十分これらの辿られるものも少くない。

以上日本の入聲の部であげたものを北平のものに比べて見れば、

K入聲	日本	北平	日本	北平
益	{yak-u	i	{mug-i	mu
	{yek-i	i	{bak-u	mu

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

樂	rak-u	la	剝	hak-u	po
格	kak-u	ka	熟	iyuk-u	šau
六	rok-u	liu	牧	mak-i	mu
.T入聲	日本	北平	日本	日本	北平
骨	kot-su	ku	設	šet-čü	še
節	šet-čü	čie	秩	čit-čü	čü
.P入聲	日本	北平	日本	日本	北平
合	go (kap-u)	ka	澁	šyu (sib-u)	se
納	nō (nap-u)	na	他	yü (yip-u)	yi
揖	siu (sip-u)	čü			

以上の例によつて見ても、日本に入聲音の訛りが或は字音の内に或は日本語と考へられて居る word のうちに見出される。

以上にあげた入聲音存在の諸地方を map の上に現はせば次の如くなる。

K, T, P のうち、

日本にはPが消え、

朝鮮にはTがLとなり、

上海には T, p もみなK又はその脱化したHに歸して居り、

福州には T, p 共にKのみに歸し、

廈門、K, T, P あり、

入聲音 K, T, P の現状分布地圖



(イ)(ロ)

(イ)は入聲の消滅を示す。

北平官話に於ける音韻の如し。

(ロ)は入聲の現存を示す。

福州、廣州の音韻及び日鮮の字音の如し。

汕頭、K・T・Pあり、
廣東、K・T・Pあり、

安南、K・T・P三者が完備して居る。

(1) Giles: Chinese Engl. Dic. MacGowan, Amoy Colloquial, Edkins: Shanghai Dialect.

今以上にあげた安南、廣東、福州、浙江、北平、朝鮮、日本にわたつて同一のもの入聲音如何を表であらせば次の如くなる。例へば、

	(1) 安南	廣東	福州	温州	北平	朝鮮	日本
石	t'ak	sek	sik	zi	si	sök	šak-u sek-i
角	giak	kok	kauk	ko	čiao	kak	kak-u
必	têt	pit	peik	pi,bi	pi	p'il	hit-su
突	dout	têt	touk	dö	t'u	tol	tot-su
挾	hiep	hip	hieik	ye	šia	hiöp	kep-u
十	tap	šöp	seik	zai	ši	sip	sip-u

(1) Giles: Chinese, Engl.

これで支那の南方方言、安南、朝鮮、日本に入聲のあることの一斑が推される。尙、安南の内部の

ものを見ては次の如きものがある。

交趾支那

東京

支那(南方方言)

目	mok	mok	muk, bok
六	lak	luk	luk
水	nak	nak	šui
一	mot	mot	it
日	nhet	nit	jit
十	taap	tap	tsap(廈門)

苗族にも華苗に lek (湯) の入聲あり、又 Mon, Mong 種族に

鉢 (p'at) を p'at

墨 mok を muk

蜜 mêt を mêt

百 pak を pak

筆 pit を bet

十 tsap を ssap ㄊㄨㄥ

又巴夷 Pa-yi 族には

狹 hiep を kip

多 ta, tō を nak

愛 ai を rak

鳥 tiao, niao を nak

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

木 mok を mak

(2) Latham, Descriptive. Ethnogr. (3) MacGowan, Amoy Colloquial. (4) Lacouperie: Lg. of China bef. ore
Tai族では『*mo-tai*』の *mo* を luk 『*mo-mo*』を luk-sao. 尙數詞についても入聲音と見ゆる形を有して居つて、例へば次の如きものにそれがあらはれて居る。今それを隣族の Tai の言葉に比較して見るに、その何れもが支那の方の入聲の形に又よく似て居る。即ち

	Shan	Tai	支那(廣東)
六	ok	hok	luk
七	set	tset	ts'et
八	pet	pet	pat
十	sip	sip	sip
尙、更に西方にすんでビルマ、Tibet の方面で見ると、			
	Tibet	Burma	支那(廣東)
六	{druk d'rug		luk
曲	kug	kog	kuk
血	k'rag	k'yok	kiuet

目	myig	myag	muk
爾	nyid		niji

(1) 高楠博士、印度支那人種の大初同住根源地(史學雜誌、九の十一)

緬甸 (Burma) の入聲に就き尙その主なるものの例證をあげるならん⁽²⁾

-K:—

kjaek	action, chose	kuæk,	mot de description
ijask	particle	zauk,	marque de potentiel

-T:—

prit	être	mrat	noble
tat	savoir	krit	ecrire
kjeit	moi		

-P:—

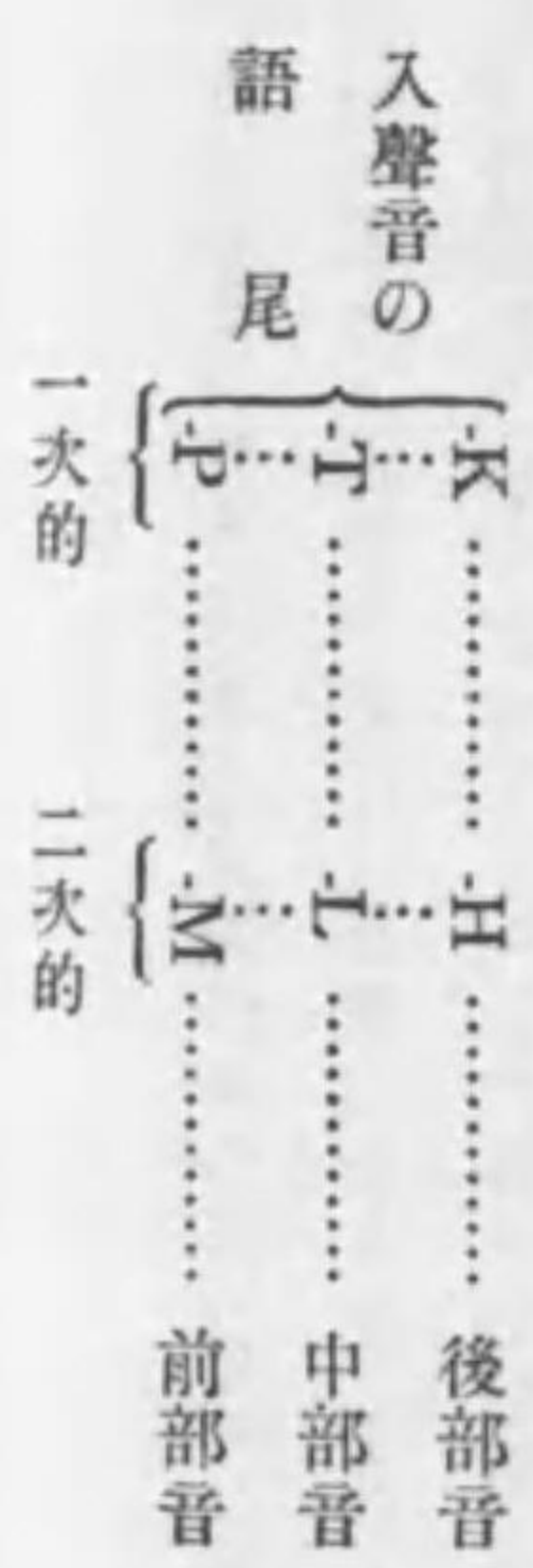
hop	ce, celui-la	kjap,	mot de description
kap-zon	tons, tonte		

(2) Schliermacher: De L'influence de l'écriture sur langue.

(1) 小川尚義氏の言 (2) Gabelentz: chin. grammatik.

G. V. D. Gabelentz の支那文典 (Ch. Grammatik. s. 100 以下参照)。

以前に朝鮮の音でLはTにあたることはあるけれどもLは入聲音でないと云ふことを述べておいたが、このMもLと同様でPの入聲にあたると云ふただけは云はれるかも知れぬ。併しMは入聲ではない。それに又意義の程度上の差を示す爲めにPから分岐 (differentiate) したものとみられることがあるかも知れない。それ故上海のHがKにあたり、朝鮮のLがTにあつて居ると同様にMがPに該當して居るとは云ひかねるけれども以上の例に於けるM、P兩方の存在は或は音義共に相關係する所があるのではあるまいかと思はれる。且つPの場合が普通で地方によつて比較的稀にMの方があるから有聲 (stimmhaft) のLなどのやうに、このMの有聲 (stimmhaft) も入聲からの轉音としてゆるまつたものではあるまいかと思はれる。果して然らば入聲音を廣義に解して一次的、二次的とすると、その發音 (articulation) の場所を三大別して次の如くに暫く分類せられる。



歴史上の觀察

此れ迄入聲音の地理上の觀察の所で述べた諸種の外民族の用ひて居る所の聲音は、幾分たりとも最古の漢民族の音韻状態を示して居るものとして認めて可なるものは、根本的の疑問である。従つてかれらの入聲の存在が直ちに支那最古のそれを律せしむるだけの信頼す可き價があるか、否かもわからぬ。けれども一般の言語、音韻分布の上から見るに多くは、深山幽谿の僻地、交通不便の邊陲で、政治上の擾亂變動などの少なかつた地方には、古音とか古語とかが残りがちであるから、これによつて雲南、貴州の奥よりヒマラーヤ (Himalaya) のあたりにかけて擴がれる諸族の言語に、殆んど皆入聲 (必しも支那南方の通りの入聲音とは斷言できない) があるのは或は支那語の元始時代の音韻のありさまを告げて居る一端ではあるまいかと思はれる。

堯典などに見える字音を果して六朝以後の韻書の方法による音で律して不都合はないかどうか。これ亦頗るうたがはしい。今、上代の言語を骨子とした文で事迹を記したものと傳へられて居る禹貢 (これは後人の擬作と云ふ説が有力であるけれども) から一例をとつて見るに、

禹貢、
禹敷土。隨山刊木。奠高山大川。冀州既載。壺口治梁。及岐既修。太原至于岳陽。覃懷底績。至于衡漳。厥土惟白壤。厥賦惟上上錯。厥田中中。恒衛既從。大陸既作。島夷皮服。夾右碣石。入于河。

第五章 支那古韻 M, T, P の沿革と由来

このうちにある入聲を科學的に確かに入聲と定めることはむづかしい。唯外民族の言語に入聲があることを支那最古のものと假定し、次に云ふが如き西曆紀元前一二世紀の頃の支那の文獻に入聲のあることを認めるならば、その中間の禹貢などには定めし入聲の多かつたことであらうと推察せられる。支那上代の文獻のうちで、幾分か科學的に入聲音の存在の推察せられるのは、前漢の頃からの音釋で窺はれる。併し音譯には心理上の作用が加かり、或は歴史的 (traditionally) に音譯法を襲用して時の音を必ずしも精密に寫さない。殊に語頭音 (Initialconsonant) の符合することを主眼として音譯するから、その韻殊に入聲の .K, .T, .P などの微細 (delicate) の點は利用せられない方が普通と見られる程である。それ故入聲音が音譯上に見はれて居るのは、寧ろ偶然的の符合であるかも知れない。けれども一方から見ると近頃南方方言の音譯に、

- 埃及 Ai-gip, Egypt
 甘察加 Kam-tsat-ka, Kamtchatka
 などの例もある位で又朝鮮、日本などにも
 伊都烈 Israel朝鮮にはTの入聲をLにする。
 浦鹽斯德 Uradivostock.....日本式の音譯、
 烈、徳はその語尾音 (final) を利用して居るものである。

此の側から見ると微細な入聲音 .K, .T, .P などが全く等閑視 (neglect) せられてばかり居たとも思はれない。以下に歴史の考證で確實と見られて居る音譯語のうちから、入聲音を利用して居るものと思はれるものを列挙する。

漢書	怛恒	yap-tat	yaptal ^(?)
	翕侯	hyap-k'u	jabgu
	葉護	yap-k'u	jabgu
	葉縣	yap-k'ien	jabgu
後漢書	濮達	p'ok-tat	bakhtria
	撲達	p'ok-tat	bakhtria
	發(羌)	p'at	bot
	冒頓	bok-tun	bagatur
魏書	勿吉	buk-kit	bagatur
	擅越	dan-wot	danapati (後魏水經註)
	麻囉抹	ma-la-bat	mirbāt
	達摩笈多	t'at-ma-gip-ta,	dharmagouptās

(大)迦葉 ka-siep, (mahā) kassapa
 迦葉遣 ka-siep-wei, kaçyapiyās
 迦葉惟 ka-siep-wei kaçyapiyās

(1) 白鳥博士講義 (2) 高橋博士

このうちの入聲が原語のとほりの音をうつしたものととして、それを日本音、北平音にくらべると

K:—	音譯	日本	北平	音譯	日本	北平
	濃	bak	bak-u	發	bod	pats-u fa
	撲	bak	bok-u	越	pat	wets-u yie
	冒	bag	bok-u	抹	bat	mats-u mu
P:—	音譯	日本	北平			
	旭	yap	ip-u	i		
	翁	yap	kip-u	ši		
	葉	yap	ep-u	ye		

葉	gyap	sep-u	ye
笈	goup	kip-u	çi

これらのうちTは朝鮮でLに訛つて居るが如くに、T、Lは兩者その發音の位置が近い爲め、音譯上にもその訛が見られる。こは單にLのみではなくRにもあてられて居ることがある。無論これも偶然と云はば云はれるかもしれないが、その類例の如何にも多いのは或は音韻上の關係で、自然と左様につかはれて居たのではあるまいか。音譯の常として例外の少くないことは此れに限つた譯ではないが、次下に此のTがLとRの音譯につかはれたものをあげる。

T—>L:—	關	ket	→	kel	關特勅	kültägin ⁽¹⁾
	密	mêt	→	mél	哈密	khamul
	密	mêt	→	mél	拔悉密	basmal
-T:—R:—	突	t'ut	→	t,ur	突騎施	türgäsch
	紇	t'ut	→	k'ur	回紇	uigur
	黠	kit	→	kir	黠戛斯	kirgisen

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

結 ket → kir 結骨 kirgiz
 葛 kat → kar 葛祿 karluk

入聲音は又好調 (Euphony) の爲めに用ひられることがある。即ち次に K, J, P. で始まる音綴を明瞭に且つ強く發音せしむる爲めに、同性質の入聲音をすぐその前に置く。例へば佛典などに *Pai amiti* の *ti* を帝 *ti* でうつした上に、その前の *mi* を唯の *mi* 彌などではうつさなから *mit* 蜜でうつして居る。つまり破裂音の *ti* は *mit-ti* となるから *mi-ti* 彌帝とするよりもその響きがつよ。斯様に Euphony でつかはれた入聲音の例を更に見ると、(佛典より例をとる)

- K K:—
 釋迦蜜多羅……………*šak-ka*……………*Čäkyanitra*⁽¹⁾
 彌伽釋仗……………*šak-kio*……………*Méghacikhá*
 半擇迦……………*tak-ka*……………*Pandaka*
 ·T T:—
 末底僧訶……………*mat-ti*……………*matisiṅha*
 佛馱斯那……………*but-da*……………*bouddhasēna*
 摩訶伐那僧伽藍摩……………*vat-na*……………*Mahāvanassaṅghārāma*

(1) 白鳥博士講義 (2) Hirth Nachwort zur Tunyokon. (3) St. Julien Methode pour

·P P:—
 鳩摩羅什婆……………*sip-p'a*, *koumâradjiva*⁽¹⁾
 迦葉波……………*siep-pa*, *kâgyapa*
 時としては正しく *kk*, *tt*, *pp* と重なるならで前の方の入聲の ·K, ·T, ·P が各他の別の性質の破裂音 (Verschlusslaute) に先立つ、*kt*, *kp*, *tk* などとなるが如きもの、即ちこれである。例へば、

薩婆愼若提婆……………*nak-de*, *sarvadjñadēva*⁽²⁾
 瞞提木底……………*muk-tē*, *pūimuttain*

まかし若提、木底などの提 (de) 底 (ti) の音の爲めに前の K は同化されて宛も T であつた如くなる。つまり若提は *naddē* 木底は *mutte* と云ふが如き心もちで *nadē*, *mutta* の音譯となつたものと見られる。

要するに以上入聲音の音譯上のあらはれ方は單に入聲として現はれて居る場合と、複合して表はれて居る時との二様になる。然らば *yaptal* が他悞 *yap-tat* でうつされて居る場合はその P をどちらの場合の例と見るか。若し *ta* の響を明かにする爲めにその前に入聲音を用ひたとすると、他が *yap*

と云ふ入聲のPそのものを有して居ることが主眼にならなくなる。けれども原語が *yattal* でなくて *yap-tal* であつたのであれば怛怛と云ふ文字の場合にはやはり怛の *yap* は *ta* の綴音の爲めでなくて *yap* と云ふ原音の音譯と見る方が適當ではあるまいかと思はれる。次に以上の場合よりも更に入聲が最も明に見えて居る音譯に就いて云へば、音譯せられた音綴の次の音綴に母音の存せる原語をうつした場合のものである。例へば、

薩 *sat* —— 摩訶薩 *mahā-satto*⁽¹⁾
 弗 *put* —— 波陀利弗 *pāṭaliputto* (*pāṭi* の音譯参照)
 葉 *sep* —— 迦葉 *kācyapa*

以上の如く入聲の存在は正史の上にも、佛典の上にも共に窺ふことが出来る。St. Julien はその著 *Méthode pour Déchiffrer et Transcrire les Noms Sankris* の始めの部分に梵漢音譯の秘訣を云つて居る、その中にKの前では *siang* が *cañ* にあてられ *yang* が *añ* にあてられたことがあるなどのことは云つて居る。(S. XIV. A) まかし入聲音がいかにしてたどられるかと云ふことに關しては云つてない。

(1) St. Julien: *Méthode*.

音譯の上に入聲が辿られても、それは程度上的のことで入聲の *final* を正しく利用して居ないこともあ

る。又音韻變遷の爲めに入聲音の自覺が素との如くに確かでなくなり、爲めに從來入聲の利用せられて居たものでもあたらなくなる。例へば唐の時代に *Uigur* は回紇、又は回鶻などとしてうつされて居た。それが

元朝秘史に 委兀兒 *Uigur*
 長春の西遊記に 畏午兒 *Uigur*

となつて居るやうに素と紇、鶻の一字でうつされて居た *gur* が元朝には二字でうつされるやうになつた。無論 *Uigur* の *gur* を二字にわけてうつしたのは元時代の如き後世のみに限つて居るとは云へない。後漢書などにも伊吾盧として之に吾盧をあてて居る例もあるから。併し後漢書の出來た當時は一方に於て紇や鶻に入聲音がなくなつて居た爲めに吾盧としたのではない。併し又支那の音譯中には字數の多くなる爲め原語の全音を悉く擧げないこともある。まかし、茲ではその爲めの省略ではない。又元朝以後になつてからは例へば素と唐書に蒙瓦 *Mongol* とある蒙瓦をば忙豁勒に改めて元朝秘史などに見えて居る。忙豁勒は或は *Monguloid* に對する音譯であるか何かこの文字を用ひさせるわけがあつたのかも知れないが、假りに同一の *Mongol* の音譯に過ぎないとすると、忙豁勒 *mang-kuat-uk* と云ふ入聲がましい音は已に恐らく當時の音ではなくして、その入聲音の韻は唯母音のみとなつて居たのではあるまいか。即ち今の音 *mang-ka-lu* などに近いものではなかつたか。元朝に全然

入聲のなかつたかどうかは斷言ができないにしても、大體之を自覺せしむる程の入聲は既になくなつて居たものと察せられる。果して然らば、

忽必烈……*Khublai*

なども入聲の音の利用せられたと云ふよりも、寧ろ近頃の音 *ku-pi-tie* に近い入聲なしの音譯ではなかつたかと考へられる。

清朝の始めに出來た、中山傳信錄（康熙五十七年）の日本語（琉球）を音譯したもののうちに豆腐の音をうつして、

托福 *tofu*（豆腐）

と見へて居る此の托福の音の如きも全く入聲 (*ta-ku*) でないことは無論である。今日の北平官話に *tofu* と云へばオメデタウの義でその文字は托福托福と書く。全然こは入聲音でない。

山は下寅次氏セレスセッカに就ての考（史學雜誌第十七篇）

尙此近代の音譯では入聲の迹は益みえなくなつた。若し入聲として考へると、例へば

諾威 *Nak-wei, Norway,*

白令(海) *Pak-ling, Bering.*

哈德孫 *Ha-tuk-son, Hudson, (Bay.)*

達維斯 *Tat-wei-su, Davis (str.)*

の如き不一致が見られる。次に之を入聲でない今の音で考へて見ると、

諾威 *Nō-wei, Norway*

(一一)に又瑙威 *Nao-wei, norway*)

白令(海) *Poling, Bering.*

哈德孫 *Ha-ta-son, Hudson.*

達維斯 *Ta-wei-su, Davis.*

この兩方の場合を原語に比較すると無論入聲でない方の音譯が原語に近い。この外 *England* 又は *English* が英吉利 (*Ingki-li*) であつた *sahara* が撒哈拉 (*tsa-ha-lia*) であつたされて居るのも何れも入聲 *ing-ki-li*; *tsat* (集韻直列切) *ha-lat* などとしては原語を反つて遠ざかることになる。

斯くの如く近代になればなる程入聲なしの音譯が多く見られる。これは全く近代に入聲のなくなつて居ることを反映して居るのである。最も偶然的には時として近頃のものにも入聲の音譯が見えて居ることがある。例へば *saxony* 索遜尼と *sak-son-ni* するが如きこともある。併しこれは疑つてかゝる餘地がある。何となれば入聲の消滅したのは北方支那の方面だけで、浙江、福建以南には依然入聲は現存して居る。これは、既に地理上の觀察の處で云つておいたとおりである。尙之を南方音の音譯で

ないとしても、然し偶然の一致と云ふことも全然不可能でないから、音譯上に入聲の現はれたからと云つて、それで北方支那に入聲の尙現存せりと云ふ論據にはならない。況して音譯に參與する程の文筆の士が古韻の入聲を考へ中に入れなかつたとも考へられないから。

(1) 漢譯世界地圖

要するに音譯上から見たる入聲は唐宋の時代及びそれ以前にはよく表はれて居たが、それ以後には北方方面では殆んど入聲の利用せられて居るものはない。これは元、明以後になつてからは、北方支那に入聲の消滅したと云ふことを、所謂讀み分け (méthode pour déchiffer) の上に示して居るものである。若し入聲の見えるものがあればそれは多く南方の音譯であるかと思はれる。

以上は單に音譯上に入聲を單なる音の上からばかり見たのであるが、音譯といふことは、素ともと異境の語をうつすのが普通である所からして、色々の心理作用が自ら音譯の際に伴はつて来る。日本にても神代の卷にキの音が神様の名前にある場合は他のキの音の字を用ひずして、貴の字をつかつた傾向のあるやうに、支那にても同様なことが考へられる。キの音ではないが同じく心理作用の加はつて居るものと思はれるもので、例へば、

魏書に 都貨羅 Tu-ko-ala, Tokhara

とあるものを後には改めて、

唐書に 吐火羅(國) Tu-kuo-ia, Tokhara

として居る。魏書の方の音譯は財寶の考へが見え、唐書の方は地獄かなにかの考へが見えて居る。支那人の地名傳説その他山海經などに見えて居る奇説、神仙、不死、不老の思想などは、まかし文字上に關係するところはないが、近くは蒙古の語 kich (白鳥博士によると、腕力の義である)。それを音譯するに意義に聯關して、

遼史に 虎思 Kich

と音譯して居る。これなどは吐火羅の例と共によほど面白い譯しかたである。

これらは凡て入聲音がつかはれた例ではないが、かゝる傾向は時として又入聲文字の場合にも見られるのである。或は Giles の Chinese English Dic. に見えて居る儺の如き、これは佛 But, Fut の音の會意文字であるが、かゝる面白い音譯もある。

次には文字形の上のみから見て、弗 fut が dollar の略符號の \$ 字に似たるより、弗を以て之にあて、Dollar とよませるが如きこともある。之れは形を借りたものである故入聲の利用せられたものではない。

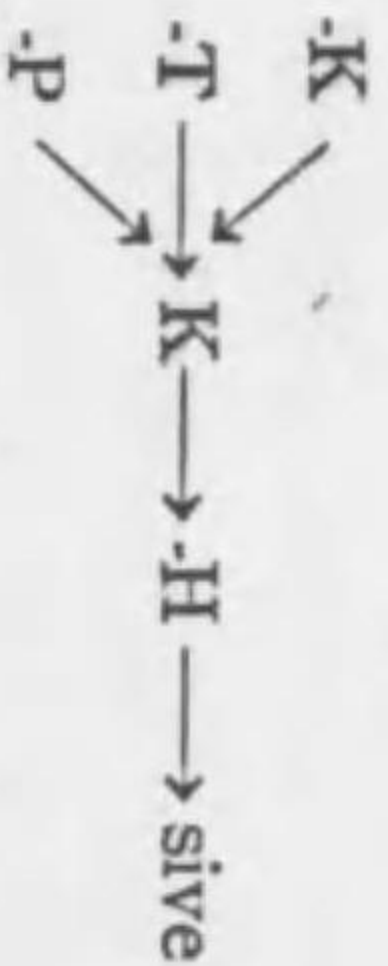
(1) 白鳥博士 Uber die Hingungstamme und der Turghustamme.

以上種々の可能 (Possibilities) を考へに入れると、音譯と云ふものは純粹に音のみの音譯は極めて少

説 set → (K) → seh → sei

などがある、こは可成りに古くからある。

があつて或る地方ではKの一種に歸し、或る地方ではそのKが更に喉頭(helkogl)の閉鎖(verschluss)にうつりかゝつて居る。即ち支那の入聲の傾向は次の圖の如くに考へられる。



この三入聲音がなぜKの入聲の一種に歸するかと云ふ理由はK T P 共に同じく破障音(explosive)故なることはもとよりなるが今 K, T, P 三種類の併立して居たときの數を統計の上で比較して見ると普通の字音 1000 字について次の如きわりあひが見出される。

入聲音の統計

K.....	526
T.....	214
P.....	207

これによつた見ると何かの理由でいつもKの類推の原則(principle)がはたらいて居る(仄 tsok

が福州で taik)。つまり母音の長さ(dauerung)をきりちぎめるのが目的であるから福州などで力のlik, liok, 疾 sit 甲の kap 法の tap のなどを凡てKのみの一種にしてしまつて、疾 cik 甲 kak 法 huak をKに發音しても事實その通話團(spr. genossenschaft)のうちで誤解を來たさないのである。

然らば母音の長さ(dauerung)の點で疾の sit 甲の kap はそれぞれ市の si 加の ka と比べていくばくの差が認められて居るか。事實は前者の si, kã に對して後者は si, ka と云ふ差であるがそれが、梵語などで昔考へられて居たやうな 1:2 or 2:4 など云ふやうな比例はたしないけれどもとにかく差のあつたことは考へられる。併しiのときとãのときは音の性質上iの方がãの方よりも永續性が大である。而してãの方はiより短かい(short)のであるのが一般である。(これは無論同一の容積の氣流を出すと假定しなければならぬ)然るにi,ãの場合でもiの方が幾分かlongでãの方はiよりは短音(short)とみられる。けれども長い(long)とか、短かい(short)とか云ふことは嚴密(strictly)にやかましい境は立てられない。

然るに入聲の K, T, P は巴にも云つたやうに有聲音(stimmton)を有して居ない。且つ入聲はK, T, P いづれでなければならぬと云ふきまりは次第になくなる傾向。

併し入聲の drop したものの中Kが素と數の多かつただけにKから來たものが最も多い。この例は可成り古くからあつた。

惡	ak	→	ahn	→	o
度	tak	→	tah	→	to
作	sak	→	sak	→	sa
數	ak	→	soh	→	su
食	sik	→	sih	→	si
讀	tok	→	toh	→	to

要するに今日の北平官話にはもとの所謂一次的の入聲も二次的の入聲もなくなつて且つ母韻(rhime)が有する長さ(Dauerung)も一般に伸びて居る。それ故入聲は北平官話には認められない。

(二) 入聲音消滅後の四聲(Tone)の状態

多綴語 (Polysyllabic) の言語にありても同音語 (Homonyms) は多くその爲めに übersetzen なる語に übersetzen へ übersetzen との二語が出来、kaki にも ka'ki (垣) kaki (牡蠣) kaki (柿)(アクトセントなし)[四國方言]の三通りが出来て居る。況して單綴語 (monosyllabic) には勢ひその必要が一層多いわけであるから、古く、入聲のあつた時代に既に他の音調即ち平、上、去などの區別もあつたであらう。韻鏡には明かにその區別が見られるが一體音調などと云ふものは突然起るものでないから更に古く否、吾人に支那語の知られ始めた時の言語には已に四聲(必ずしも四つとは云へないが)

が或る調 (tonic) の區別で存して居たに違ひない。それは單に後世のものから察せられるのみでなく、地理上外民族の語にも皆その區別が存して居るから、例へば苗族のうちの華苗には同じ plu と云ふ音質を調 (tone) で區別して、或は四つの義に或は髮の義に使ひわけて居る(鳥居龍藏氏の言傍證) 又 Abel Hovelacque の La Linguistique, Paris. 1881 によると安南 (Annamite) に六箇の音調 (tones) の區別があり、暹羅 (Siamois) や緬甸 (Burman) にも同様に或る區別が立てられて居る。

(一) Hovelacque : Linguistique. (Paris. 1881)

以上の事實から見て單綴語 (monosyllabic) の支那語に或は十分に古語などをしらべたならば四聲以上の別があつたに違ひない。同音語 (homonyms) の多い國語であるから、入聲音はくづれてもそのまま調なしにあることは殆んど考へられない。それ故平上去のどれかにかたづいて居るものとみられる。平聲は今日名辭 (terminology) の上で上平と下平とにわかれた故入聲は消えても尙今日上平、下平、上聲、去聲の區別が北平官話に存して居る。消滅した入聲 k, t, p はこの四聲の中に如何にはいりこんで居るか。今普通に知られたる素との入聲音約壹千についてその統計を取つて見るに、

四聲に配合せられたる入聲音の統計表

	k,	t,	p
上平	75	37	38
			105 }

下平	127	73	48	248
上聲	63	11	15	89
去聲	263	93	106	462
	528	214	207	949
				總計

これに示されて居る様に全数の約半分はもとの入聲から去聲に這入り、もとの全数の約四分の一は下平に入つて居る。上聲にはもとの全體の十分の一もはいつて居ない。此れに依つて、略今の四聲の各種類と素との入聲との關係がいかにあつたか、去聲がいか素との入聲に近くあつたかと云ふことがわかる。又今の四聲中最も長さ (Dauerung) の長くて調子の緩な上聲は入聲に縁の遠くて最も長さ (Dauerung) の短かくて調子の急で且つ調の上がる (steigende) 下平とは可成りに密接の關係を有して居たことも推察せられる。

以上は全く入聲のない今日の四聲から古韻を推して、とにかく入聲の存在を認めて觀察をしたのであるが、その入聲が單に吾人の豫想して居るやうな單簡な (simple) な一種の入聲であつたか、但しは多様の變種 (varieties) があつたか。これ次に考ふ可き問題である。

音調そのもの (Tone itself) と名辭 (terminology) とは多くは符合しない。このことは已に宣長翁その他の古人も四聲は大洋に乗り出した小舟の舵と同然であると云つて居られる。いつもうつりかはり、又轉換を互にして居る故、同一名辭 (terminichnology) を以て實際を律することは出来ないが、假りに Carl Arendt が北部支那語 (Noesische Umgangssprache I. S. 19) に記して居る「こと」大なる誤がないとすると、支那全體を通じて、平、上、去、入の四聲はその各調 (tone) のうちが更に二種類乃至は三種にわかれて居ることが地理上の分布でうかがはれる。今 C. Arendt が同著 S. 49 以下に詳述せる所を表にして書き直すと次の如くなる。

	平聲	上聲	去聲	入聲	Tones
北平	上平 下平	"	"	(なし)	4
南京	"	"	"	"	5
客家	"	"	"	上入 中入	6
福州 廈門 漳州	"	"	上去 下去	"	7
潮州 仙頭	"	"	上去 中去 下去	"	8
廣東 古代	"	上上 下上	上去 下去	上入 中入 下入	9
現在	"	"	"	"	9

この事實によつて見ると入聲音そのものも平、上、去の調 (tones) と同様に内部がこまかくわかれ

て居る。

(1) 宣長翁漢字三音考 (2) Arendt. Northchines. Uingangspr.

地理上南方によれば、よる程入聲音の種類に富んで居ることを云つて置いたが (ㄨ, ㄒ, ㄩ, ㄲ の部參照) その變種 (varieties) につれて又調 (tones) そのものにも上入下入の二種又は上入、中入、下入の三種が見えて居る。

かゝる上下、上中下の細別は後世の方言訛りでできたものであるか、それとも ㄨ, ㄒ, ㄩ, ㄲ が古形であるやうに上下などの區別も古い時代の名残りであるか。假りにその細別が北方入聲の古形に關係があるものと見られるならば、吾人の所謂入聲も唯一種の入聲のみとしては看過することは出来ない。

四聲 (Tones) の問題はことが微妙な耳の練習 (delicate training of ears) を要する。それ故紙面の上では到底觀察を十分にすることはできない。殊に入聲の細別などに至ると今の廣東人から口授せられても十分に區別することは困難であつた。それを音の通りにこゝにかくとは全然不可能 (impossible) ではないが省く。北平官話の四聲のことも別段こゝに説明することは省いて、その代りに、四聲のこゝに關しては上に云つた C. Arendt の同著の S. 46 以下に實際的に詳述してあると云ふことを述べて置く。

(三) 入聲消滅後の音質 (Lautmaterial)

素と入聲音であつた單綴語 (monosyllables) が今如何なる音質 (Lautmaterial) を有する音綴となつて居るか。これにはその場合が非常に多くなつて居るから、一概に云ふわけにはいけない。殊にこの問題は支那語の韻の變遷、母音變遷などと關聯する所が多いのであるから益概括することは困難である。

以下には唯今日の音綴 [Sir. T. F. Wade, Tzê Erh chi (自選集) の方式 (system) に多少の斟酌を加へた發音字 (orthography) を用ひる] のうちでその中に含まれて居る入聲起源の音綴の數を示すだけに留めて、その統計を取つて見るにとする。その統計で最も多數を示す音綴が、いかなる韻にあつて、最も少ないのはどれにあるかと云ふことを見る。以下入聲音に關係ある綴音に限り數字にて示す。

a	ang	cai, c'ai (責) 14
ai	ao	can, c'an
an	ca, c'a (杜) 13	chang c'ang
	an	hsia (峽) 13
cao, c'ao	ang	hsiang
ca, c'a (轄) 17	ar	hsiao (學) 5
cei	fa (法) 12	hsie (製) 8
cen, c'an	fan	hsieng

cang, c'ang	fang	hsin
çi ç'i (及) 50	fei	hsing
çia, ç'ia (菴) 20	fan	hsiu (宿) 1
çiai' ç'iai	fang	hsung
çiang, ç'iang	fo (佛) 3	hsü (孽) 5
çiao, ç'iao (甄) 16	fou	hsüan
çie, ç'ie (柴) 41	fu (福) 26	hsüe (靜) 8
ç'ien ç'in	ha (哈) 4	hsun
ç'i ç'i (蟻) 27	hai	i (丿) 31
ç'in, ç'in	han	jan
ç'ing, ç'ing	hang	jang
çiu, ç'iu	hao	jao
çö ç'ö (輿) 33	ha (哈) 17	ja (架) 5
çon, ç'ou (轉) 2	hei (豨) 1	jan
çi, ç'ü (採) 20	han	jang

çüan, ç'üan	hang	ji (計) 2
ç'ie, ç'üe (豨) 24	hou	jou (囚) 1
çün ç'ün	hu	ju (舉) 6
çu ç'u (水) 21	hua	juan
çua, ç'ua	huai (懷) 1	jui
ç'uai, ç'uai	huan	jun
çuan, ç'uan	huang	jung
çuang, ç'uang	hui	ka, k'a (豨) 5
çui, ç'ui (癩) 1	hun	kai, k'ai
çun, ç'un	hung	kan k'an
çung, ç'ung	huo (火) 19	kang, k'ang
a (豨) 19	hsi (豨) (豨) 26	kao k'ao
ka, k'a (豨) 46	lü (社) 2	na (豨) 2
kei	lian	nei (豨) 1
kan, k'an	lie (豨) 2	nan

kang, k'ang	ku (聲) 7	naug
kou k'ou	luan	ni (聲) 1
ku, k'u (聲) 14	lun	niang
kua, k'ua	lung	nie (聲) 9
kuai, k'uai	ma	nien
kuan k'uan	mai	nin
kuang k'uang	man	ning
kuei, k'uei (聲) 4	mang	niu
kun, k'un	mao	no
kuo, k'uo (國) 13	mei	nou
la (聲) 6	man	niu
lai	mang	nŋe (聲) 3
lan	mi (聲) 5	nua
lang	miao	nuan
lao (聲) 2	mie	nun

la (聲) 17	mien	nung
lei	min	ou
lang	ming	pa, p'a (拔) 3
li (力) 23	niu	pai, p'ai (聲) 3
lia	no (末) 25	pan p'an
liang	mou	pang p'ang
liao	mu (木) 8	pao, p'ao
lie (劣) 5	n	pei, p'ei (非) 4
lien	na (聲) 5	pan, p'an
lin	nai	pang p'ang
ling	nan	pi, p'i (聲) 21
liu (六) 2	nang	piao p'iao
lo (聲)	nao	pie, p'ie
pien p'ien	suai	tsan ts'an
pin, p'in	šuan	tsang ts'ang

ping p'ing	šuang	tsao, ts'ao
po, p'ò (舶) 31	šui	tsa (仄) 23
pu, p'u (朴) 5	šun	tsei (穢) 1
sa	šuo (黠) 14	ts
sai	šsu (夬) 1	tsən, ts'an
san	ta, t'a (答) 21	tseng ts'ang
sang	tai, tai	tsò, ts'ò
sao	tan, t'an	tsou, ts'ou
sa (送) 19	tang, t'ang	tsu, ts'u (卒) 17
sang	fao, f'ao	
so (素) 11	ta, t'a (禡) 1	tsuan, ts'uan
su (素) 15	t'ei	tsui ts'ui
suan	tang t'ang	tsun ts'un
sui	ti, t'i (寤) 16	tsung ts'ung
sun	tiao, t'iao (條) 7	tzü, tz'u

sung	tie (禡) 19	wa
ša (殺) 5	tien, t'ien	wai
sai	ting, t'ing	wan
šan	tiu	wang
šang	to, t'ò (禡) 3	wei
šao	tou, t'ou	wan
ša (詔) 8	tu, t'u (禡) 6	wang
šan	tuan, t'uan	wo (禡) 6
šang	tui, t'ui	wu (物) 4
ši (禡) 11	t'un, t'un	ya (禡) 7
šu (辱) 7	tung, t'ung	yai
šua	tra, t'sa	yang
šuai	tsai, tai	yao
ye (業) 12	ying	yié (月) 25
yen	yü	yu

yin

yüang

yung

この表の括弧中に入れてある例は殆んど凡て帶氣音のつかない方のもを取つて擧げたのである。尙此の數字は K, T, P の入聲三種を合算した數を示す。

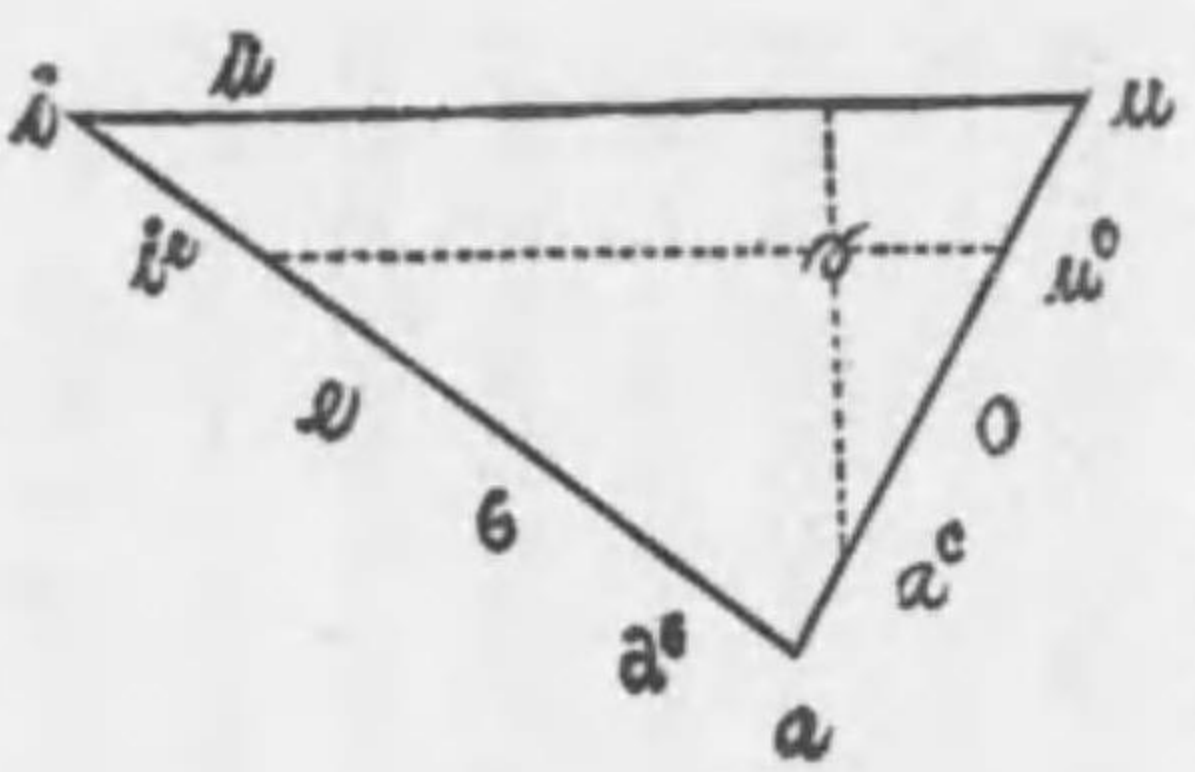
今その最も數の大なるものから順々に列擧するとその主なるものは次の如くなる。

即ち

çi	(緝)	çi	(七)	50	hsi (si)(翕)	26
ka	(陌)	k'a	(客)	46	yüe (約)	25
çie	(結)	ç'ie	(竊)	41	mo (漠)	25
ç'o	(琢)	ç'o	(韻)	33	ç'üe (掘)	24
po	(舶)	p'o	(勃)	31	li (立)	23
fu	(福)			26	pi (畢)	21
					pi' (僻)	21

全く入聲からの音韻に關係なくしてある音綴は凡て韻の語尾音 (Final) が n, ng であるものである。語尾音が母音のものには全然關係のないものは殆んどない。併し概して二重母音 (diphthong) 又は三重母音 (triphthong) よりも單母音 (single vowel) の方に多く這入りこんで居る。そのうちでも殊に顎角の最大でない方即ち I-A Basis で I に近き方、U-A の側 (basis) で U に近い方、又 I-

U Basis では I に近い方のものに主として入聲のくづれたものがある。つまり A に近い方には比較的多くない。客、舶、約などは日本の音では ak を韻をとして居るけれどもその ak の A 音は今の北平



音では何れも I 又はその方に近い發音の母音で終つて居る。支那全般を通じて U の母音は I, U の方 (殊に O など) に向つて居る。小川學士によると厦門、泉州、漳州、臺灣にもその傾きが著しいことである。それ故客、舶、約などの入聲に限つて A が他の音にかはつて居ると云ふわけではないが入聲のくづれたものにも A の音はつとめて避けて他の O 又は U, U, I, e などの顎角の小さな發音を有する韻にうつつて居ることが多い。素と A でなかつた語尾母音 (final vowels) を有して居るものは無論 A 以外の顎角の比較的小さな母音に残して居る。ç'as'ç' ak, yak, at, ap, yap, ek, et, ep, ik, it, ip, ok, ot, op, uk, ut, up, ek, et, ap などの凡ての入聲は主として i, ie, üe, a, u, o の韻 (rhimes) に歸して居ると云はれる。云ふ迄もなくこの韻は語頭音の性質如何によりても幾分か支配せられるから單獨に例へば約 yalk の ak だけが yüe の üe となつたとは云はれない。況して素と yak の ak が嚴密に ak の音であつたかどうか、或は yak と云ふよりも yalk, yek であつたかも知れない。何れにしてもこの入聲は ie などの音 (front vowels) 又は A, O などの音 (back vowels) の

うちでその兩極端に近い母音 *i* 又は *ü* などの如き韻として今日現れる。(母音三角形参照すべし)。以上は入聲音そのものについて見たのであるが又外部からの類推でなつたとも見られる。今日 *çi*, *çi* のうちに入聲から来た *ɬ* を除いても尚 200 のものがあり。 *wu* うちには入聲からの四つを除いても尚 70 の同音語 *homonyms* がある。この 200, 70 は入聲がくづれ込む前に *ɬi*, *çi* 又は *wu* であつたかはわからない。けれども兎に角以前に少からぬ *ɬi* 又は *ɬu* があつてその爲めに類推で引きつけられたものもないとは云へない。

又北方支那人一般の聽官に自ら入聲が慣れて居なくなり、音韻の大勢の向ふ通りの趣味 (*Geschmack*) に伴はれて次第に *i*, *u*, *ie* などの韻をとるに至り、他の入聲でない *ka* (加) などもその *a* を *ia* とするがやうに母音三角形 (*Vocalic triangle*) で *ɬi*, *çi* の *i*, *ü* に近いものを韻として有する綴音に向つたとも見られないことはあるまい。

或は以上の觀察より他の要素 (*elements*) が加はつて今日見るが如き音質に導いたものもあるであらう。

要するに古代の入聲は今では去聲又は下平の調で *i*, *u*, *ie*, *o*, *o* の韻に這入つて居るものが最も多いから、今事實上入聲は北平官話にないけれども、これを手懸りにさがす時は比較的容易に古今の入聲の消長が察せられるのである。

(三) 由來の部

第五章 有史時代以前 (Archaic Period) に於ける

K-, T-, P- に就いての攷

これ迄章を逐ふて述べ來つた所は支那古韻 *K*, *T*, *P* の變遷沿革に就いてのみ云つたのであつて、未だその由來に關しては述べなかつた。唯最初から *K* は *K* として存して居たものと云ふ前提で觀察したのであるが、併しこれには疑ひを入れる餘地がある。以下にその主要なる理由を擧げて支那語の有史以前 (Archaic period) 即ち Pre-historic の時代に於ける語頭音 *K*, *T*, *P* の由つて來つた経路を窺つて見ることにする。

理由の I、地理上の觀察

支那音韻史上で素と同じ韻を有して居た音綴語頭音 *K*, *S* は互に音韻上の關係があつて且つその中間の状態としては更に *K*, *H* 又は *ç* の音あることは既に *K* 音攷の處で云つた通りである。それ故例へば儉 *Kien* 險 *ɬien* (k^h*ien*) 儉 *hien* 簽 *çien* など同一の種類に屬して唯發達の狀態が違つて居る

だけの series であると云ふことがわかる。且つ諧聲の共通せる要素から見ても同一の音符^{ヤン}僉によつて居ることが見られる。その旁又は偏に意義の違ひを示す symbol がついて、それぞれちがつた文字を作つて居るに過ぎないので音韻上では同じ group のうちに含まれる。即ち

僉—K, K', H, S, C 儉、險、殮、簽、劍

然るに、同じ音符僉を有して居て且つ韻も同様であるのものにも係らず K, C の系統に音韻上這いらな

いであるものがある。例へば斂 *lien* の如きもの、尙この類のものは

僉—L 斂、激、殮、臉、檢、藪、菴
つまり僉を基としてそれに K と L との兩様の音が存在することとなるのである。

一、僉—K 僉儉檢檢險險檢劍險斂
L 斂激殮臉檢斂斂

(1) 許慎說文及段玉裁說文注參照

K, L 兩様につかはれて居る音符で今日迄に集め得たものは尙この外に次の如きものがある。

以下には従來の韻書のうちに發見せられたものを音韻變遷の歴史に徴して K, L 兩様に分類する。

勿論 K のうちには今日では C になつて居るものも又 H, S になつて居るものもある。けれどもそれらは凡て K と云ふ方の範疇のうちに收める。

二、兼—K 兼嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌
L 兼嫌嫌嫌嫌嫌嫌嫌

三、東—K 東棟棟
L 闌瀾瀾欄欄瀾瀾瀾瀾
棟棟棟棟

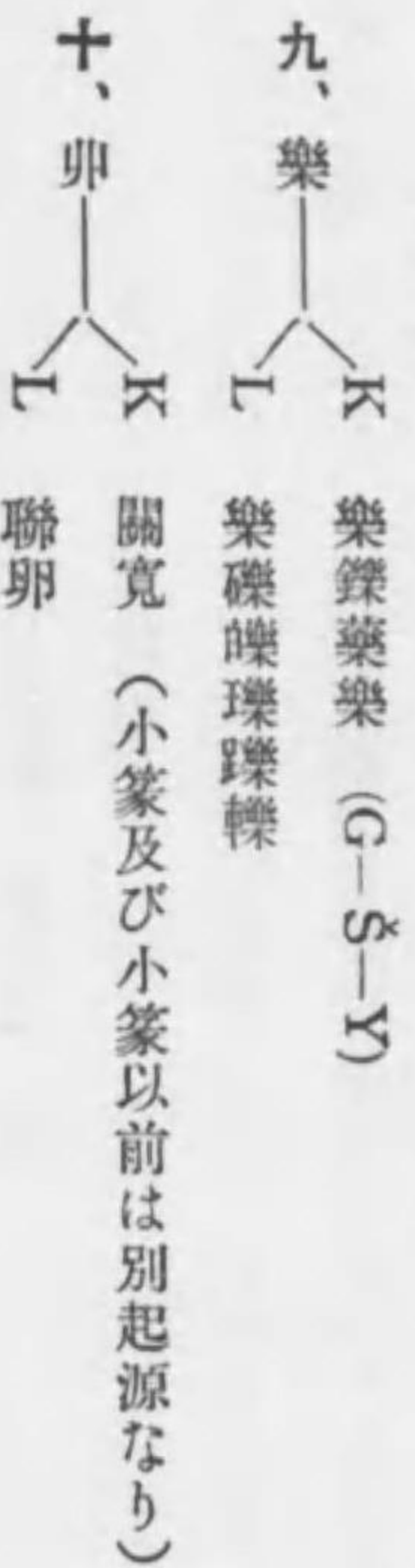
四、監—K 檻檻檻監監監監
L 藍監監監監監監監

五、各—K 各格格格格格客閣
L 洛洛洛洛洛洛略略

六、果—K 棵棵棵棵棵棵菓菓菓菓
L 裸裸

七、京—K 京鯨景鯨影 (K-Y)
L 涼涼涼涼涼

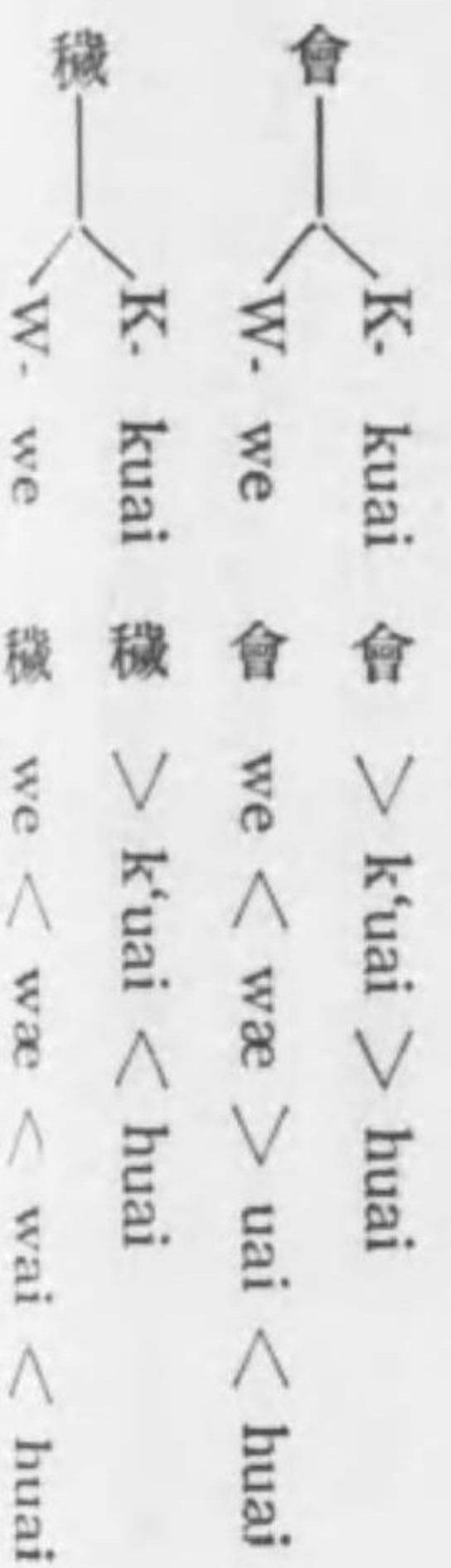
八、虎—K 虎虓琥琥處 (K-S)
L 虜虜虜虜虜虜盧盧蘆蘆



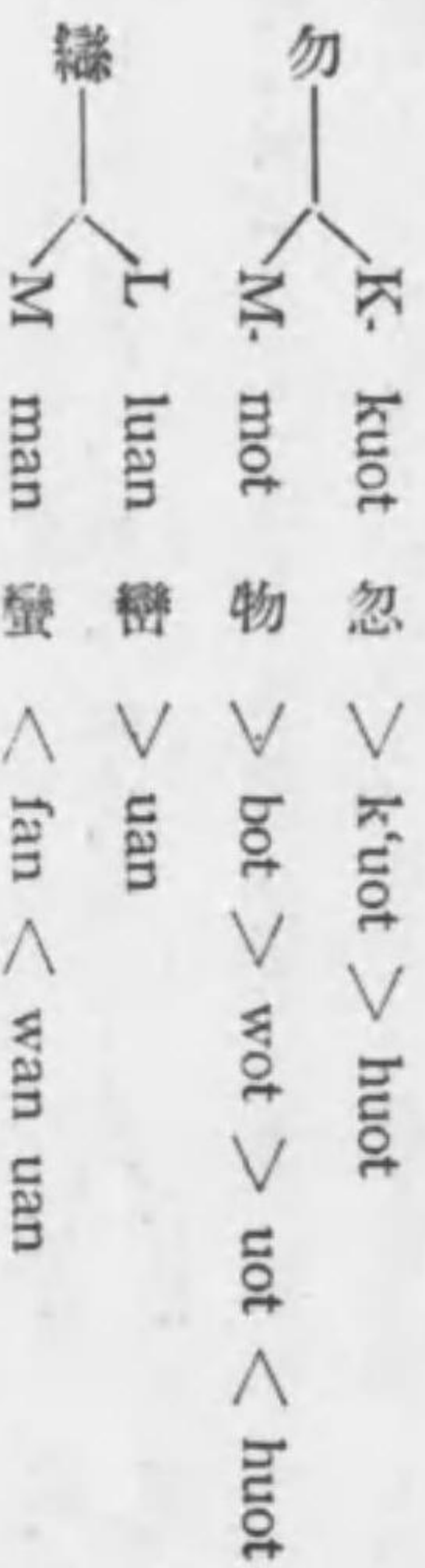
等の關係が発見せられる。

此の種の觀察はまだ世間に出でて居たものを見ない。従てこの種の現象を如何に取扱つたらよいか。その邊の研究は無論きまらない。K音とL音との間に音韻上の轉訛の理由も見出されない。けれども此の類例は定めし外にも多いことと察せられるに依り偶然の現象として看過することは出来ない。

然らばこれを如何に觀察するかといふにK, L以外の他の場合に、例へばKとWとの二様の語頭音のあるものでは kw の脱化したものたることが明な事實である如く此の K, Lの場合に Klと云ふ如き形が假定せられはしないか。K, Wの例は



Uの母音は唇を丸めること (Lippenrundung) を漸次せばめて考へ、摩擦音 (Reibelaut) のWが更にFとなりBとなりMとなつたと假定することが出来るならば、忽笏の knot と物 mot との間、又鸞 luan と蠻 man との間にも同様のことが考へられる。即ち



この L, M の方は外民族の單綴語に mlau など云ふ結合も見えて居るから、あながちに luan と man との關係で説き去ることは困難であるかも知れない。

(1) G. V. D. Gabelentz, Chinese Grammatik

要するにこれらのWにせよ、Mにせよ素とはKのあとにすぐ結合して居たものである。即ち kw, lu から来たものとみられる。

今KとLの場合に就いて考へるに之を Kl とみるならば



idg に $kn \rightarrow n$ (knight) となつた例は珍くないから、之を $kn \rightarrow n$ について考へることも、あ

ながち不可能のことではあるまい。尙 **𠄎** が K となる方を見るは L の音の性質を見なければならぬ。上代の L の性質はわからないけれども佛蘭西で L が母音化して Y になれるが如く又日本で奈良朝時代に R (支那の L とは同一視) (は出来ないけれども)

萬葉に、ヨリ yori → yoi → yu r

となつて R の音の drop して母音化してしまつて居るが如くに支那の L に於いても

kla → ka 即ち kl → k

となつたのではあるまいか。果して然るならば Prehistoric の時代に於て例へば kiam と云ふ如き音が存して居たのではあるまいか。(第三編第十八章四の部一二八一頁参照) 即ち

kiam (容れる、盛る、蔽ふの義) — kiam 籃、籃
kiam 籃、籃

若し K, L を同一視する時は韻に於て又文字の音符に於いて、又意義に於て根本に争ふ可からざる一致が存して居ることがわかる。説文には籃、籃の如きものは木に从ひ竹に从ひなどある。それは何れも意義上の細別で、主たる音義を指して居る所は監即ち説文に **監** として見えて居るものでなくてはならぬ。

この象形文字は更に盈、窻などと素とは類を同じふするもので説文の監は脚部が皿でなくて血即ち



である、皿であれば皿形で即ち石鼓に見えたこれらのしたの部分と相當する。つまり血の字



石鼓に見えた
る象形文字

は皿から來たもので、皿は石鼓その他の吉金文を考證したものによつて見ても盛る器物であるらしい。

(1) 積古齋鐘鼎款識

それ故後世の發達にかゝる籃、籃などにその義が含まれて居るわけで中には抽象的の意に轉じて監督の監 kam の義をへ生ずるに至つた。氾濫の濫 lam も何だが水などが物を蔽ふ (cover) の義から來たもので、素とは盛る義に連絡する所があるものらしい。これによると籃 kam と籃とは密接に連結する所があるものと云はれる。

尙之を確める爲めに外國の二重子音を歴朝の音證ものではないかにうつして居るか云ふことを見るに、次の如き語頭音のうつしかたをして居る。

基 ki……………kri 基督 Christ
般 pan……………pran 般若 Pragna

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

梵 FanBrā 梵摩 Brahman

これらはRの音の例ではあるけれども若しこれがLの場合にもありうるならば、支那語の初めの状態に於て後世に kl とならしめたやうな kri 又は kii その他 kan とならしめたやうな kran, klan の形が絶対になかつたと云はれまい。

(1) St. Julien. Méthode pour —

然らば kr, kl と云ふ如き Initial が太古にあつたと云ふ證據になる文献又は金文はあるかと云ふにそれは見えない。それ故こゝにはそれを解決する爲め Asia の東南部にあつて同じ單綴語の状態にあると認められて居る支那人以外の言葉のうちからその傍證を得ることとする。

理由の二、地理上の觀察

支那本部で貴州、雲南、廣西の山間に居る先住民、又西藏族その他支那西南の國境地方の谿谷に住む諸部族、國境以外例へば安南、暹羅、ビルマ等に住む土民、つまり人種學上で云ふ Miaotze, Lolo, Sifan, Moso, Shan, Tai, Lao, Gyarung, Singpho, Horpa, Serpa Tibetan などのつかつて居る言語には Initial の double consonants で出来て居るものが往々にして見られる。もつとも表面上の double consonants は容易には認められないで偶然の現象もあり得るから、それを以て直ちにその言語の聲音法であるが如くに考へることは許さないのである。例へば

日本 黒川 kuro kawa → kro kawa

楠 kusu noki → ksnoki

altslaisch aduva → dva⁽²⁾

gotisch vulna → vluna (alts)

lithauisch kirmi-s → krimis

(2) Brugmann : Grundriss.

これらの kr, kr, dv, vl などの如くにその中間に母音のあつたものとみななければならぬものもあるから一概には云へない。併し西南諸部族の殆んど全部に、kro が現はれて居るのであるから、必ずしも偶然の者のみとも見てしまはれないかと思はれる。殊に西藏は古い音韻に見えて居る複字音の現象は高楠博士に従ふと、そのローマ字の通りに、もと發音して居たものであるとのことなどを見ても、一般この方面の言語の音の有様が察せられる。以下にその種族の二三の言葉のうちから例をとつて見れば、(材料が單語のみであるのは遺憾であるが)

kl—

klai 近々 (Siamese))

khla 稼 (E)夷 pavi)

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

	khlä	枝	(")
	khlong	小川	(tai)
(pl)	plu	四つ	(苗族華苗))
	plü'	髮	(")
	pla	星	(沛南黎人))
	plungao	家	(")
(bl)	blang	葉	(交趾支那))
	bloei	空	(")
kr—				
	khrai	誰	(Siamese)
	khrai	愛ふ	(Siamese)
	krau-çau	愛	(巴夷 payi)
	krau	思ふ	(")
	khrrwai	螺	(")
	khrrau	階堂	(")

(dr)	droyue	暮	(Sifan)
(phr)	phra	崖	(Siamese)
	druk	六	(Tibetan)
	k'rag	血	(")

此の外四川の Mon-tze 族の語には次の如き數詞がある。

ar-gu	一	war-gu	五	rber-gu	九
ner-gu	二	stur-gu	六	k'adr-gu	十
ksir	三	kser-gu	七		
gasir	四	ksar-gu	八		

(1) Hsieh, A: Three years. (2) Lacouperie: Lang. of China before. (3) Latham: Descriptive Ethnogr. apply
 (4) 高楠博士、印度支那人太初同住根源地(史學雜誌第九篇)

尙南部西藏の根本の子音に就いて古今のものを比較するに、一つとして今の單子音(Single Consonant)の語韻音にして素との二重子音以上のものに比較せられないものはない。

古音	kra	k'ra	gra	tra	t'ra	dra	pra	p'ra
	ia	t'a	ja	ia	t'a	ja	ia	t'a
今音	ia	t'a	ja	ia	t'a	ja	ia	t'a

古音	bra	mra	sra	bka	<u>bkra</u>	bska	brka	
今音	da	ma	sa	ka	<u>kra</u>	ka	ka	
古音	btsa	brtsa	bga	dr̥g	bca	<u>kla</u>	<u>gla</u>	<u>bla</u>
今音	tsa	tsa	ga	ga	ca	<u>la</u>	<u>la</u>	<u>la</u>
古音	rla	sla	zla	<u>rkra</u>	rga	sta	sna	
今音	la	la	da	<u>kra</u>	ga	ta	na	

(1) Sarat Chandra Das: Tibetan English Dictionary.

支那語と比較せる可き二重子音 (double consonants) には次の如きものがある。

三	四	五	六	血	懼 ⁽²⁾	
西藏	gsum	bji	Ingo	druk	k'rag	skrrspo
支那	sam	ssu	go, wu	luk	kuet	ku
日本	sam	si	go	lik	ket	ku

次には假りに支那の單子音を今複合した子音から脱化したものと見て、他の單綴語の言語にはこれが如何に有るかと云ふに、それは以下の如くに見られる。一例を數詞の八 pat と百 pak とに就いて之を見るに。

八 百⁽³⁾

Tibet	brygad	bryva
Thaksva	bhré	bhrā
Chinese	bad (pat)	bag (pak)
Serpa	gyē	gyā
Horpa	rhiee	rhyā
Gyarung	o-ryet	ryē
Barmanesa	rhatch	ra

これらの事實によつてみても單に支那のみが單母音になつて居るのでないことがわかる。

(2) 高楠博士、歴史以前に於ける印度支那人種及其の大初同住根源地 (史學雜誌九の十一)

(3) G. v. d. Gabelentz: chinesische Grammatik.

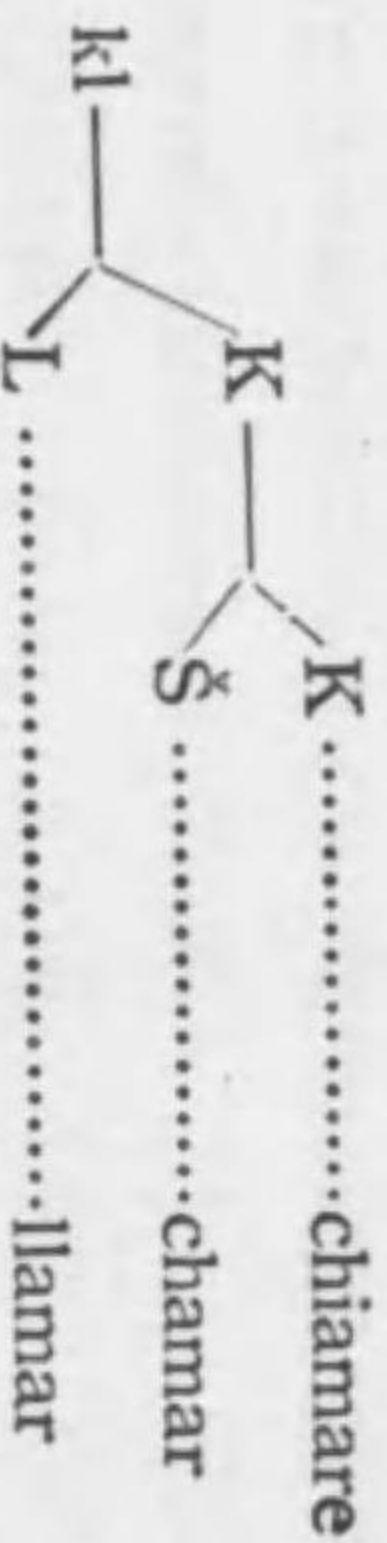
要するに藍、藍に對する元始的の音の形が複合の子音であつたことの可能 (possibilities) は以上のことによつても察せられる。つまり有史以前の或る状態に pa があつて、後世の K と L とはそれから分岐して出たものかと思はれる。

idg. に pa Romance language で kl が K と L とに分れた例がある。例へば、

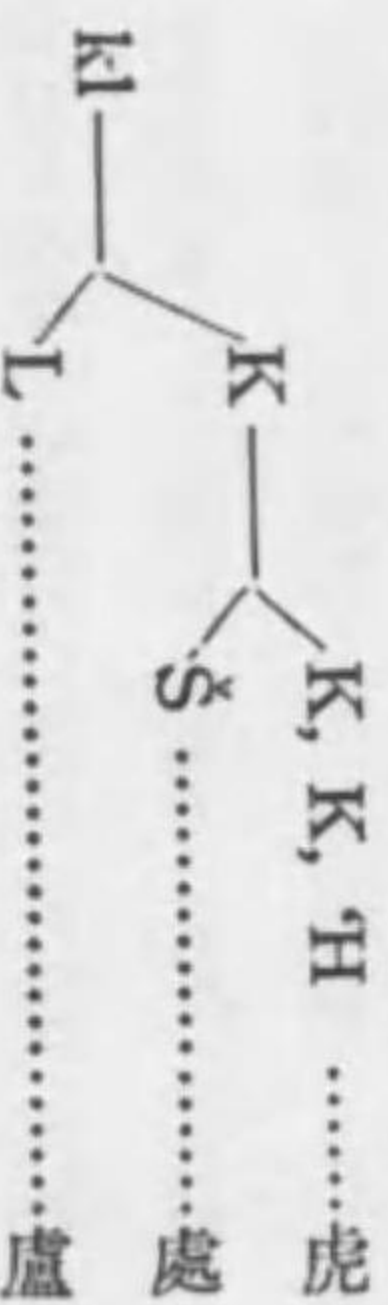
latin	clamarekl
ital	chiamasek
portug	chamareš
spain	llamari

(2) 坪井(九馬三博士直話) (俗音は jamar 又は yamar となれり)

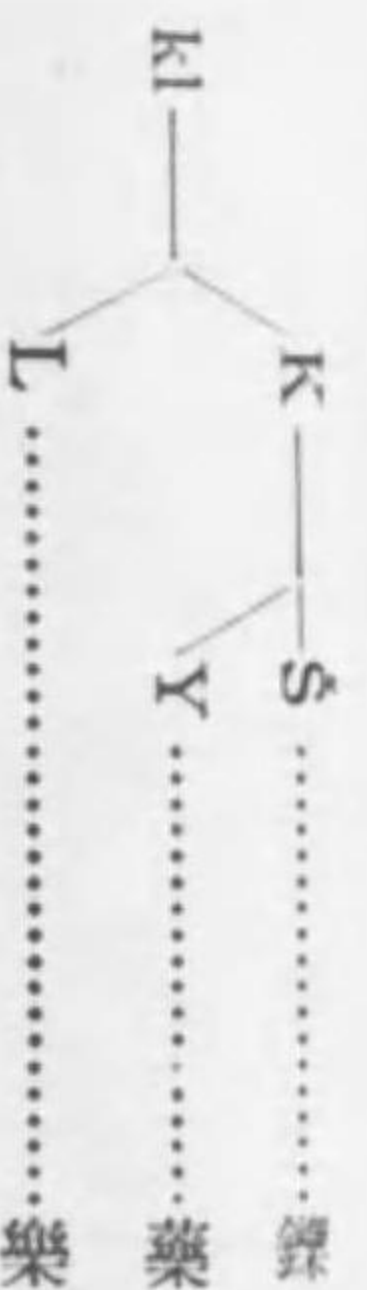
これは次の如くに考へられる。



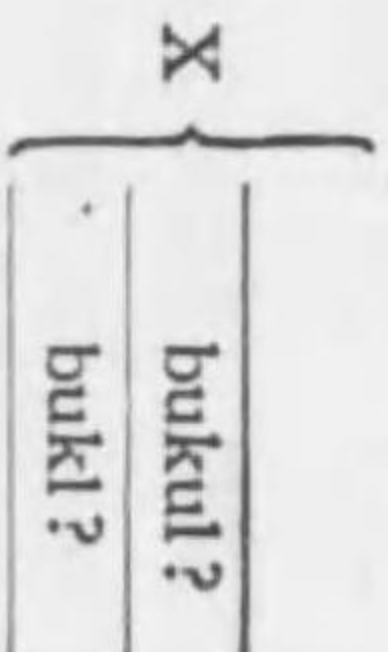
これに精細にあたるものは支那のものでは、

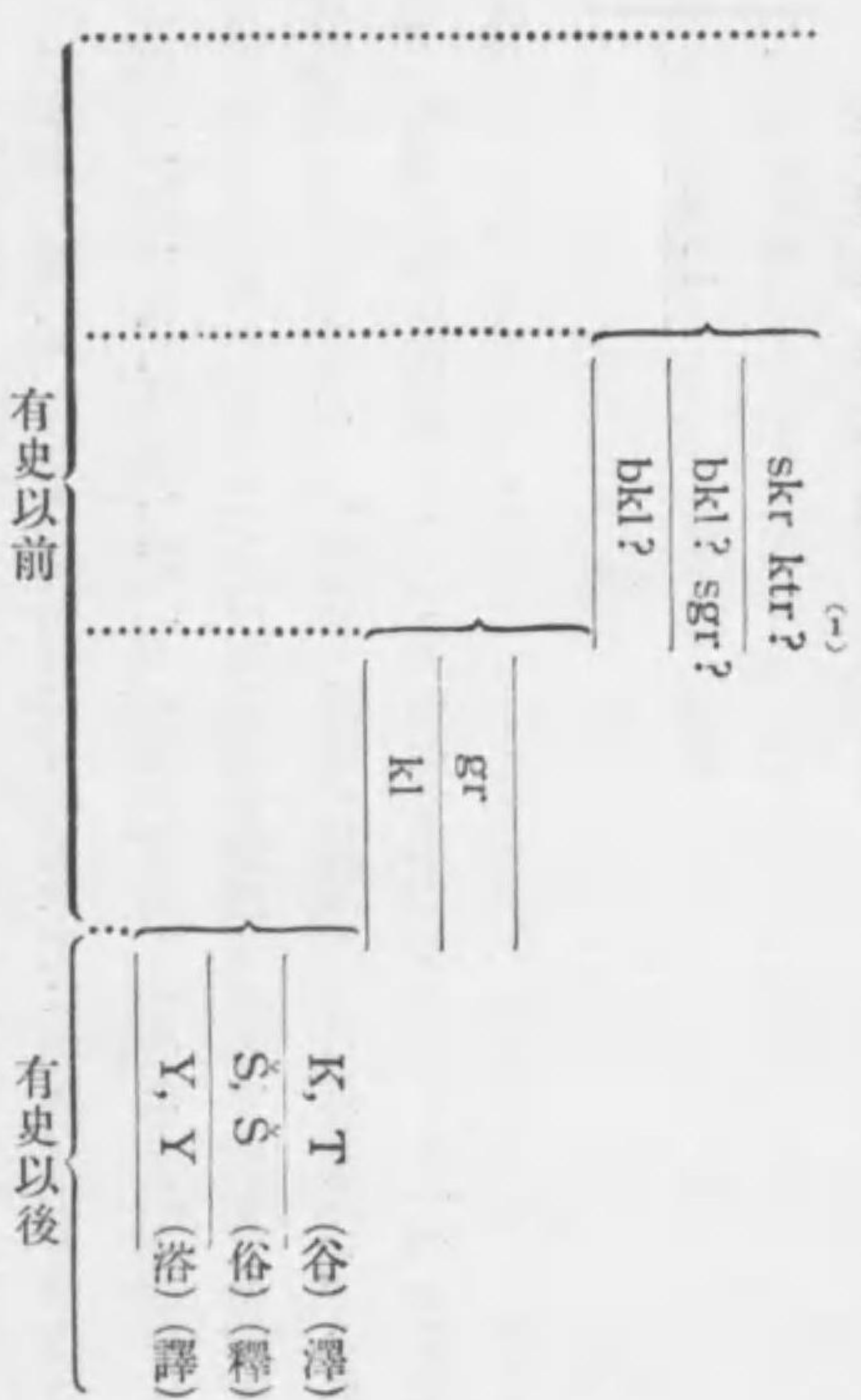


更にKの部分で發達を遂げたるものに K, S, Y のものをあてはめて見るならば



三段の音の發達は T, š, Y のみでなく K も T, š, Y (澤、釋、譯) と三段にうつつて居る。吾人
 には單音として知られて居る K, T がその後にて三段の發達をなして居ることが若し支那音否 Asia
 東南の單綴語の言語の大變遷の徑路の一斑を示して居るものとみなすことが出来るならば K そのもの
 が由來せぬ本源の形 kl の如き複子音のものも亦更に複雑な子音結合の語頭音 (Anlaut) から脱化し
 たものの第三の形ではあるまいか。その更に複雑な子音結合の語頭音とは今の西藏 (Tibet) の kra に
 對する古形 bkra, rkta, fkr, rkr の如き形を豫想したのである。勿論支那語に就いて之を考へるのは
 全く有史以前 (Pre-historic) の時代の音韻を臆測するに過ぎない。それ故茲には唯以上の事實にして
 信頼す可きものであれば之によつて次の如き不完全ながらも一つの方式の音表が考へられるであらう
 と信ずる。





以上この第五章で述べた所はK音の由来に就いて假定説を立てたのである。他のT, D たふだひの論法に含まれるとして別に論ずることを省いたのである。

(四) 結論の部

終りに臨んで以上五章迄に述べ来たつた K, T, P を併せ總括すると同時に聊かこの研究について自分が苦心した所を項目を分けて述べようと思ふ。云ふ迄もなく前人が未だ全く手をつけなかつた支那音韻の沿革史はその研究に多大の勢力と時間とが費へるのみで、據るに前人説がある譯でなく自分が此れなら安全と思ふ説を立てるにも適切の材料が容易に集つて来ず、よし、説として立たなくともせめて材料を分類することだけでもと思つたが、それさへ十分でなく、實は論文の名をけがすわけである。併し一方から思ふと廣大無邊の支那音韻學研究の *frame* だけは粗末ながらもこれで形成せられ、今後の研究の方針もこれに依つて自得せられた所が少くない。

音を分解的に研究すると云ふことは言語研究の眞意に聊か反するのであるが便宜上之が許されるならば少くとも子音の研究には先づ K, T, P と云ふ元始的の子音 (Consonants) から出發すると他は之に關聯して説かなければならないこととなる。殊に支那語の場合には入聲音迄がこの範圍内に這いと云ふ便宜なことが加はる。それでその K, T, P に就いて觀察を出來得る限り廣くして見たのであるがその結果は次の各項に見られるが如き所に達した。むろんこれは今日卒業以前に於ける自分の考へで將來の研究によりてこれがいつ又變はるか、それはわからないのである。以下には一々原語の譯語を加へず、原文のまゝでおく。

一、印歐語の音韻の研究と支那語の音韻

idg. の方では有名な Grimm の研究があり又 Sievers, Sweet, Techmer, Trautmann, Bell, Victor,

Jespersen, Rousselot, Passy, Brugmann など無数の研究者が出で、今日では動かす可からざる研究の結果が擧げられた。その Law については Grimm の formulas の如き立派な法則が立てられた。その法則は、

I. Formula ^(a)

- 1. Greek, Sanskr. kh, gh th, dh ph, bh
- 2. Gothic & C. G D B
- 3. Old, H. G. K T P

II. Formula

- 4. Greek, & C. G D B
- 5. Gothic K T P
- 6. Old H. G. ch Z F (ph)

III. Formula

- 7. Greek, & C. K T P
- 8. Gothic H (G) th (D) F (B)
- 9. Old, H. G. H (G, K) D F (B, V)

なる研究結果が出て居る。

又 Brugmann は idg. の Verschlusslaute 性質は次の如き system によらされて居る。

artic arten	Artic. stellen	Articulationsstellen			
		Linguopalatalen Gebiet			
		Labiale	Dentale	Palatale	Velare
	Ten.	P	T	K	G
	Tön. media.	B	D	G	G
	Ten. asp.	ph	th	kh	gh
	Tön. med. asp.	bh	dh	gh	gh

注意、この中の Tenues asp. は Uridg. Zeit に比較的存して居たものらしい。Brugmann はこれを居る。

次に Viotor の system は K, T, P の種の Konsonanten ばかりの通りである。Labiale, Dentale, Palatale, Gutturale, Laryng

Mit-Ver	Verschluss	b p	d t	g k	
schluss.	Nasale	m ŋ	n ŋ	n ŋ	ng ng̃ (活字のなきものは暫く代用)

第五章 支那古語 K, T, P の沿革と由来

	lateral	l	l		R	R
Mit-	liquidae gerollt	r	r̥			
Eng-		vʃuf	zʃzʃ	j	g	gYwɔ
	Reibe laute	q̄wɔ	ɖɔɔj	[q̄]		R R̄

(1) Grundriss der verg. Grammatik idg. Sprachen, vol. 1. (2) Kleine Phonetik, s. 265

即ち歐洲の語にありては子音が轉換し又 Lautverschiebung なるには常この Category に屬し Assimilation, Dissimilation の如く Combination の上の現象も亦此の表の示す所で説明がつく。最近心理學上から見る音現象も或る程度迄はこの表に基いて説明が出来る。それ故 dissimilation の例で tartoffel (伊太利語の tartufolo) が Kartoffel となつても T, K の轉換は同じ Verschlusslaute といふ理由の下に説明せられ又若し D, T, N の間に音の轉換があれば所謂 dentale (實は Linguodentale) の音であると云ふ理由で説明せられて居る。

Sparchorgan は個人的差異を有して居るものとは云ふものの構造そのものには大差があるのではなく唯そのはたらかしたの上に國民的音韻の特徴が現はれるのである。然るに支那人と Indogermanen との場合ではその organ の作用に全然相違のあるわけではあるまいが、言語そのものの發達の stage がよほどの差を有して居るのである故 idg. の音聲學上の principles が直ちにこのまゝ適用のである

ものであるかどうかは先づ第一に疑ひとなる。が併し大抵は出来る。

(イ) 適用の出来る範圍。これは至つて廣い部分を占めて居る。K, T, P 三者共に大抵はそれに従つて居る。例へば K, T, P の轉換で云へば安南で T となつて居ることがある。之を Anlaut と云ふならば、

	北平	安南		北平	安南
北	pi	ti	匹	pi	tet
偏	p̄ien	t̄ien	併	ping	ting

又 Auslaut の入聲で云ふならば、福州などに入聲の T も P も皆凡べて K の一種に引きつけられて居る現象がある。例へば

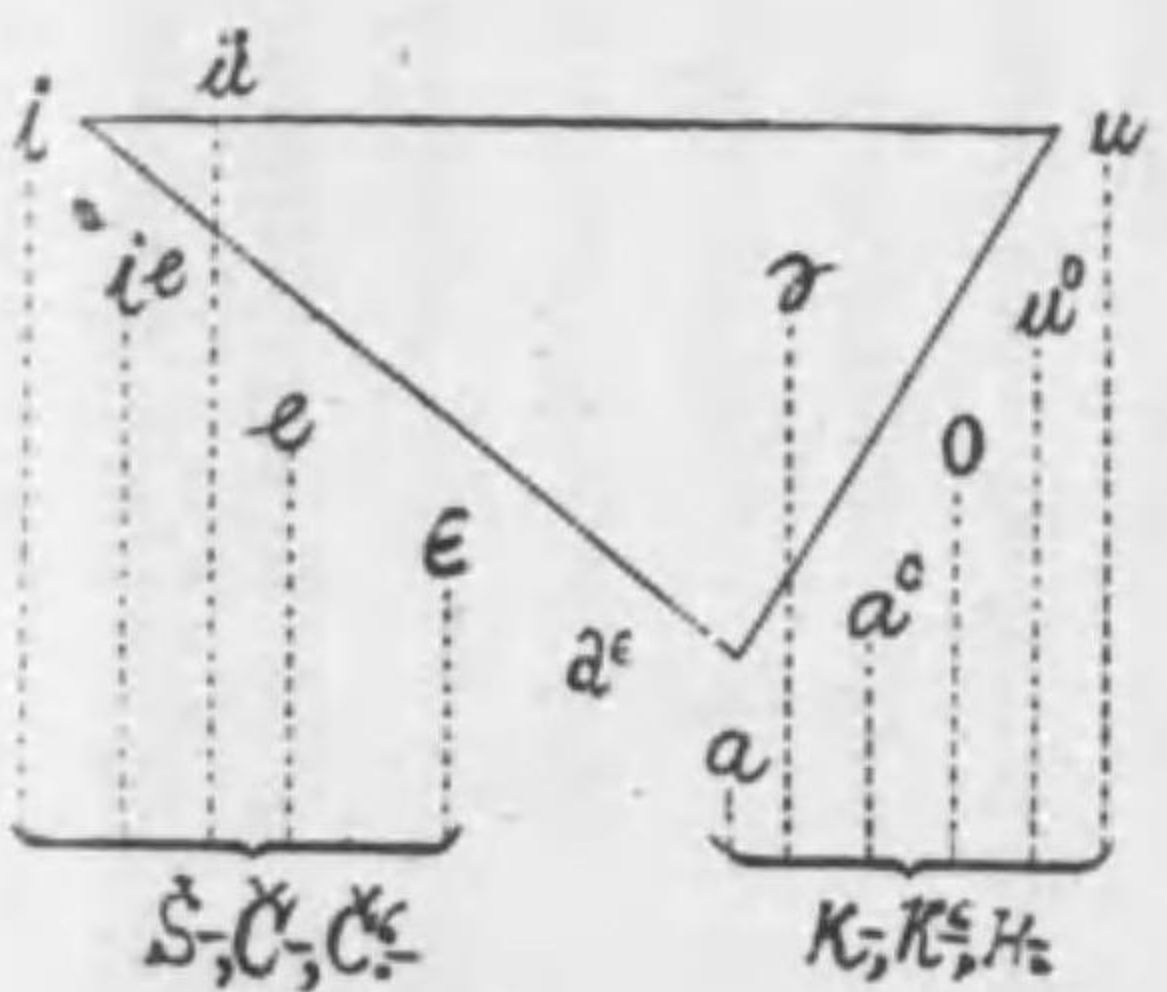
	安南	福州		安南	福州
奪	dwat	twak	輒	triep	tiək
鐵	t̄iet	t̄iek	納	nap	nak

尙 Combination の上で K, T, P が互に互に其の stimmhaft となることは普通である。次には Verschlusslaute と云ふ方の側でなく Labiale, Dentale, Velare と云ふ方から見ても idg. の方の研究がよほど助けとなる。例へば

臺灣で tsap が tsam となる。之を文字で云へば 鍾、挿が參、三となるが如きもの。又廉の *pai* の音が *mi* となり密、審の *pit* が *mit* となつたやうなものは凡て P → M の例で其の他補の時の甫が敷の時に *fu* となる、皆唇音内の轉である。官話で鳥 *tiao* が *niao* となり穢 *tai* が *lai* となり、弄 *lang* が *nang* となり、又方言で内 *nai* が *dai* となるなどは皆 dentale 内の轉である。尙 T がゆるんで *reihen* する音 S, Z, F となる。例へば當 *tang* のときの尙の音 *tang* が尙の今の音で *sang*, *fang* となるが如き亦この類の中にはいる。

次には特の字の時の Phonetical element となつて居る寺の古韻 *tok* が等の音の時に *tong* となることもあるが皆音聲學上で説明がつくのである。

(四) 直ちに適用の出来ない範圍。これは比較的範圍が廣くない。Trautmann の母音の system を今三角形で現はすとこの圖の如くになるが印歐語に存する *m* の母音は國語としての北平官話には見出されない。それが爲めにこれ等の母音にあたるものと結合するの K, T, P 音は見出さなう。即 English の I cannot など云ふ *can* の音の *ca* は *ka* でなく *ke* でなく、中間の音である。



がかかる音は北平にはないのである。又 *i* については *ti*, *pi* はあるが *ki* はないのである。*ki*, *ku* となる可きものは皆 palatalize をして *ci*, *cu* となつて居る。K に伴ふ *e* も多くは *a* (neutral) である。それ故支那の K は *u* — *a* basis に属する母音及 *e* と結合する性質を有して居る。T, P は *u* — *a* basis の母音 *e* 及び *i* — *a* basis に属するものの一部分と結合する性質を有して居る。母音と K, T, P との combine する上にかかる制限はあるが K, T, P には常に對をなして Aspirate を有して居ると云ふ規則正しい現象がある。

(一) Die sprachlaute im allgemeinen.

印度ゲルマン語には K, T, P のうち唇音 P は閉鎖がゆるみ P → F となり、更に F 又は W となる順序を探る。即ち H, W は P, F に關係のあるのがその一般で又論理上もかく考へられる。日本語にもこれは普通である。然るに支那語の場合には H, W は共に P とは關係が殆んどない。今日迄の研究では支那の H は K → K' → H となつて生じたものが多くて W の如きも *ku* の時の K が *ku* → *k'u* → *hu* となり更に U が消えて W → M となるに依つて生じたものが一般である。(M から來たのもあれどそれはここでは云はない) 即 K が漸次 drop してあとに W が發達したものと見るのである。

(一) Fr. Wade 語言白濁集

又 *idg.* の他に一般に polysyllabic の言語では急性 Springender の Lautwechsel の漸性 allmähli-

iche の Articulationsverschiebung などがよく現はれて、それが爲め Assimilation, dissimilation などの興味深い音現象が見られる。然るに支那語は元來 monosyllabic である爲め Isolated のことも Combined せられた時も Lautmaterial そのものには宛かも polysyllabic の時程には音の上に差異を來たさない。何となれば支那語には殆んど各 syllable 毎に Bedeutung があつて極めて delicate の音で區別を立て、居るのであるから従て支那語では出來得る限り Lautmaterial には變化を起さしめないやうにとめて大抵は四聲の方で先づ都合をつける。例へば有機個 $yu^2 \text{ci}^2 ka^4$ は Euphony で $yu^2 \text{ci}^2 ka^4$ として tone の方をかへる従つて母音の Dauerung 上に差が幾分生ずる。その音分量の變化の爲めに音の Lautmaterial を幾分かかへて行くのである。尙品物の時の東西 tong'si が方角の tu^2 には tong'si と云つて Accent があとにさがる。又名詞の提 ti が動詞になると tu^2 には ti^2 とい Aspirate を除いて唯 ti と發音するなどの如き皆この類である。

研究上の便利な點から云ふと支那語は isolating であるから音の value が比較的常にきまつて居る。まかし、きまつて居る性質が強いただけそれだけ Compound の時の音現象は複雑でない。これは心理學的言語の研究として支那語などには殊に最もそれを必要とするのである。何となれば synthetic の場合の音關係が單純であるものは單純であるだけそれだけ Psychologically には入りこんで居る作用があるから。

(1) Humboldt, Steinthal, Grosserie 一派の學說

以上は idg. の研究をそのまゝ支那語に適用してはいかゝはしい點であるが尙殊にその様子を異にして居る點は支那特有の Auslaut 入聲音のことである。即ち

印歐の Auslaute -K, -T, -P = Verschluss + Explosion

支那の入聲 Anstraute -K, T, P = Verschluss (nur.)

これが idg. と支那音と根本的に異なる點である。idg. の K, T, P は Auslaut であることも破裂がある。實に破障音である。併し支那のは眞の閉鎖音 Verschlusslaut であるので破裂は伴はない。故に聽覺に -K, -T, -P そのものの入聲の響は感じない。この入聲の眞の役目は rhyme の quantität を急に切りつめるのが大體である。それ故に福州方言では K の入聲の一種に他を類推して居る。入聲の主眼がきまつて後に K, T, P の細別は secondary に生ずるのであるが、閉鎖は又 Mundraum のものとばかりは限らないのでそれ故 Kehlkopf のものでも同一の目的を達する。現に浙江にある入聲音の H はこれである。尙二次的に脱化したものとして M, L などがある、併し眞の入聲は閉鎖の K, T, P, H であつてこの中 H はやがて入聲でなくなる一つ前の stage で極めて母音に近いのである。K の入聲はそれよりも今一つ前の入聲でややもすると Kehlkopf 入聲で H にうつらうとする傾きがある。古韻の入聲の words, 1000 について K, T, P の割合を見ると T, P は各二百餘に過ぎな

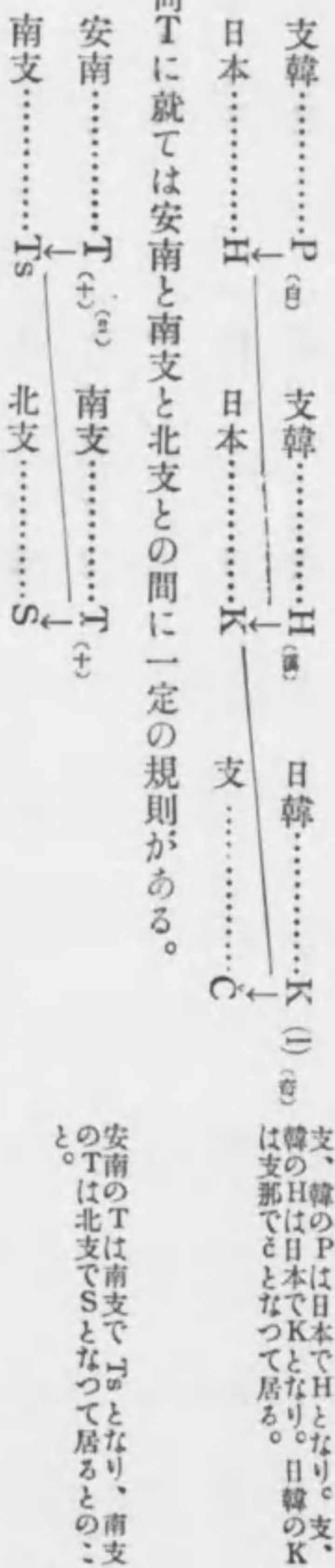
いが之に反してKは 528 の多きを占めて居る。これは全く入聲が先づKに歸し次でHとなり最後に drop して入聲の ctegrory を全く脱すると云ふ大勢を示して居るのである。その drop したときに母音には分量の増大が起る。又音の性質もかはつて来る、密 mit が mi となり絡 lak が lao となるなどその一例である。

(2) 藤岡助教授の terminology.

支那語の Auslaut K, T, P はかくの如く weak な特質を有して居るがこれは全く Verschluss のあとに Explosion を伴って居ないからである。之に反して idg. の Auslaute になると之を伴って居るが爲めに K, T, P 相互の區別が明確であるのみならず。K, T, P のもの stability もよほど強い。これは idg. の音を支那語に apply する上に最も注意すべき點の一つである。Idg. 及 Chinesisch との間には音上かかる異同がある。併しながら Chinesisch の場合には少くとも K, T, P の三者に就ては争ふ可からざるさまりが裏面に伏在して居るのである。唯その Lau- verschiebung が K, T, P の三者を通じて格一に宛かも Grimm's Law の 3 formulas の如くは行つて居ないと云ふ迄である。

けれども日支韓の三國の字音について單に現代の上から比較して見てもその語頭の音には少くとも Tを除いたK及びPの間には一つのさまりが存して居ると思はれる即ち朝鮮、支那にはKに關係のあるHがなく、又支那にはIの前に立つKが存しない。で皆Cとなつて居るのである故結局次のごとく云はれるであらうと思はれる。

Formula 91



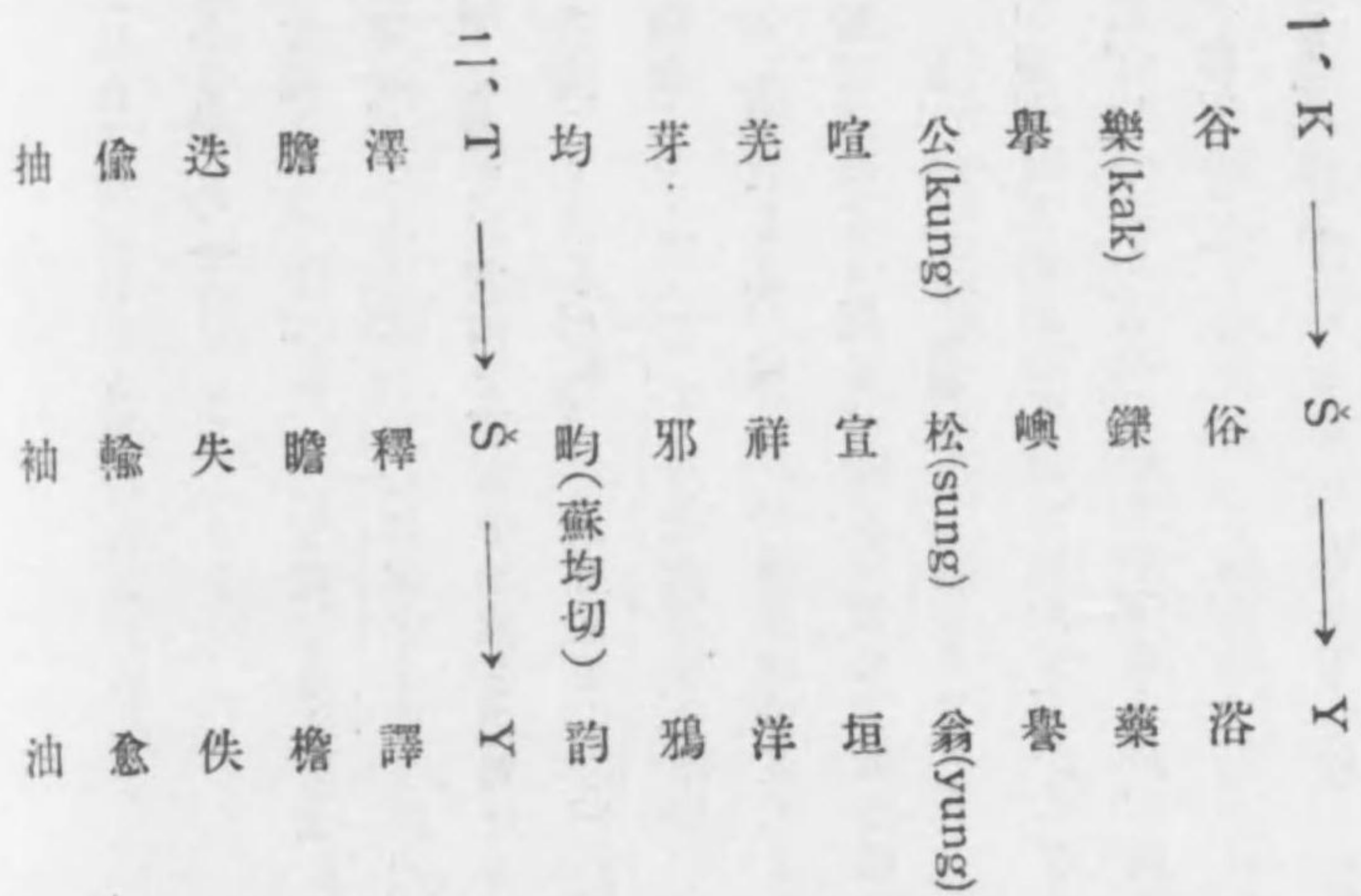
別々に見たる K, T, P が最も順序正しくうつり行く轉訛は更に他に大なる規則で總括せられる。漢字音の複雑なる現象は始めて之によりて釋くことが出来る。

(2) 安南 tap, 臺灣 tsap, 朝鮮 sip, 官話 st.

此の規則は支那語の音韻上動かす可からざる三大法則であると自分は信ずる。この法則を見出すまでには、いささか苦心を経たのであるが、尙自分は今後益々此の法則を確實ならしめんことを期して居る次第である。

Formula 911

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来



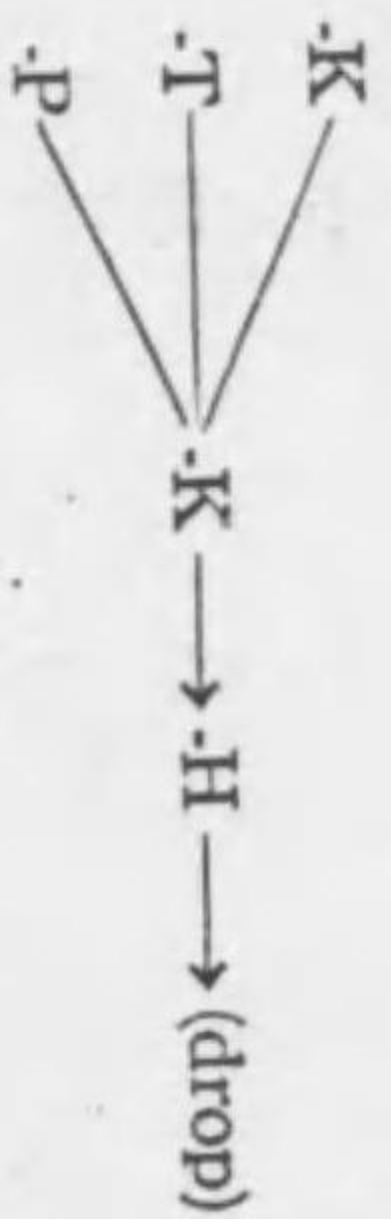
支那では P, P', F が更に H の stage に入っていることは一般には認められなから。

支那に於ける K, T, P が Anlaut である時の Lautverschiebung は原則として以上二様の For-
mulas によつて移り行くのである。次にその三音が入聲である時の Verschiebung は常に一步一步に

消滅の stage に近づくものであつて先づ K に歸し次で H に歸し極めて軟かな入聲となつて遂に drop するのである。此れは自分の假定説であるが支那古代音と今の北平音との間の音韻關係は必ずこの説明法を以て入聲の變遷沿革を明かにしなければならぬと思ふ。

即ち

Formula 〇III



尙最初の入聲 K, T, P が二次的の H, L, M にそれぞれ轉するとのあるのは、寧ろ皆特別の場合である故に Formula によつて支配せられて居るのではない。

原則としての K, T, P の音現象は大體に於て idg. の音聲法で説かれるとは云ふものの支那特有の現はれかたがあつて實に以上の如くに觀察せられるのである。以下には之を北平官話に於て又廣く地理上に於て又古くは歴史上に於て又文字の上に於て、進んでは有史以前の支那の音韻に就て適用し得たる結果を順次摘録する。

二、北平官話

北平官話の演習は二三西人の著述にもよつたが、大體は著者自身、支那人について修得した。その結果 K, T, P の音現象に就いては次の如くに見られた。

- | | | | | |
|--------------------|---|------|---|------|
| K, K' → H | 壞 | kuai | → | kuai |
| K, K' → Ċ' | 楷 | k'ai | → | ċ'ai |
| K, K', H → \$ | 行 | hang | → | šing |
| K, K', Ċ' → \$ | 較 | tiao | → | šiao |
| K, K', H, drop → Y | 驗 | šien | → | yen |
| K, K', H, drop → W | 穢 | hui | → | wai |

これらひびきとる K, K', H, Ċ, \$, Y, W の間には争はれぬ關係があることがわかる。又 G(ang) が今 Y 又は drop したる形となつて、*ひびき*

嚴 (gan) → yen

義 (gi) → i

如くになつて居る。次に T は

- | | | | | |
|------------|---|------|---|------|
| T, T' → Ċ | 屯 | t'un | → | ċun |
| T, T' → \$ | 鈞 | tiao | → | šiao |

T, T' (vowel) Y → 檐 ten → yen
 T → N 鳥 tiao → niao
 T → L 穢 tai → lai
 ㄐㄒㄓ T, T', S, Y は相互間に又 T, N, L の間にうつりかはりのあると云ふこと、D は Combination の時には起るが Einzelle の時には存しないと云ふことがわかつた。次に P 音の観察では

P → P' 啤 pan → p'an
 P' → F 仆 p'u → fu

かく P, P', F の間には明かな関係があるが、更に H へは轉じない。又 W の stage に變ずることもないと云ふことがわかつた。これは P 音が他音に變ずる様を見たのであるが官話の P には元來四通りの區別があるのである。即ち、

- 一、抛 Dao 扞^(ㄊ)..... 撲アオ (撲の手偏にアオの合體)
- 二、包 P'ao 冎..... トアオ
- 三、票 piao 𠵹..... 皮アオ
- 四、彪 P'iao 𠵹..... 必アオ

(1) 伊澤修二氏視話應用清國官話韻鏡

ト必、包、彪は半濁の P' 音。是れは支那特有の音である。P' の頭音は P と B との中間の發音を示したものである。Anlaute K, T, P については以上の如くである。北平官話に入聲のないと云ふことは今更云ふ迄もないが今日の形から過去に逆に想像せしむる手掛りもないではない。それはもと入聲であつたとゞに front vowel を有して居たものは i, ie の韻殊に ü, üe (緝、結の如く) に最も多く素と backvowel を有して居たものは E, O の韻殊に ke, xo (隔疎) のうちに最も多く這いつて居る。これは Lautmaterial の點である。次ぎに今の四聲の上平、下平、上聲、去聲のうちでは普通のもの 1090 のうち 462 迄入聲音が去聲にはいつて居り、248 は下平にはいつて居る。最も少いのは上聲であつて 89 である。この統計はもと K Anlaut のものが最も多くあつて、その入聲音は性質上 去聲によほど近かつたことを示して居るのであると考へる。

三、古韻の地理學的分布

由來支那北部は音韻變化の Centrum となつて居るが南方は古音の保存地となつて居る。既に北平官話否北方支那語では遠くに脱した音の古形が閩越の僻地には訛り乍らもともかくも残つて居ることがある。即ち

- 北方の H, C, S, Y が南方で K で残り、
- 北方の C, Ts, S, Y が南方で T, Ts で残つて居る。

P の stability は北方の方に強くて南方ではFにゆるんで居ることがある。けれども大體は矢張り南方に古音が多く残つて居る。

K の例で云へば北方の *ʃi* (幾) *hang* (行) *ʃing* (行) は厦門で *ku* (幾) *kia* (行) である。又北方の *ya*, *sia* (狭) は客家で *kiap* (狭) である。又Tの例で云へば北方の *ʃo* (左) *ʃou* (手) *yang* (陽) は安南でそれぞれ *la* (左) *tu* (手) *danh* 又は *duong* (陽) であると云ふ風である。日韓の字音はこれ程迄に primitive の form ではない。けれどもKとTの場合には北方支那よりは古い形を大體に於て有して居る。日韓の字音に最も近い音を今日有して居る地方は厦門である。雙方の訛りをぬきにして考へると愈相接近してくる。記紀萬葉につかはれた波行音はその字の種類は108である。(P音考参照)けれども支那ではそのうち *ʃʃ* だけがFの音であとは凡てPである。FはPから出るのが一般であるから昔はその *ʃʃ* のFも或はPであつたかもしれない。日本で *hi* 北平で *tei* である肥の音は福州、安南では共に *pi* である。又北平の甫の音 *tu* も福州では *p'uo* であらはれて居る。それ故 K, T, P の三者乍ら大體南方に多く残つて居ると云はれる。而して日韓の字音もこの南方音に類似を有して居ると云ふことは争はれぬ。

(1) 記紀萬葉後名鈔 (2) 奎章全韻

次に K, T, P のにのりの音は何れの地方でも Combination のありさま次第で生じうる音であるか

ら、いづこと限るわけにはいかないが、その Combine すると否とを問はず、常ににのりの音の特質を多く有して居る地方は、浙江の全體と厦門と安南で、此の外には日本がそれである。主としてこの濁音は北方支那で K, T, P の aspirate を有しない方のものに Correspond することが多いやうである。浙江で定 *ding* 達 *da* はそれぞれ北平では *ting*, *ta* である如 *ai* の例である。無論浙江の *doa* で北平の *tao* の如き例外もないではないがそれは少い。

次に入聲音の地理學的分布を見ると誠にその現象が順序正しく行つて居る。Anlaut としての K, T, P のよく行はれて居る地方には又 Auslaut としての入聲 K, T, P も同様によく現はれて居るやうである。故に入聲音の現存地方を以て K, T, P 全部の古形が保存せられて居るが如くに見るは必ずしも不當ではあるまい。

今支那沿岸諸省に就いて入聲の存否を列擧すると次の如くなる。

- 一、山東は無論、江蘇以北には入聲音は全然ない。
- 二、浙江には温州寧波には見えないが上海にはある。但しその入聲はKの入聲のみに歸し更にあるものは極めてかすかなHの入聲にうつつて居る。
- 三、福建のうち北部の福州には三種の入聲をKの一種類に類推してしまつて他の T, P などは全然ない。

四、福建のうち南部の厦門、泉州、漳州、臺灣には三種の入聲が共存して居る。

五、廣東より東京を経て交趾支那に至る地方も亦一帯に三種の入聲は完全に保存せられて居る。
尙 Anlaut K, T, P が原則としては傳へられて居る日韓には無論又この入聲も保存せられて居る。(暫く訛りのことは考へに入れずにおく)。

六、朝鮮半島には K, P はそのままあるが T の入聲は訛つて L となつたままで傳はつて居る。日の音の如きも即ち il である。

七、日本群島には K, T, P 三者は訛つては居るが皆原則としてはある。即 K はあとにそのまま *kw* vowel を加へ T は多くは *ts*, *ç* に變じその上に vowel を加へて明に發音し、P はもと *p* のまま又は F としたものに同じく vowel を加へて居たらしい。今は P は消滅したが今でも地名又は單語のうちに *single* として又は *Compound* として残つて居る。拊 *ip*(*ib-u-suki*) 急 *kip* (*kibišo*) 漚 *sip*, (*šib-u*) 拊 *ip* (*ib-u-šeki*)。

かくの如く安南方面より廣東、福建、臺灣、日本、朝鮮にかけて殆んど一帯をなして K, T, P の古韻即ちもとの形が残つて居る。これは單に地文の上から見ると中原から、あまたの山川又は海で隔たつて居ると云ふことと海流の關係で同じ流れに沿つて居ると云ふことに歸する。その入聲が福州上

(1) William: Syllabic Dictionary of Chinese language. (2) Giles: Chinese English Dictionary.

海にあつて中間の温州あたりに存して居ないのは福州の商人が多く上海地方に航する結果であるかも知れない。何にしても閩越以南には入聲が未だ盛に残つて居る。今の閩越の音は昔南蠻缺舌と云はれて居た様に北方の音とはよほどその趣の違ふことは無論北支那の昔の入聲そのものよりかも今の南方のこれの方がきつい發音である。それ故閩越の入聲は普通の入聲と同一視せられるものではあるまいとのこと。併し昔の入聲と云ふが甚だ不明で或は今の浙江上海にある H であつた時代のものを指して云はれるのかも知れない。それ故更に以前の stage に訴へ缺舌そのものも中華の古形かも知れない。北部で素との Anlaut K が C になり T が C, S になると云ふ風に palatalization の mulierung が行はれる傾向をいつも有して居るから入聲でも素とは今の南方のそれの如くに比較的きついものであつたと思はれないこともない。

(1) 坪井(文)博士直話 (2) 服部博士直話

それ故地理上から觀た南方閩越の K, T, P はその Anlaut たる否とを問はず大體に於て北部支那の古形が南方地方の方言の中に残つて居るものと云ふ斷定を下すことが出来る。例外としての訛音のあることは無論認めなければならぬ。

南方閩粵の音は古韻を傳へて居るには違ひないけれどもこれは程度問題である。吾人の presuppose する K, T, P の音そのものを單位にして考へるとこの形をそのまま有する地方は即ち古韻保存地で

ある。併し支那の子音例へば K の音にしてもこれはもと Single Consonant としての K ではなかつた。従来の學者の觀た所では K は K として信じられ、誰もそれを疑はなかつた。併し文字の上の研究音譯の上の支那人の癖、それから外民族例へば Miaotze, Lolo, Sifan, Shan, Tai, Horpa, Seipa, Ti-betan 等のつかつて居る言語には klan, plau 等甚しきは bkian, skran, brgyad の如き音が見出される。但し Tibet などには後世では brgy の四つの子音の凡てを發音したわけではなく時として子音を文字上にかき添へるなどがあつたことである。けれども古代の Tibet の音聲法としては三つ四つの子音の結合した Anlaut があつたことは事實である。然るに此等の外民族の言語も發達の上から見ると大體に於て isolating languages であつてやはり支那語と同じく monosyllabic の stage にあるのである。又かれら外民族の environments から見ても古韻を保存する爲めには最も都合のよい深山幽谷の間にその generations を繼承して居るのであるから音の古さに於ては支那南部の海岸地方よりこの方面の方が遙かに元始的の形を多く有して居ると云ふ possibilities がある。檻の字について南方の海岸地方の kann は北方の sien, tian, tien などに比べたら勿論古い素との形であるに違ひないけれども西南の深山の間に行はれて居る言語の bkian, skran などの如き形に比べると到底同日の論でなくなる。P, T の場合でも同様である。例へば P に就いて南方の八の音 pat が Tibet の brgyad (八) にあたつたことなどを見ると P がいかに brgy に對して simplify せられた形であるかがわかる。

(6) 高橋博士 (4) Hunter: Comparative dictionary.

T. d. Lacouperie 氏 Annamite の音を以て支那古代西曆三四世紀の當時のものとして居る。手に tu の音があり石に tak の音があり陽に danh, duong の音を有せるを見れば安南音の甚だ古いと云ふことは争はれぬ。福建廣東の音よりも更に確かに古い音が残つて居る。併しその古さは漢字の始めて製作せられた位の時代より古い時代に浜することはむづかしい。つまり有史時代の最古に達することは出来るかも知れないが Tibet その他の諸言語の音韻の如く眞の有史以前の stage に浜することはない。しからば Tibet あたりの音は支那有史以前のどのあたり迄浜られるものであるのか。それはあまりに漠としてつかまへられない。

(1) T. d. Lacouperie of Language China before the Chinese.

四、支那文獻上に現れた古韻の沿革

この側の研究の中先づあぐ可きは白鳥博士の *Über die Sprache des Hiong-nu Stammes und Tung-nghu Stamme* である。尙少しく古韻に touch したのは大島正健氏の支那古韻考前編と。金井保三氏支那古韻考(東洋哲學雜誌六編の十一號)西人の側では Hirth, Nachwort zur Inschrift des Tonjukuk (W. Radloff. alttürkische Inscription der Mongolen) などを初めとし尙支那學者のもので Tung

Pao 通報とか China Review などに見せる Schlegel の研究 St. Julien の Méthode 及び Mélanges の兩著の如きものがある。併し多くは歴史の研究の爲めの方便、佛典を繙く爲めの方便で所謂 Philologisch の取扱方であつて古韻の沿革の歴史を明にすることを目的とした研究は不幸にして未だ一つも見ない局部についての物はあつても全體にわたる物はない。

漢字でかいてある古記録そのものの中から古韻を知ると云ふことは最も困難である。併し絶対に出來ないではないが外國の言語の音（例へば音譯せられた外國語の原音）を知つて支那の古記録に見える字音を判定するのである故にこれは到底精密なことはわからないのである。よし時代に於て大差のないもの例へば前漢の記録と Ptolemée の記したものととの對照が充分に出來ても音譯そのものには意義の考へが加はることがあり traditionally にうつし方の守られて居ることもあり、うつす人の耳にくるひのあることもあり、種々雑多の possibilities を一々考へると少しもあてにならなくなる。音譯に入聲音をつかふことは昔の北方支那人がなした如くに今でも南方では之を利用して居る。又日本には今 P の入聲はないけれども Egypt を埃及 (Aegyptus) とかく。これを以て直ちに今の日本に「及」は *Wai* の音でよんで居るなどと察する西人でもあれば、それは大變なまちがひであると云ふ風に、音譯で以て直に時代を推し、地方を推すことはよほど確かな根拠がなければあてにならないのである。それ故この論文では常に史的のものは白鳥博士の講義と山下學士の助力を乞ふてそれを言語學上か

ら取捨した。材料は近くは康熙五十年の中山傳信録より歴代の正史を併つて古くは兩漢書、史記の大宛傳あたり迄にわたり、あとは詩書などの文字の使ひ方その他吉金文所では石鼓の文字などを参照に取つた。

古韻の研究にはその立脚地として玉篇¹⁾を初め諸種の韻書韻鏡などを最も重く視なければならぬ筈である。併し韻書韻鏡を過重するのは全く從來の弊で兩漢は兩漢の韻、先秦は先秦の韻で見なければならぬ。六朝の末の韻書晚唐江左の韻鏡を以て再漢先秦迄に適用する風のあつたのは全く誤である。唯韻鏡は悉曇の音韻學を修め學者達が晚唐の江左音で組織したものと云ふ外には意義はない。韻鏡は支那音韻學史上の one Epoch には違ひないが音韻史全體から見ればそれ程のものではない。又反切の法が出て却て古韻はわからなくなつた。反切は基本となる字の音がいつも時と場所とで違ふ爲め、少しもこれによつて古韻又は本音の求めかたに Authority とはならない。時として反て古韻の研究に妨げとなることさへもある。故に多少の参考とはなつてもこれにたよることはできない。

(1) 顧野王之玉篇零本

それ故音譯もの韻書そのものは如何に多くあつても單にそのものだけでは古韻研究には役に立ちにくい。必ず之に Correspond する古い原語の必要なことは無論のこと。地理上の側で Anschaulich の類例の出てくると云ふこと。諧聲文字（必しも許慎の定めた諧聲文字だけでなく）の上の比較などと

互に相待つて始めて音譯ものの古いものの眞價が證明せられてくるのである。

支那古韻の研究法上に於ける文獻の取扱ひかたは實に以上の system によらなければならぬ。大島正健氏のとられた押韻法から推すのも一つの方法であるけれどもこれとても以上の system を併さなければ充分でない。かくの如く常に他方に外部の材料を参考しながら歴史的の時代に從つて文獻を取つていくのである。この方法を措いては他に到底古韻の沿革史を辿る道はない。これが唯一の方法であるだけに困難が又頗る大である。互に符合する例を眼前に集めてそれから Lautwandlung を abstrahieren すると云ふことはこの論文で最も苦心した所である。

今日弋の音 I の日本音 yok の古韻が果して集韻に見えて居るが如く逸職切音朔であるか。前漢書には Alexandria を烏弋山離とあり後漢書に Sogdiana を粟弋とある。粟弋は魏書に粟特と書き直してある。弋が lek, dia にあてられたり、特 lok の字にかきかへたりなどせられて居るのは少くとも魏書の時代又はそれ以前に弋の音が tok, tek であつた爲ではあるまいか。今も弋の字は音 tok で弋の音のもとをなして居る。安南でも弋の音は dik, duk である。yok から直に tok に派られるのではなくて中間の stage に sok がある。それは式の字にうかがはれる故に弋は tok の sok, yok の變化を有す。尙湯の lang 傷又は傷 lang yang にてもわかる如くに T—S—Y の沿革は争はれぬ。中には是之の音の如く最古の音 tai から tɛ, tɛ から tɛ に迄なつて vi とはまたなつて居ない

(一) 白鳥博士の直証

(二) Giles: Chinese English Dictionary.

音もある。(T音攷参照)。かくの如く文字上の類例と地理上の事實とを參考として文獻を見ると音韻變化の原則に支配せられて K, T, P 三音乍ら Verschluss から Reiben の音に向つて居る。即ち K, T は S の音に、P は F の音になつて、更に S は Y にすすんで居る。併しこれは原則として云はれる迄であつて、凡て皆各 Individual の場合について見なければならぬので、例へば T について漢魏の T が六朝隋唐に S になり元明清に全く凡てが Y になつたと云ふやうに悉くがその通り實顯せられたと云ふ譯では無論ない。前漢以前に既に Y に進んで居る T, K も少からずある。後世でも K, S, Y, T, S, Y の共に存して居るものがあることは云ふ迄もない。更にこまかく見ると K は C 又は H の stage を経てるとなり T も C を経てるとなつたのである。それ故 C, S, H などの音は K 又は T に歸せられ F は H に歸せられる。まかし支那には K, T, P にそれぞれの Aspirate のものもある。唯 K, T, P はその Aspirate のついたものと共に古く併立して存して居たのであらうけれども、後世 K, T, P であつて Aspirate をとりうる場合の多いとは支那語の Urzeit には Aspirate があつたら多くはなかつたが monosyllabic 發達の必要上後世になつて發達して來たものではあるまいか。idg. の方に於いてもその uridg. の Zeit にこの種の Aspirate は多く存して居なかつたであらうと Brugmann が云つて居るがこれは支那の場合にも考へられる。殊に外民族で同じ monosyllabic の

のに漢族程に多く Aspirate を有するものも多くないやうである。此の問題は尙研究を要するから斷言はしない。西人のうつつした材料及び支那人の音譯そのものには十分信頼ができない點もあるから。

(1) Brugmann: Grundriss der Vergleichende Grammatik der idg. Sprachen. vol. I s. 259.

支那語に存する子音で Konsonanten mit Enge のものは mit Verschluss のものに Verschluss に多く還元せられる。例外のことは少くて大抵はそれに歸してしまふやうである。泝れば泝る程 Verschlusslaute の音が増して行く。それによつて K, T, P の三源論を主張するのではない。けれども兒童の言語にも子音のうちで papa, mamma, toto, kaka などの如く Verschluss の音が最も先きに出るのは子音の發達の順序として Verschluss の音が primitive であると云ふ一つの例證とも見られる。J の Verschluss の音が支那の古代に多く predominate して居たと云ふことは、それ故あり得可きことである。さてその predominance のうちには自然に又細別があつたに違ひがない今日の北平官話で P の音と P^h とがあり古くは期の音に K と G とがあり達に T と D とがあつた。これは一つは地方的の差によるであらうけれども古韻そのものに K, T, P そのものの中が種々にわかれて居た爲ではあるまいか。現に廣東などにも P の音に P, P^h の二様のものが残つて居る。それが或る時代の後に Aspirate をとるに至つて二様の種類を生じたのではあるまいかと思はれる。

Aspirates で以て子音が Verdoppeln せられたのみならず後には之を四聲即ち Tones を以て更に

細別するに至つた。Tones が四つであつたとするのは古人殊に詩人文人が人爲的に假りに四つの Categories を定めただけのことであつて實は Tones は primitive stage でないかぎり少くとも七聲八聲位はあつたものと思はれる。現に南方では南京に五聲、客家に六聲、福州に七聲、仙頭に八聲、廣東に九聲(上平、下平、上上、下上、上去、下去、上入、中入、下入)と云ふが如く非常に繁雜な tones を傳へて居る地方がある。

(1) 服部博士直話 (2) Arendt: Handbuch der Nordchh. - Umgangsspr.

要するに支那に發達して居る多くの Konsonanten は Verschluss の音から出て居るものが随分あつて、それらはいつかの時代に Verschluss から reiben の音にうつつて來て生じたものである。然るに唯一つ此の順序によらないで十世紀以後、主としては十三世紀のあたりより突然多く現れ來つた子音がある。それは R の音である。これは蒙古の gur (家) udur (高い) などの R の影響であるらしい。併し塞外民族からの音の影響は必ずしもこの時を竣つて始めて起つたのではなく非常に古くからあつた筈である。何となれば蒙古人と漢人との sprachliche の Verkehr は前漢以前からあつたのであるから。尙 Uigur 族についても同様である。漢書にも之は伊吾廬などとして見えて居る。玄かし古い時代には左程にその R は支那語にはいつて居ない。この音は支那人の Sprachgefühl にはあはなかつた爲めであらうし又子音の發達から云つても R の音は漢人には articulate しにくい音であつた爲め

であらう。現にこの音だけは全く他の音に連絡する所なくして孤獨の性質を取つて居る。即ち明かに R は外來音である。然るに今日の Spoken Language では獨逸の chen, lein の如く diminutive form の Suffix として殊に婦女子に最も多く用ひられて居る。

(I) 白鳥博士の直話

かくの如く K, T, P の Lautverschiebung はよほど古くから行はれて居て、之に關係のない R の音は最もおそく支那語に表はれた。

文献の上から Anlaute としての K, T, P を抽象して見ると大體次ぎの如くに綜括せられる。

入聲の方でも漢書に yap-tal を悟祖 yap-tat でうつし、又佛典に Gouptas を笈多 sip-ta でうつし、mahakassapa を大迦葉 Kasiep でうつして居るが如く入聲の利用せられてあるのは大略唐書以前のものに辿られる。然るに元朝秘史などになると Mongol を忙豁勒と音譯して居る如く元以後のものには全く入聲はかまはないで用ひて居る。尙 Khubilai 忽必烈などもその類であるが、これらは入聲を neglect したのではなく入聲そのものの消滅して居たためである。元の時代に全然入聲のなくなつて居たか。或は宋の時代によほどなくなる傾向を有して居たのであるか。これは明には事實上かつきりと知ることはできない。けれども地理上どうかはれた現今の福州又は上海の入聲の状態は或は宋の時代の入聲の傾向を示して居るものではあるまいか。韻書は洪武正韻にせよ康熙字典にせよこの

間の消息を漏らして居るものは一つもない。しかしながら支那語に入聲の消滅したと云ふことは支那音韻史全體を通じてこれ位音韻變動で著しいことは他に見ない現象である。けれども支那の韻書は殆んど常に歴史的の韻書である故にいつも梁、隋、唐、宋のものばかりをうけついで機械的に轉載して居るばかりである。

(2) Prof. Takakusu: A Pali Chrestomethy.

韻書と正反對のもので popular に出て居る元の北曲、南曲、雜劇などを見るとその文體によほど現代のものに近い所がある。殊にそのうちに含まれる俗語などは今日のものと同しと殆んどそのまゝである。これを以て考へると音の側でも元の時代のものによほど今日のものに近いと居ることがわかる。その入聲でなくなつて居たことなどは無論のことであらうと思はれる。入聲の消滅はむしろ宋末遼金にあるものかと思はれる。がこの支那に入聲のなくなりかけた時代は R の音が地方から外來音として這入つて來た時代でこれは史學、文學の研究に對して面白い hint を與へる。

(1) 森槐南氏の講義參照

單に入聲の消滅と云はず單に K, T, P と云はず宋末遼金元の時代に於て支那中原の音は古今未曾有の大變化をなして居る。もし Max Müller 博士の言をかりて *Phonetical corruption* を最も大々的になした時代が南宋より元にかけての間であると云はれる。併し一方から云へば言語上

音韻の *Entwickelung* である。外來音として新たに R の音が入つて來た程に塞外北方民族と激烈なる言語上の *Verkehr* のあつた爲めである。此れが爲め從來たくさんあつた *Tones* の上の區別は打たはされ、第一に入聲が調和せられなくなつた。さなくだに五胡十六國の亂或はそれ以前から常に政治上の變動で擾亂に次ぐに擾亂を以てして居たのであるし、それに言語の發達の階級から云つても又 *Phonetical* の側から云つても全然別種のものによつて影響せられて居たことが久しかつたのであるから、其結果が元に見えたとは早いとはしない。文學上のもので元曲雜劇に表はれる以前已に宋で朱子の語録などに散見するものも少くない。

淵源に派れば際限はないが、その最も激しく現はれたのが元の時代で大體十三四世紀の音現象である。その後も尙音韻發達の中心點は常に北方支那にある。而してその影響を蒙るものは支那中原の地殆んど限なく行さわたる。が古今殆んど常にその影響を免れて居るところは閩越安南の方面及日韓であつて、この地方は比較的 *sprachliche Verkehr* が妨害されない。殊に又貴州省より *Mekon* 河の上流地方乃至は崑崙、*Tibet*, *Nepal* の方面であれば尙更のことである。これ、この地方に益古形の残る所以である。

附 證 漢吳音考、日本は北部支那の如く字音などの上に大變動は起つて居ない。日本語化した漢語の一般⁽¹⁾を見ても比較的よく古音を保つて居る。然るに日本には本居宣長の吳音說、白石の漢音說

などがあつて宛かも何れが北方音に近いの、何れが江左音に近いのと議論し又時代にも各差のある名稱であるが如くにやかましく見られて居るが、この二種の名稱は共に *Category* の曖昧な區別に本づくものであつて、却て妨げとなる。例へば江左音 M に對する北方(漢)音の B は漢音でただの M (之を吳) 音と云ふ。併し早くから北方には B も M も共にあつたのみならず北方音が B 音で傳はらないで m の方で傳はつて來て居る時もその M を吳音と云ふのであるから同一の M のうちには南音と北音があるわけである。しかも何れも吳音と呼ぶ。北方に古今 M の存在することの争はれぬ證據はどつさりある (P 音攷参照)。それ故に漢吳音の名稱上の區別は一向役に立たない。

(1) 丸山通一氏日本語化したる漢語(言語學雜誌第一編)

五、音聲學上より觀た漢字

古來漢字の學は随分研究せられた。併し其の多くは殆んど漢字の形の方を主にして觀察したものばかりである。字典の分類でも形の方が標準になつて居る故、音の方からさがし出すには不便極まる。文字學の淵源をなして居る説文そのものも形を主にしたものであるが元來漢字の性質生れ方から云つても象形が出發點であることは争はれぬ事實である故古來音の側の觀察が *neglect* せられて居たのもその爲めである。實に形態上の觀察は漢字研究の一大要素である。

抑も文字なるものの眞價は *ide.* 式に表音であると云ふ點のみに存するものであるか又これ迄考へ

られて居たやうに形の方が大切と云ふことに存するものであるか或は表音と形とを兼備して居ると云ふ點に存するものであるか。これは文字を用ひる國民が文字に對する *Getuhi* の點、教育上の點、歴史上の點等種々の側から觀なければ決定が出来ないと云ふことは無論である。その表音的を主とするものでなければならぬ時は云ふ迄もなく形の方を主としなければならぬと云ふ方でも音の側から文字を研究すると云ふことを *neglect* してはならぬ。是れ迄音の方から見た研究は全然ないのではない。張成孫、嚴可均の研究したもののその他虞德升の諧聲品字箋の如き朱駿聲の説文通訓定聲の如きこの側の研究は多少はある。

(1) 張成孫説文諧聲語

(2) 嚴可均説文聲類及出入表

支那の地理上から見たる音韻の變化と歴史上から見たる *Lautwandel* の二點から得たる結果を支那文字に適用して考へて見ると著しく字音が *simplify* せられるのである。字音の研究には後世の形の變つた文字で比較研究をすると、時として何故某字にかくかくの音があるのか。許慎及び段玉裁が諧聲文字として見て居るのに、音を出せる部分の全く見えないことさへある。それ故諧聲文字を深く音聲學上から見る時には一方に於て常に文字の古い形を參照にとらなければならぬ。例へば



(一) 尋になぜ *sim* の音があるか。説文によるとこれはもと尋である。そのうち左方の上にある多は杉又は診などのとさの三と同じ發達の *stage* にある *sam* 又は *sim* の音を有して居る *Phenetical*

symbol である。それが後世では *drop* した迄であるから素とやはり尋はそれの音に従ふ。

(二) 親新になぜ *sin* の音がある。これはもと説文によると親親であつて古書にはまゝかやうにかいてあることもある。今は辛の部分の *Phenetical symbol* たることが忘れられてしまつて居る。又新はもとこれだけでたきぎの意であつたのを後世 *new* の義が之に結びついた爲めたきぎには別に草冠をつけて薪(薪)の字を作るに至つたのである。

(三) 覺になぜ *kak* とよむか、これはもと覺であつたのが中間のとり除けられたものでもとの音は學から出て居るのである。學に教へる意義のあるのは序乍ら云ふが説文には數である。教の部分は即ち教の字の淵源をなして居るものであつて子供に文教の授けるの原意である。後世は支の部分省けて學だけが残つた。

(四) 育になぜ *jik, jik* の音があるか。説文には育は子の字をさかさまにした形の下に肉の字がある、即ち齒である。肉の音が *fit* であるから *nik* とも *yik* ともなるのでこは普通あり得可きことである。

(五) 春になぜ *djun (tun)* の音がある。説文に春は  である。際限なき草原の地平線に太陽の現はれたとを意味し、吨墩東曇などと素とはよほど近くあつた音であつたのである。因に云ふが莫は  で夕陽の全く草の中に没した義であつたのが一般化して凡てのもの見えなくなることに用ひ

られるに至つた故別に日没のものには暮の字が出来た。こは宛かも新から更に薪の出来たのと似て居る。

(六) 在になぜ *tsai* の音がある。説文には古形で土に従ひ才の聲とある。故に在は才の音 *tsai* によつて居る。

(七) 市はなぜ之と同じ音がある。之は **土** で市は **尪** 也尪之の聲を *Phonetical element* として居るものに妻、婁、蚩などがある。之の音は是の音と同じく古代には *tei* 又は *tai* の音があつたことは既に云つた通りである。(六一八頁参照)。

漢字の發達の上には既に述べた如く音を出す部分が *drop* せられる外に又文字上の *Analogy* が行はれて居ることがある。後世賣が **賣** に引きつけられ本來讀とある可きものが讀となつた。賣は *mai* で素とは貝の上に網を張つて財を賣り出すと云ふ意である。又敵の字の *Analogy* で敵などとかくつとがあるが敵にしないと尙の音が出ない。 *Analogy* は音の上だけでなくかきかたの上にもある。即支那人が縦書きである爲め元來横に廣がる可き文字が殆んど皆縦の方になつた。その例は諧書になつたもので明にわかる。一例を古金文にとつて比べてみると、



車 孔作父癸鼎



舟 舟石父丁爵



眉 戎都鼎



目 目父癸鼎



魚 (魚鼎古鑑)

かくの如く文字には形の上に *Analogy* があり。又場を場、場、場、場などとするが如く際限なき俗字もある。さなきだに音そのものに種々のうつりかはりがあつて漢文字の沿革は愈益錯雜を極めて居る。

自分の苦心した所はこの錯雜を極めて居る漢字のうちに支那音韻の原則が行はれて居ないか、どうかと云ふことをしらべたのである。先づ漢字の發達時期を見るにこは分つて三大別することが出来る。無論便宜上の分ちかたであれど、

- I. Ideographic の時代
- II. Phonetical の時代
- III. Substitution の時代 (轉注、假借の時期を指す)

今日ではこの二、三、時代殊に第二の時代のものが最も大部分を占めて居る。これは説文を繙ければ一目瞭然である。六書のうち象形、指事、會意、轉注、假借は種類こそ多轉けれ、實際に於てはその數は諧聲の一種類に比べると極めて少ない。實用上の文字の屬性として表音であることを要求して

居ることはこれでもわかる。何れの地何れの時代でも表音的である諧聲文字がいつも生存上の勝利を占めて居る。

南條高楠博士の佛領印度支那によると (page. 168) 安南諸蠻語の數詞を列示して以て後考に供せんとすとあつて次の如き表音文字が示されて居る。蠻語とは Moi 語か San 語か、或は Laos 語かともかくも支那語と直接の類似のあるものであるとは音の上で見えない。

1. 沒	mət ^(e)	8	糴	tán
2. 𠵼	hai	9	𠵼	chin
3. 𠵼	ba	10	逝	muò
4. 𠵼	bôn	100	𠵼	trâm
5. 𠵼	nam	1,000	𠵼	nglin
6. 𠵼	sáu	10,000	萬	van
7. 𠵼	bay	100,000	億	veo

(1) 上田博士の講義 (2) 高楠博士の佛領印度支那

これはよつてもいかに諧聲文字がよく生命を保つてたるかが察せられる。然らば漢字の研究には出發點としては象形の origin をたづねることも必要であるが、それは Kultur の方むしろ上古の文化

思想を知る上に重要であるのであつて漢字そのものの價値は實用上やはり表音の點にあるものかと推論せられる。然らば表音の諧聲文字上のうちに音の關係がいかにとどられるかこれをしらべると次の三種にわかれる。

1. 表音の要素となつて居る Phonetical Symbol がそのまゝの音を出して居るもの

K	𠵼	kao, hao	巧攷鴉朽號
	𠵼	gan, gen	雁原源彦顏
T	𠵼	teng, ting	程廷挺艇聽廳
	台	tai,	苔殆胎怠駘
P	凡	pan, pang	汎帆梵風
	保	pao	堡褒褱

この積の例は非常に多い特に音の側を注意しなくとも字の音そのものがその Phonetical symbol によつて居るからすぐ推量せられる。従つて白井寛蔭翁流の研究は是迄少からず出て居る。

併しながら今一步を進めてその Phonetical symbol の音と諧聲文字なる Compound の時の音とが一致して居ないときのもは全く等閑に附せられて居た。従來の研究法では單に原源彦雁などから𠵼を抽象して居てさうして𠵼の音はもと gan であつたのであるとして居る。けれども雁の時の𠵼の

音がなぜ gan であるか、gan は gen にかかに音の上で關係するか。又廷の時の王が聖の時の王と音の上でいかに連絡があるか。公の時の kung の音はなぜ松の時に kung でないのであるか。星野博士も松に ko の古韻のあつたと云ふことは云はれて居られた。又説文などの論法を以てすると洛絡も格闘もどちらも各の入聲に从ふ可き筈のものであつて一方は tak 他方は kak 又略は lya 客は kyak なぜかゝる二様の音があるのであるか是れらの問題になると不幸にして未だかつて之を解釋して居るものは見ない。唯これを解くことの出来るのは聊か此の論文で苦心した地理上の觀察と歴史上の觀察から得たる音韻現象によりて始めて解けるやうに思はれる。無論範圍が K, T, P だけではなくて尙これ以外の音現象になるとそれは論の外である。先づ自分の得たもので之を解くならば縦來解くことの出来なかつた諧聲文字は次の規則によつて大體解決がつく。若しこれに這いらないものは別に尙規則のあるものであるか。さもなくば諧聲文字と云ふ部類に屬しない他の會意とか指事とかである。

11. Verschlusslaute が $\text{ka} \rightarrow \text{na} \rightarrow \text{pa}$ Reibelaute になつた爲め Phonetical symbol の音と諧聲文字即 Compound のものとの間に音の上の Verschiebung が行はれて居るもの。これはこの種類を小別して次の二つとすることが必要である。

(イ) 諧聲文字の音の基本たる部分とその獨立の ka に尙古音の Verschlusslaute が留つて居るもの。例へば

K 公 kung 谷 kok 樂 yak 芽 ga 一の類のものは K, s, Y の順序で變化する。此の順

序は支那の音韻史上是認せられたる秩序である。

K \rightarrow s \rightarrow Y

公 (kung) 松 (sung) 翁 (yung)

谷 俗 浴

樂 鏢 藥

芽 邪 鴉

T 多 ta 兌 tat 葉 tep 登 teng 單 tan 一の類のものは T, s, Y の順序で變化する。

此の順序も支那音韻の歴史に支配せられて居るものである。以下準之。

T \rightarrow s \rightarrow Y

多 侈 移 (本音は sa の音なり)

脱 説 悅

蝶 葉 葉

登 證 \square

章 戰 \square

濯 □ □ 躍
剔 □ □ 易

P ト pu 不 pu 賁 pun この類のものは P, P', F の順序で變化する。

P → P' → F
ト 仆 計
不 坏 罌
賁 噴 墳

(ロ) 諧聲文字の音の基本たる部分はその獨立の時には古音の Verschlusslaute は失つてしまつて居るもの。例へば

K 宜 san 與 yu 羊 yang この類のものは Y から s, s から K にと派ることが出来るものである。即ち古音を逆に辿りて見るに

K → s → Y
喧 宜 垣 亘 kuan
舉 嶼 譽 與 kyo
羌 祥 洋 羊 kyang

T 失 sit 秀 siu 之 si 石 sek 由 yu 余 yo この類の古音は T であつたのであるから Y から s, s から更に T にと派ることが出来る。

T → s → Y
鉄 失 佚 失 tet
透 秀 誘 秀 to
待 芝 □ □ 之 tai
拓 石 □ □ 石 tak
抽 袖 油 由 tyu
途 除 餘 余 to

P 反 fan 分 fen 丰 fang 方 fang この類のものはもと P であつたものであるから F から P', P' から P に派ることが出来る。

P → P' → F
板 扳 反 反 pan
盆 盼 分 分 pun
踣 捧 豊 丰 pang

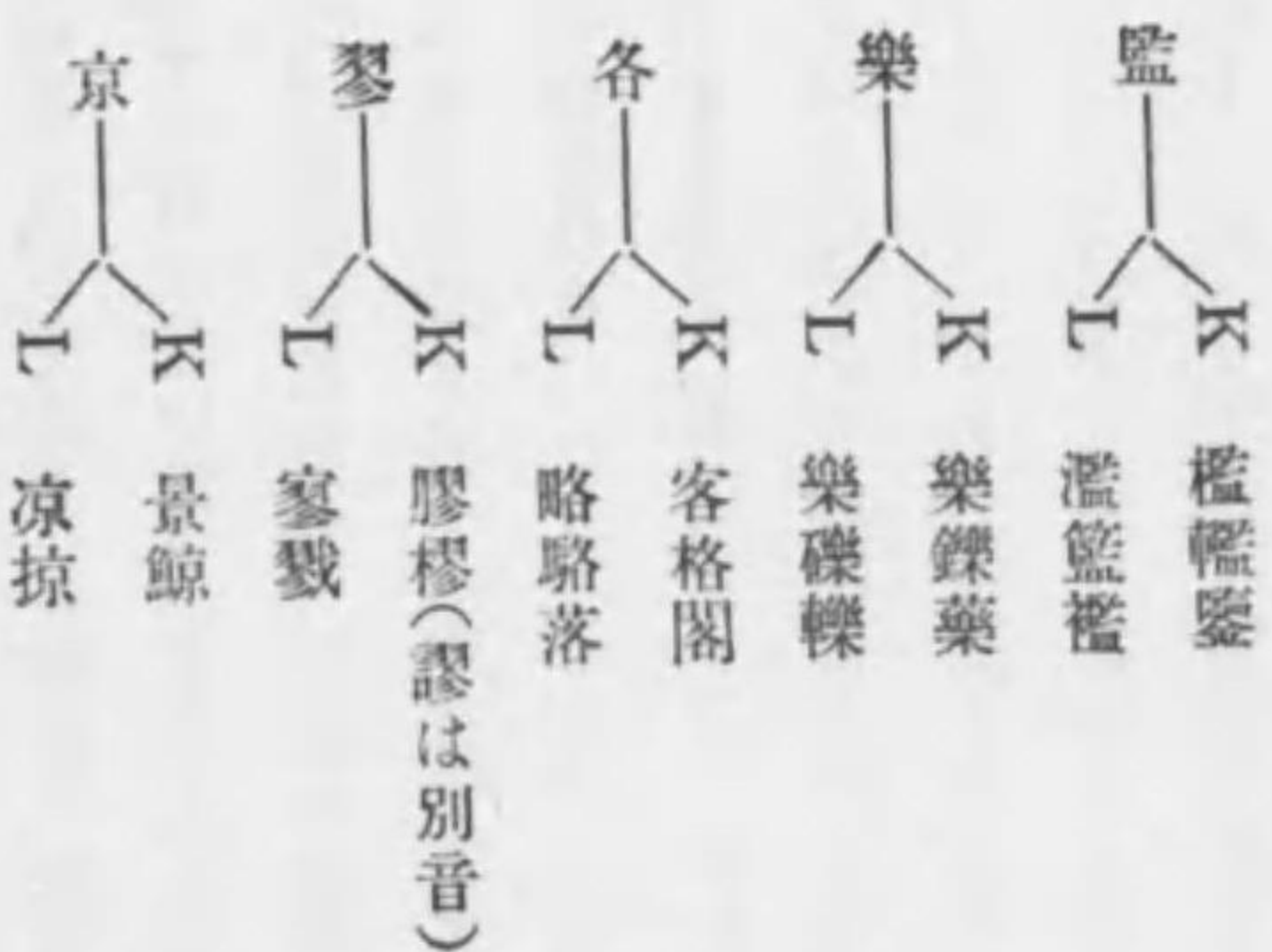
注意 右(ロ)の部で注意す可きは例へば羊は後世 yang の音なるも、洋の yang は羊の音が己に yang になつて後に出来たものか又は尙羊が古韻 kyang であつた時に出来たものであるかはわかない。併し太陽の陽が後世の音では yang である。けれども陽の古韻に東の tong 且の tan などと同じ音のあつたことがうたがひないが如くに洋の音も嘗ては sang その前には kang (kyang) の音であつたと云ふ想像がつく。石なども今は sek であるけれども古くは今の安南にある如く拓即ち開拓などのときの tak であつたかも知れない。若し意義を示す手即手偏をば石に對する動作を示すものと考へるならば石 tak は Noun であつて拓 tak は verb で石を探るとか石を除き去るとか云ふ義であつたと思はれる。之には四聲上の差もあつたであらう。要するに拓の tak の音が石の sek の音から出たのではなくとも石が tak と云ふ音であつてその音のまだ變化しないうちに拓の音が石の音 tak によつて形成せられた。然るに石の本音 tak はその Compound の拓の字に残つてもとの音の要素であつた石の方は音が變遷して sek になつたのである。

支那の Reibelaute を Verschlusslaute に引きもとして考へると云ふことは支那語の Etymology の上には是非必要なことである。後世の音で協は sie 合は ha で非常に違つて居るが origin は同じ所から出て居るものらしい。説文にもあるが如く協は从十協聲である。音挾で日本で kep 客家、厦門では hiap である。もつこは k'æp, kap で即合と關係があるものらしい。合はムと口とに从つて居

るのでムはものあはさり集まるかたち、議論の命、倫の命、みな同じものである。故に kap の音はもと Zusammen の意であつたかと思はれる。廣東で及の kap 挾の hap 合の hop 盍の kap 鉄の hap の如きみな意義に従ふ音の上の differentiation であつて根本には或る共通の起源があるらしく思はれる。厦門の俗音に同、興、共、三者乍ら kap と訓じて居るのもの之に考へ合す可きものであるまいか。この外蝶、葉の tep 雁、十、妾、巢(集の古字)搨などの tap 又は nap(納)などに於けるその origin に派れば全然關係のないものでもあるまいと云ふ見當がつく。尙以上(一)及び(二)で解けない諧聲文字が少からずある。即ち

三、例 klan, plan と云ふ有史以前の支那語の形から分れ出でたもの。これは klan の音からわかれたものが最も多く諧聲文字にあらはれて居る。例へば僉、兼、監、各、樂など何れも素との kl の音に派られる。





(2) Macgowan. A Manual of Amoy colloquial.

K, L の轉換は音韻の Verschiebung として見ることは出来ない。K が S となり Y となり又は會 k'uai huai, h-uai, uaei, uae, we などとなる例と同一視する事は出来ない。idg. に Romance language と Latin の kl (cl) が Italy で K となり Spain と L (classic) の方で L となる。俗音では J 又は Y に訛つて居る。支那語の場合に今外民族にある所の言語を以て直ちに Parent language とみ

ることは議論もあるであらうけれども支那文字の Phonetical period には尙 kl の音があつた爲めに上の現象が文字上に現はれて残つて居るのではあるまいか。加ふるに時として意義迄に檻、籃、濫の如く、共通せる點が認められるのも何か裏面に關係のあつたことを示すものかと思はれる。

(1) 坪井博士直話

六、支那語の根本起源と發達についての考

地理上、歴史上、文字上から見て K, T, P 或はその aspirates が支那語の諸音に對して尤も primitive の單子音であると云ふこと。更に進んではその K, T, P そのものが他の子音と結合して居たと云ふこと。此の二點は此れ迄述べ來たつた所で略推察せられる。

今日から迎られる monosyllabic 諸言語のうちで Konsonantenanlaute の最も複雑せるものは古代の Tibet 語に見られる。今日の Tibet は昔のもの程に複雑でない。又 Tibet を中心として地理上南方又は東方の諸言語を見ても、Complexed のものはあるが古代の Tibet 語程ではない。Burmese, Nepal, Serpa, Horpa, Garung, Shan, Tai, Lolo, Miaotze の如き皆 double consonants 位の所であると云つて居る。勿論それらの言語には Single Consonant に進んで居るものも少からずあるのであつたがまだ古風の名残は全く脱しないで居る。然るに更に一步進んで安南の東京地方、廣西、廣東、福建地方に出づれば全く Single Consonant Anlauten のみで支那の中原に行けば更にその脱化した軟

らかな音となつて居る。それ故例へば北平の C, ち, Y ならば廣東安南で K, Burmese の方面で kl. 古代の Tibet では bkl, or skl と云ふが如き理屈に順だてられる。

(2) Chandra Das: Tibet English Dictionary.

體質上のしらへに據ると單に漢人のみについても南北で相違を生じ南部のものは身長概して比較的 低く (1,6 1,5 m. métr) Cephalic index も北方の 77.0 に對する南方は 81.2 即ち比較的亞廣頭で skin-colour も北部の黄色に對して南方はやゝ褐色を帯びて居ると云ふ有様である。⁽¹⁾ この差は南方諸民族 Aborigine などの blood の影響であるかも知れない。身長は安南人が 1,590 Siamese (Thai) が 1,607 又 Ceph. index も Annamite が 82.8 Burmese が 83.1 hair 45 Black で直毛、皮膚の色はやゝ褐色。これ等の點は南方支那人の體格がいかに西方諸族のそれと關係多きやを示すものである。

(1) 島居龍藏氏人種學、並人種誌

之に加ふに歴史の上では既に始皇帝の時に秦と交趾那⁽²⁾とは交通があつた。又 H. N. Hutchinson が Ancient Chinese Chronicle によると交趾に於て B. C. 2985 の頃の風俗のわかると云ふことなどを云つて居る。これはあまりに不稽の如くに見えるけれどもかく古くからこの方面と支那との間に言語上の交通のありしことは老へられる。(第三編第七章參照せよ) 又 Siam に於ける Siam-ese 即ち自ら稱して Little Tai と云つて居るものも A. D. 1341 に北方⁽³⁾から來たと云つて居る。こ

れには尙閩粵地方の客家が中原より南下せしことの傳説も參考となる。

(2) 2 H. Hutchinson: Living Races of mankind, P. 106. (3) 史記

Racial characteristics の一致の點。歴史的の關係があつたからと云つて言語上の一致にすぐ附會することは出来ないけれども一般に言語學上又、人種學上でこれらの諸地方の言語は同じ monosyllabic の stage にあると云ふ點は一致して居る。

西藏研究によると Tibet には Partikel があるとのことであるが支那にも古今を通じて同様にある。兎に角人種學上の一致が predominant して居るだけそれだけ又言語の點に於ても西藏族と漢族の間には連絡があるのであるまいかと思はれる。唯言語の上では漢人殊に北方支那人がその一般に廣がつて居た monosyllabic の stage の言語をその stage の範圍内に於て最高度の發達を遂げさせ、以つて今日の北平官話を生み出させた⁽⁴⁾と云ふ點で Tibet あたりの言語とは非常な差を有して居る筈である。つまり程度上に大なる差を生じて居るだけである。

北平官話の元始的狀態は Tibet 語がその傳を傳へて居るとするとその Tibet の古代に於ける bkl 又は brygad と云ふが如く Complexed consonants は果して monosyllabic の Anlaute とつてのみ役立つて居たのであるかよほど怪しくなる。

Triliterary language の三子音、その他 arabisch に子音連續のものをかいて讀むときに種々の母

音を轉換させて發音して居る。Mlind が例へば Mohamed, Mahomed といふ Mehemed となつて居る。これらは明かに母音を入れて發音する例であるが次には Slav の方面で Servia の住民が自ら稱して Srv と稱し又實際の文字も Srv と書いて居る。これなどは坪井博士が土人に聞かれた所に Srv と書つて居るといふのである。尙 Prag の郊外にある遊覽地で Krč とかく所がある。藤岡助教授によると、この種の發音は子音のあとに Gleitlaute (それが母音の如くに響くことでもないではあるが) が添はるだけで Stimmband の震動は伴はないものであるといふのである。

(1) 白鳥博士講義 (2) 坪井文博士直話

此の種の音は Kroat, Darmat, Sloven Slavon, Čäch といふところもある。例へば Zächš に skrz (durch の義) hrb (Hügel の義) drž (halten の義) 尙 mlč, krvs の他明に vowel を入れてかくものには Zridrika, kreslir, rty (dual の Lippen の義) の如きものがある。

(3) Masarik, J. Böhmische Schulgrammatik.

言語として子音のみのもものは Sonority がなつて實用として不便である。Polysyllabic で日本語中にも子音のみに發音せられるものがある。

kusuguru → ksguru
sukunai → sknai

buruburu → brubru

となるが如く素と vowel があつたものでも音の結合の爲めに結果から見れば Čächš と Servia の語の如きものが随分ある。Tibet の古韻の skr, bkl の如きものもこの process で生じたものかも知れない。然るに Tibet 語は支那語に關係のある語であるから(一)支那語の Initial は必ずしも素と單音にあらず。(二)支那語は文字創造以前は必ずしも單綴語に非りしことと云ふことが考へられる。かの A. Schleichner 一派の説くが如く支那語は isolierende で most primaevalstage にあるのではなから。やばり Conradi 氏や Gröbe の比較研究の示すが如くもとは polysyllabic であつて Sprachentwickelung の Stufe として支那語も亦其の Phonetic の側が一般の諸國語と同じく以前の Complexity から漸次縮まる傾向を取つて簡單になつたのである。これは Bopp, Schlegel Schleicher などの宛かも誇りとせる如き idg. の諸言語の大勢とかはることはない。

次に form の點に於て idg. に劣る所がある如くに見られる理由があるかと云ふに形態上の分類より一步をすゝめたる Psychological classification からすると毫もその理由はなから。Grammatische Form が語の上に現はれるものだけが言語として完全なものと云ふ原則はない。もし Schleicher 一派の筆法を以てすると、後世の idg. の語は gr. Form のなくなる方に傾いて居るのであるから現に English などはよほど不完全なものに corrupt したと云はなければならぬ。最初文法上の Form が語の

上に現はれて居らうが居るまいが、それは唯その言語の特質如何によるものである。Sanskritが語尾にそれを現はして居るのが微妙であるならば支那人が精神中にそれだけの作用をなして居るのは更に奥妙と云はなければならぬ。即ち形の上に現はさない所が支那語の支那語たる所以である。その文學上の products にも驚く可き程の貢獻をなして居る點から云つても、*idg.* に遜色はない。Kultur の上の product を楯にもつて來て支那語を強ひてよく云はんとするのは已に Humboldt が陥つた弊で藤

Vorstellung

岡助教のいたく難ぜられた所であるから茲にくり返さない。畢

Ausdruck (Laut)

竟支那語に文法上の Form が音聲となつて Ausdruck の上に

見えて居ない點が支那語自身の特質である。それが見はれて居ないと云ふことは Vorstellung に存して居ないと云ふこととは別なのである。それ故心理上から見ると支那語と *idg.* にやかましく上下の區別を立てることは唯形式上の末に拘泥したわけである。又音そのものに於いても支那語と *idg.* は Gabelentz の云ふ Spirallauf der Sprachgeschichte の principle ですゝみ行くと同時にその Laut-phenomena が Complexity から simplicity になつて來て居ることも争はれぬ共通の點である。故に言語發達上その優劣の別は更にならぬ。

(2) G. v. d. Gabelentz, Spr. wis. ft. s. 255.

Grosserie が最近の言語の分類法としてたてた方法は *idg.* の方は Latin, Neo-Latin, French,

English などとの間に於て Ascendentes et fixes Descendants の關係で見られて居るが支那語の場合に果して Tibet 語の古語が Parent 語で Burma や Siam などにある諸語がその次ぎで、支那語などよりも古きものだからどうか、その關係はこまかくはわからぬ。又支那語自身についてもその未だ明かでない點が夥多にあるからともかく最新の Genealogical の方面から支那語を見ることは未だ今後充分この側の研究を竣たなければ決定せられないのである。

(1) 藤岡助教講義

けれども要するに今日の支那語の有史以前に於ける最初の状態は後世のものとはよほど違つて居て單なる Einsilbigkeit のものではなかつたのであると思はれる。それが inflexional の語であつたとは見えないけれども少くとも polysyllabic であつたかも知れないと云ふ目あてはつく。それが一般言語の潮流に従つて Simplicity にうつりうつつて遂に今日の如きものとなつた。その間支那語の特色として Ausdruck の上は Grammatische Form を取つたことではない。けれどもその間に Aspirate とか Tone とかを發達させて出來得る限り、言語上の發達を遂げて居る。其の最古の形は今の Tibet 方面にその名残りを留めて居る形迹のあることがみられる。尙、此れ等の言語に關係のある言語について其の音韻の側をしらべて見ると、又 Tibet のそれに連絡する所がある。それ故、支那語の眞の Origin は所謂後世の單綴語である諸言語がかつて素々 Tibet 方面（或は Kukunor 地方）で spr-

achliche Verkehr をなして居たことがあつたのではあるまいかと云ふ假定説が立つ。この點に於てこの論文の結論は大體に於て高楠博士の支那語の西藏起源論と合する（明治二十九年史學雜誌第九編第十一號、歴史以前の印度支那人種及其の大初同住根源地参照）尙この解決には更に文 *Sain* の上の深い研究を要するのであるがそれは將來の研究に譲つておく。

（明治四十年文科大學言語學科上田教授、藤岡助教審査）

西藏支那日本三音の比較

日本

支那

西藏

懼	ku	ku(ㄅ)	ku(ㄅ)	skrrpo
血	ket	šie	kuat	k'rag
絞	kō	čiao	kak	sgrogpa
交	kō	čiao	kak	sroso
黑	kok	hei	kuk	sgrib-pa
三	san	san	tam	gsum
五	go	wu	ngo	ingo
六	rok	liu	juk	druk

八 hat pa pat brgyad

第六章 字音轉換の法則十一則

一 緒言

音の側から漢字を観て見ると、谷、俗、浴の三字がそれぞれ其音の頭を異にし、又區、樞、歐の三字がそれぞれ、其の語頭音を別にして居る。前者には、谷の音符が共通であり。後者には區の音符が共通となつて居る。かやうに同一の音符を有せる漢字にしても必ずしも、同一の音を出して居るもののみとは限らない。これ結局、其の音符の音が他の音に轉じ移つて行くからである。少くとも其の音符の古音と、今昔との間に、音韻上の變遷があつたからであると云ふこと。これがその原因の主たるものである。茲には、其の何が故に變遷をなしたかと云ふ點までに涉つて穿鑿するのではない。唯實用上の側から其の音の轉換せる結果のみを観て、それに依りて、其の現象を取扱つて行かうと思ふのである。

現今行はれて居る漢字は自分の今日までの計算では其の數五千三百に達して居る。而して、其の間に存し行はれて居るの音韻轉化の現象は頗る複雑な様で、殆んど其の間何等の秩序も、統一も存して

居ないやうに見られるかも知れない。けれども事實は決してさうでない。既に本編第四章第五章に詳述して置いたやうに、字音變化の間には、一定のきまりが存在して居る。宛かも字形變化の場合に、類推と、省略の二大作用が存して居る（第一編第五章六五ページ参照）やうに音韻轉換の場合にも、動かすことの出来ない法則が存して居る。果して法則と稱し得るか、否かは尙研究中であるが、今日までのところではかやうに假りに名附けることが出来ると思ふ。この法則によりて初めて字音の變化はその統一と秩序を得て来るのである。以下にはこの字音轉換の法則について、其場合々々を逐一觀察して見よう。先づ最初語頭音の場合について述べて見よう。

二 語頭音轉換の法則

語頭音とは語の初めに立つ音の意で、例へば教 *Keu* の *K* 頭 *ton* の *T* などと云ふやうなものがそれである。かゝる語頭に立てる音が同一の音符を存して居りながら文字によつて屢々他にうつるのである。これには色々の場合がある。

第一、KSYの法則

語頭のカ行音のもの即ち *K* を頭に有するものに就いて其の音の變化を見ると例へば次の如き現象がある。

谷 <i>Kok</i> の諧聲文字	一、コク	谷壑…………… <i>kok</i>
	二、シヨク	俗…………… <i>shok</i>
	三、ヨク	浴欲…………… <i>yok</i>
牙 <i>ga</i> の諧聲文字	一、ガ	雅…………… <i>ga</i>
	二、シヤ	邪…………… <i>sha</i>
	三、ヤ	耶…………… <i>ya</i>
區 <i>ku</i> の諧聲文字	一、ク	軀…………… <i>ku</i>
	二、ス(スウ)	樞…………… <i>su</i>
	三、ユ	歐…………… <i>yu</i>

即ち之を音のみの上から云ふ時は、

カ行音	→	サ行音	→	ヤ行音
一、コク		一、シヨク		一、ヨク
二、ガ		二、シヤ		二、ヤ
三、ク		三、ス		三、ユ
<i>Kok</i>		<i>shok</i>		<i>yok</i>
<i>ga</i>		<i>sha</i>		<i>ya</i>
<i>ku</i>		<i>su</i>		<i>yu</i>

となるのである。つまり、此の法則は、五十音の表で云へばカ行音のものが、サ行音にうつり、更

らにヤ行音又はア行音にうつると云ふ順序であつて、羅馬字で精密に云ふならばKの音がS(又はsh)にうつり、次に、Y又は唯の母音に轉じうつる様を示したものである。之を稱してKSYの法則と云ふのである。なぜKがSやYに對して根本の音であるか、又YがなぜKSに對して最も末の音であるか。此の説明は嚴密なる音聲學(phonetics)上の生理的方面からの説明と、及び各時代を通じての音韻の歴史的研究の側から説明しなければならぬ。併しこは既に前章で述べてあるから茲には略する。(前章K音攷五二八頁以下参照せよ)

右のKSYの法則が一つわかれば、之を應用して、公の音コオkoが松、訟、頤の字の時にシオshoにうつり、更に翁の時にオオOに轉じて行つて居る現象は直ちに理解される。又岐、妓の場合の支の音キkが枝の時にシshにうつれることとか其の他磨がケイの音で聲がセイの音となり又キン(今)の音がシン(岑)となり又宏の字音コオが雄の字の時にユウとなるが如きことは普通のこととなるのである。讀者は隨意に、文字をとりて試みられたし。

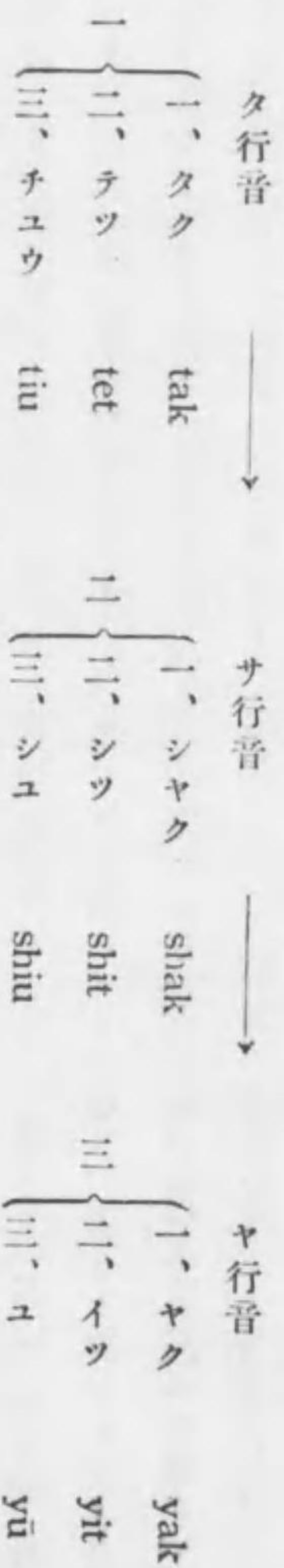
第二、TSYの法則

タ行の音を語頭にするもの、即ちTの音が又一定の轉換をすることがある。一例を取つて見るなら

一、タク 澤……………tak

翠 tak の諸聲文字	二、シヤク	釋……………shak
	三、ヤク	譯……………yak
迭 tet の諸聲文字	一、テツ	迭……………tet
	二、シツ	失……………shit
	三、イツ	佚……………yit
西 tiu の諸聲文字	一、チュウ	酎……………tiu
	二、シユ	酒……………shiu
	三、ユウ	猶……………yū (西と曾は素と同字なり)

より此の現象を音のみの上から見る時は



となる。即ち音符の音は、タ行音からサ行音にうつり、更らにヤ行音又はア行音に移るのである。若し之を羅馬字で云ふならばTの音がS(又はsh)に轉じて次に又は唯の母音に轉じて行くのであ

る。此の順序を稱して **T S Y の法則** といふのである。此の順序の基づくところの理由は茲に略す。
(前章 T 音攷六〇一頁以下参照)。

T S Y の法則 に従へる諧聲文字は、**的 tek 芍 shak 約 yak** の如きもの又は、**透秀誘 shiu 誘 yu** の如きもの、其の他三段の變化はなくとも、**獨ドクと燭シヨク** の如き、**藤トオ勝とシヨオ** との如き、或は又、**逃と、姚** との如きものなどは總べて之に屬するものである。尙隨意に例へば黨の字を取つて考ふるに、黨の音トオに對して、賞のシヨオがある。こは、嘗つて尙がトオの音を有してゐて、其のトオよりシヨオにうつりしものでつまり、タ行音より、サ行音に更に委しくはシヤ音に、うつれるものであると云ふことがわかるのである。

第三、R S の法則

第三には L 音即ちラ行音支那本音では L の音を語頭に有するものについて見るに、之には次ぎの如き例がある。

林 (lim) の諧聲文字	一、リン	麻……………rim
	二、シン	森……………shim
麗 (lei) の諧聲文字	一、レイ	麗……………rei (古音ライ)
	二、シヤ	灑……………shia

率 (iii) の諧聲文字	一、リツ	率(利率)…………rit
	二、シツ	蟀……………shit

即ち之に依つて考ふるに、ラ行音のものも、上述のカ行、サ行のものと同様に矢張り S 又は sh の音に落ち來たるのである。

ラ行音	一、リン	rin	二、シン	shin
	二、レイ	rei	二、シヤ	shia
	三、リツ	rit	三、シツ	shit

と云ふ音の變化が行はれて居るのである。併し、此の場合にはそのサ行音より更らに進んで、ヤ行に至るものは殆どないと云つてよろしい。假令あつても、規則として擧げる程のものではない。つまり此の規律はラ行音がうつつてサ行に行く、即ち R よりして S 委しくは sh に至る現象をとりまとめたもので之を茲に **R S の法則** と云ふのである。

第四、M S の法則

次ぎに m 音即ちマ行の音について見るに、此れには、**彌 (mi)** と **爾 (ii)** の如きものや尙、

麥 mak の諧聲文字 一、マク 麥……………mak

一、シヨク

膏……………shok

矛 mao の諧聲文字

- 一、マオ
- 二、ジウ

茅……………man
柔……………siu

少 neo の諧聲文字

- 一、ミヨオ
- 二、シヨオ

妙秒……………neoo
少抄鈔……………sheo

の如くマ行音からサ行詳しくはシヤ音にうつり行くものがある。之を MS の法則と云ふ。因みに麥の古字は來の字で膏の字の上部も同じく來である。

第五、清濁の法則

次に音の清濁の方面から之を見るに、此れには種々のものがある。固よりその總てが必ずしも常に清濁の關係なしで存してのみ現れて居るのではないが、其の若し對をなし現れる場合には、次ぎの如きものがある。即ち、

- 一、カ行音に對する ガ行音
 - 二、タ行音に對する ダ行音
 - 三、ハ行音に對する パ行音
 - 四、マ行音に對する マ行音
- 清音對濁音

五、サ行音に對する ザ行音

此の外尙、シヤ行音に對するジャ行、キヤ行音に對するギヤ行などはあれど、今上記の實際の例を擧げて見るならば、次ぎの如きものがある。



四、b.m

免の諧聲文字	一、メン	免……………men
	二、ベン	勉媿……………ben
亡の諧聲文字	一、モオ	網官……………nao
	二、ボオ	妄俄……………bao

五、d.n

那の諧聲文字	一、ナ	哪……………na
	二、ダ	娜……………da
乃の諧聲文字	一、ナイ	奶……………nai
	二、ダイ	朶……………dai

六、z.s

才の諧聲文字	一、サイ	載(載)……………sai
	二、ザイ	財村……………zai
争の諧聲文字	一、シヨオ	箠……………shio
	二、ジョオ	淨……………jo

かくの如く、互に對をなしたる清濁の音韻變化は同一の音符について、或る程度まで、認められなければならぬ。尤も右のうち三の H, B は日本音では特例だが之は P と B とに直して考へなければならぬ。又四の M と B 及び五の N と D とは此の間の關係が清濁であるとは云ひにくい。共に有聲音と見

れば兩者各一類となるわけである。故に寧ろ鼻音に對する P 又は T の濁音となると見る可きである。如此例外はあるが、大體に於いてかかる變化の現象は上述の清音對濁音の關係に依つて解くことが出来る。これを清濁の法則と云ふ。

清濁の轉換は、日本語に於いて既に頻繁に見るところからして、漢字音の場合についても極めて之を無難作に考へるものがある。けれどもそれは誤りである。清濁は自ら各文字によりてきまりがある。假令同一の文字に於いても、其の用ひられる意味の如何によりて、清音で讀むべき場合と、濁音で讀むべき場合との區別が存し居る。例へば

佛の字の音	一、濁音	ブツ	but	佛典に關する語
	二、清音	フツ	fut	佛蘭西語の義

の如きこともある位である。以つて如何に清濁の區別が、必要であるかがわかる。因みに云ふ音符としての弗の音は、普通には皆清音で現はれ沸騰の沸艷然の艷髣髴の髣など孰れもみな弗をフツとして讀ませて居るのである。

第六、R 對 K T H M の法則

字音では、又 R の音即ちラ行音と、諸種の音との轉換が、頗る多く發見せられる。此のラ行音は支那では L の方の音であるが日本では R の音で現はれて居る。先づ如何なる音と此の R 音が相轉換する

かと云ふに、

- 一、K即ちカ行音
- 二、T即ちタ行音
- 三、H即ちハ行音
- 四、M即ちマ行音

がR即ちラ行音と相轉するのである。

(茲に轉ずるとは便宜上かく云ふまでで實際は轉するのではない。詳しくは前章七六一頁以下参照)

固よりタ行音中にはチ、ツの如く純粹のTでないもの、又、ハ行(支那でP)音中にはフの如き音のH(P)でないものなども含まれて居るが、併し、暫らく便宜上かやうにわけて置くのである。

一、カ行音とラ行音との轉換

- 一、各の諧聲文字
 - 一、カク
 - 二、ラク
- 二、喬の諧聲文字
 - 一、ケン
 - 二、レン
- 三、林の諧聲文字
 - 一、キン
 - 二、リン
- 二、タ行音とラ行音との轉換

閑……………kak

落……………rak

險……………ken (kem)

歛……………ren (rem)

禁……………kin (kim)

麻……………rin (rim)

一、豊の諧聲文字

- 一、タイ
- 二、ライ

體……………tai

禮(レイ)…………rai

隊……………tai

蠶(レイ)…………rei

龍……………tio, chio

漣……………rio

(シはタイの訛音本編第十章一参照)

三、龍の諧聲文字

- 一、チヨオ
- 二、リヨオ

三、ハ行音とラ行音との轉換

一、聿の諧聲文字

- 一、ヒツ
- 二、リツ

筆……………hit

律……………rit

二、品の諧聲文字

- 一、ヒン
- 二、リン

品……………hin (him, hom)

臨(臥ト品)…………rin (rim)

剝……………hak

祿……………rok

三、衆の諧聲文字

- 一、ハク
- 二、ロク

四、マ行音とラ行音との轉換

一、萬の諧聲文字

- 一、マイ
- 二、ライ

邁……………mai

癘……………rai

二、麥の諧聲文字

- 一、ミユウ 謬(ミユウ)……myū (byū)
- 二、リョウ 寥(リョウ)……rio

三、里の諧聲文字

- 一、マイ 埋……………mai
- 二、リ 里……………ri

諧聲文字に於ける音符の音で、かやうにラ行音と相交錯して、現れて居るものは、少なからずである。それ故例へば、蠻、變などの音マン man hen に對して、別に戀の音レンがあり又京の音キョオに對して、リョオ(涼)の音があるなど、孰れも皆此の關係によりて、解くことが出来るのである。此の關係をR對 K T H Mの法則と云ふ。

第七、K Mの法則

語頭音の轉換には、尙以上の外、K M兩音の相互轉換がある。即ちカ行音からマ行音に至るものがあり又その反對にマ行音から、カ行音に行くものがある其のマ行音は時としてバ行音で現はれて居ることもある。これは前章K音致及びB音致の研究に基づけるものであるが、左にその二三の現象を掲げて見よう。

- 一、黒の諧聲文字
 - 一、コク 黒……………kok
 - 二、モク 默墨……………mok (bok)

二、毎の諧聲文字

- 一、クワイ 晦海(カイ)……kai
- 二、マイ 梅(マイ)……mai

三、勿の諧聲文字

- 一、コツ 忽……………kot
- 二、モツ 物……………mot (but)

マ行音と、カ行音の轉換はかやうなもので此れをK Mの法則と云ふ。此の法則によりて考へて見ると、毛の音モオが消耗の耗の時に、コオの音を取れるなどは珍とするに足りないわけである。袂がベイの音を有するも全くクワイ快とベイ即ちマイとの間のK Mの轉換によるからであつて、これはその應用の一例である。

第八、K Tの法則

又カ行音はその感覺の上でタ行の音と轉すること。これがまた少なからずある。勿論その發音の位置よりする時はカ行は口の奥の方にて出、タ行は比較的前の方にて出ると云ふ差はあるが、その音の出しかたの破裂的なることは共に同様で、従つて音の聞こえかたも互に似て居る。これカ行とタ行との轉換する所以である。例へば、

- 一、合の諧聲文字
 - 一、カフ 恰……………ko (kap)
 - 二、タフ 答……………to (tap)

- 二、甘の諧聲文字
 - 一、カム 勘……………kan (kam)
 - 二、タム 湛……………tan (tam)
- 三、向の諧聲文字
 - 一、カウ 向……………kō (kang) (向と八とで尙の字が出来て居る)
 - 二、タウ 當……………tō (tang)

かかる音の變化はつまり語頭のK音のうつりてT音となる現象であつて之を「K」の法則と云ふ。このきそくに從へば屈の音クツに對して咄の音トツのあること又漢の音カンに對して嘆の音タンの音のあることも肯首されるところ。

以上 K S Y の法則以來茲まで述べ來たつたものは總べて語頭音の場合の法則である。かゝる種類の法則が伏在して居て數多の字音の變種が起されて居るのである。固より此れ等は、音韻轉換の綱領を示したまでであつて此の外に尙 PM, PK, LM, LN, TN 等種々の現象が語頭音について觀察せられるのである。が普通に見るものは大抵以上八則で律することが出来るから他はこゝに省略して置く。

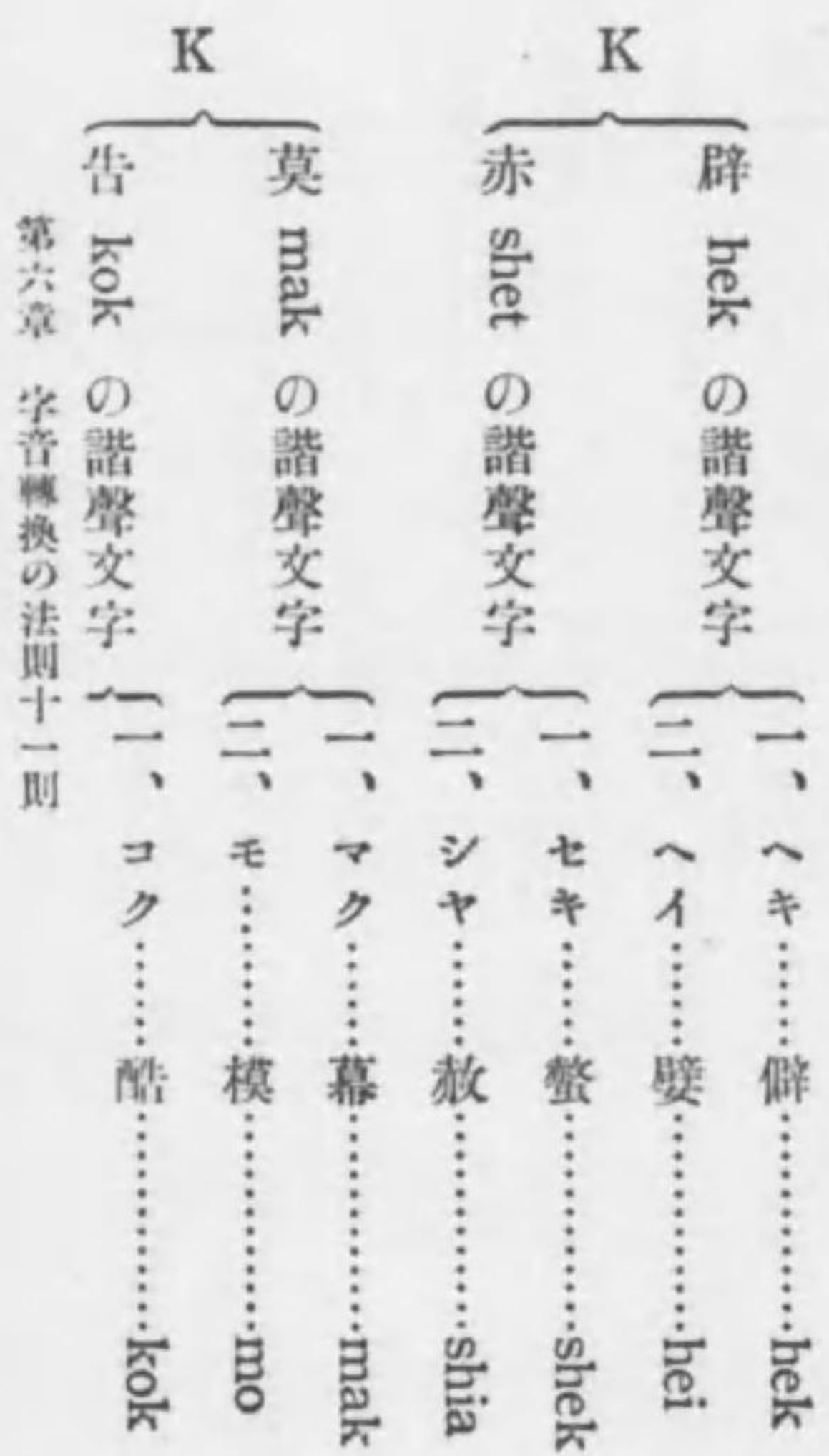
三 語尾音轉換の法則

爰に云ふ漢字の語尾音をば、主として今日の我が字音で其の綴音の終りがク、キ、ツ、チの音で終れるもの、並びにソの語尾の音其の他一般母音にて終れるものを總べてくるめて云ふのである。以下

には此れ等の語尾音の互に相轉換する上の法則を觀察して見たいと思ふ。

第九、入聲消滅の法則

キ、ク、ツ、チの語尾音は素と、別にフの語尾音を加へて、都合此の五つを入聲音と稱して居た。併し、實際の本音は五つでなく K T P (=B) の三者である。こは度 (tak) 詞、甲に於ける語尾を見てもわかる。然るを五つと云ふは日本の訛音に過ぎぬのである。然し今日の實際の日本の入聲はキ、ク、ツ、チの四つである。辟 (heki) 足 (soku) 葛一 (itchi) の如きものに於けるキ、ク、ツ、チは即ちその一例である。然るに音符を土臺にして見ると、今日此のキ、ク、ツ、チの入聲は往々消滅して全く字音の上に現れなくなることがある。即ち



第六章 字音轉換の法則十一則

		K	
	反 ^{カク}	交 ^{カク}	
	Pak の諧聲文字	Kak の諧聲文字	
	一、フク……………pak	一、カク……………kak	
	二、パウ……………pao	二、カウ……………kao	
		T	
	未 ^{マツ}	發 ^{ハツ}	
	mat の諧聲文字	hat の諧聲文字	
	一、マツ……………mat	一、ハツ……………hat	
	二、マイ……………mai	一、ハイ……………hai	
		T	
	八 ^{ハチ}	七 ^{シチ}	
	hat の諧聲文字	shit の諧聲文字	
	一、ハチ……………hat	一、シチ……………shit	
	二、ハイ……………hai (小篆参照)	二、サイ……………sai	

かくの如く、ク、キ、ツ、チの四種の入聲音は時として其の音符の音が入聲たることを失ふ。此の例は今日合の本音カフがコオとなれる如く、フの入聲に於いて、現に最も明かに現はれて居るのである

が、尙

- 一、度の字がタク tak からト to となり、
- 二、出の字がシュツ sut からスイ sui となり、
- 三、質の字がシツ sit からシ si となつて居る、

やうな例を見ても、如何に入聲の大勢が消滅に近づきつゝあるかがわかる。現に今日北平官話には全く入聲は、消滅してしまつて、一つも残つてゐない。それ故吾人は入聲音を観察するに當つて、假令その音符は入聲音なりともその諧聲の文音が、必ず入聲音ならざる可からざるの理由は見出さないのである。例へば、禿の音がトク tok で、刺の音がラツ lat であつても、其の諧聲のものは別音である。即ち類の字に於いては、音符の禿はタイ tai の音となり頼の字に於いては刺はライ hai と云ふ入聲ならざる音を見るのである。而かも尙頼は刺より、類は禿よりその音が出されて居るのである。此の種の現象は、總べての入聲消滅の法則に支配せられて居るもので、此の法則に依るならば特例の外は大抵解くことが出来るのである。

特別の場合、入聲の相互轉換

上述の入聲消滅は音變化の甚しきものであるが、尙、其の消滅までに至らなくとも他の入聲と互に相轉換し合ふ場合のものがある。これは、一つが他の方に類推で引きつけられるに依るものであつて

如何にそれが轉じようとも、尙且つ入聲音たることは失はないのである。左にその例を擧げて見よう。

- 一、妾の音
 - 一、セフ 妾(今音シヨオ).....set
 - 二、セツ 接.....set
- 二、雜の音
 - 一、ザフ 雜(雜兵).....zap
 - 二、ザツ 雜(混雜).....zat
- 三、冊の音
 - 一、サク 冊欄.....sak
 - 二、サツ 冊(日本音).....sat
- 四、栗の音
 - 一、リキ 築.....rik
 - 二、リツ 栗(戰慄).....rit
- 五、益の音
 - 一、エキ 益.....yek
 - 二、イツ 溢.....yit

かやうな類例は尙、答、立、世、陟、歴、力などの字音についても、窺ふことが出来る。要はク、キ、ツ、チ、フの入既相互の間に音の轉換があると云ふに過ぎぬ。此れ等の現象は多く日本にて出来たのであるが、中には、昔し、支那の原土に於いて既に起つたものもあるのである。それ等の點は既に前章入聲音攷七〇五頁に詳述してあるから爰には説き及ばないでおく。

以上はすべて、入聲について述べたのである。次ぎには他の語尾音なるンの音について其の轉換の法則を説いて見よう。

第十、語尾音ン消滅の法則

ンの語尾音は入聲音の時と同じく、其の消滅するか、又は或る入聲音の音に轉するか二つの場合がある。其の消滅の場合には、唯單に消滅する計りでなく、入聲消滅の時と同じく其の前の母音に變化を及ぼすことも屢々ある。左に其の二三の例を擧げて見よう。

- 一、萬の音
 - 一、マン 萬.....man
 - 二、マイ 邁.....mai
- 二、尹の音
 - 一、イン 尹.....yin
 - 二、イ 伊.....yi
- 三、眞の音
 - 一、シン 眞.....shin
 - 二、シ 寘.....shi
- 四、豕の音
 - 一、トン 遜.....ton
 - 二、タイ 隊.....tai

- 五、端の音
 - 一、タン 端……………tan
 - 二、ズイ 瑞……………sui, jui
- 六、發の音
 - 一、サン 酸……………san
 - 二、サ 駿……………sa
- 七、軍の音
 - 一、クン 軍……………kun
 - 二、キ 揮……………hon

語尾音としてのンが消滅する時には、それと同時に又語頭の方の音が他の音に轉じて行くことも随分ある。但し其の時の語頭音の變化は主として、既に述べて置いた法則のうちの孰れかに支配せられて居るのである。例へば端の時の端の音タンは語尾のンを失ふと同時に又 T S Y の法則に支配されて、ズイ(瑞)の音となるなど、その一例である。かやうに一つの字音について、二つの音現象が同時に作用して居ることがある。この觀方は、總べての字音を觀察する時に、常に考へ中に入れて、注意すべき點である。

ンは消滅する外に既に述べ置きたる如く又、入聲と轉換することがある。其の實例は次ぎの如きものである。但し説文を標準に觀ると鉢と薩には異説が立つ。
ンと入聲との轉換

- 一、本の音
 - 一、ホン 本笨……………hon
 - 二、ハチ 鉢……………hat
- 二、産の音
 - 一、サン 産……………san
 - 二、サツ 薩……………sat
- 三、冊の音
 - 一、サク 冊……………sak
 - 二、サン 珊……………san

ンの音は更らに行燈行脚アレンアレンに於ける行の音アンの如く。又看經カシキシに於ける經キョウの如く後世の支那音から影響を受けて、支那流に、ン音の現はれて居るものもある。けれども此の類のものは極めて稀である。兎に角 N, T, K は音聲學上の理由で轉換して居る。

第十一、母音轉換の法則

次ぎに、語尾音が入聲でなく母音で終るものについて觀察するに、ア行のものとヤ行のものとは互によく相轉換する。而して此の現象は其の頭に立つ子音の種類如何は問はざるものである。

- 一、龍の音
 - 一、リュウ 龍(龍宮)……………riū, ryū
 - 二、リョオ 龍……………riō, ryō

- 三、ロオ 隴……………rō
- 一、キヨオ 恐鞏……………kiō, gyō
- 二、工の音
 - 二、クウ 空……………ku
 - 三、コオ 鴻……………kō
- 一、キヨオ 供……………kiō, kyō
- 三、共の音
 - 二、コオ 洪……………kō

かやうに、R, K等の語頭に立つ音如何に拘らず、そのあとに續く、ユウ、ヨオ、オオなどに就いて考ふる時は、其の間にヤ行とア行が如何に親密に關係せるかがわかる。

以上の外母音の轉換については、二重母音から、單母にうつり行くものがある。例へばアイが轉じてエイとなり、エイからイにうつるものがあり、又アイよりイに直ちに轉じたる如き結果を呈せるものもある。例へば

- 二、重母音と單母音との轉換
 - 一、アイ 哀……………ai
 - 二、エイ 裔……………ei
 - 三、イ 依(歸依の時はエ)……………i
- 一、衣の音
 - 二、エイ 裔……………ei
 - 三、イ 依……………i

- 二、米の音
 - 一、マイ 米……………mai (bei)
 - 二、メイ 迷……………mei
 - 三、ミ 糜……………mi (bi)
- 三、卑の音
 - 一、ハイ 髀……………hai
 - 二、ヘイ 啤……………hei
 - 三、ヒ 碑婢……………hi
- 四、非の音
 - 一、ハイ 排輩……………hai
 - 二、ヒ 誹悲斐……………hi
- 五、既の音
 - 一、ガイ 慨……………gai
 - 二、キ 暨……………ki
- 六、氣
 - 一、ガイ 愷……………gai
 - 二、キ 羸……………ki

これ等の類によりて其の一般を推すことが出来る。之によりて見ると哀の音符の衣が今日はアイの音でなく唯のイの音で現れて居たり又糜の音符の米がビでなく、實際はペイ又はマイの音で現れて居ることとすはつまり、アイ、エイ、エ、イの母變化中の或る階段に居るに過ぎぬ。それ故、たとひ、

其の諧聲文字の音が其の音符の音通りでなくとも、その音韻関係の上から音符と諧聲文字との間にはすべて連絡がつくのである。

以上の外、尙、甘の音カンが紺の時にコンとなり、艱の音カンが根、恨の時にコンとなれる例がある。つまり甘はアよりオに、又良はアよりオにと轉ずる。然るに、良は又銀に於いて、ギン、限に於いてゲン、音を見る如く、母音については其の變化が自由自在になるやうに見られるであらう。しかし、その間、ア又はオはエ又はイの如き方向に向つて、轉じ行くのである。即ち開きたる音は概して狭まれる音へとうつり行くのである。これは發音上の *laziness* で説明がつく。

以上は字音轉換の通則とも見るべきものについて、語頭音の場合（八つ）と語尾音の場合（三つ）とにわけて、順次其の大意を述べたのである。固よりこれで、總べての字音變化の現象を悉く解釋し盡したと云ふのではない。玄かし、その最も多く且つ普通に遭遇する現象は先づ上來掲げた如き規則によつて、解くことが出来る。依つて、之を漢字音に於ける音韻十一則と云ひ得るであらうと思ふ。字音變化のうちに上述の音韻十一則を考へ、すべての漢字を其の音符によつて、分類すると次ぎの如き結果になる。

諧聲文字類別	音符	現行正字
カ行音のもの	二〇〇	一五一五

サ行音のもの	二〇八	一三〇〇
タ行音のもの	八一	五五三
ナ行音のもの	一二	五九
ハ行音のもの	一七九	六二七
マ行音のもの	三三	二四〇
ラ行音のもの	四三	二九〇
アヤワ三行音	七二	四二四
小計	八二八	五〇〇八
特別のもの	—	二二六
日本特有のもの	—	九二
累計	八二八	五三二六

即ちこの表によつて見られる如く、今日行はれて居る總べての漢字の数は、五千三百有餘で、そのうち諧聲でないもの二百二十六を除けばあとは總べて其の字形のうちに音の符號を含んで居るものである。そのうちでもK音即ちカキクケコの語頭音に屬する音符をもつものが、最も多數で、全體の四分の一強を占め、サ行ハ行のもの之に次ぐ有様である。サ行は漢字音の上では他のカ行、タ行、マ

行、ラ行の諸行の音が他に轉換する時に大抵通過し來たる音である。(上述の轉換法則參照)。それ故かゝる一千三百と云ふ大多數の文字はサ行に來て居るのである。而かもこれが尙カ行音のそれに及ばないとは、如何によく字音としてのカ行音の榮えて居るかゝわかる。これは言海、辭林に見えたる純日本語のうちはそのカ行音の最も榮えて居るのと宛かも符合して居るわけである。

終りに臨みて以上の統計表が基づくところの漢字の音韻現象は拙著『漢字音の系統』についてこの個々の例證を參照せられたし。

尙字音轉換の現象は支那に於いても、日本に於いても古來非常に錯雜せる爲め容易にその各系統を調べ悉すことは出來ない。然し如何に錯雜せる變化にしても今日の音聲學で律せられないものは未だ見出されない。活と話の如きもクワイの音の中間状態を前提に認めて考察すればクツとクワイとワの三者は明かに一系統の轉訛に過ぎぬことがわかる。かやうに音聲學が字音觀察の津筏となることは實に豫想以上である。日本語に「新たし」*atarasi* が「新らし」*atarasi* となつたり、妹脊いもせの妹いもが妹尾いもの時にセノヲのセの音で讀まれたりする例がある。がこはtaがraに移つたとか、イモがセの音に轉じたとか云ふ譯ではない。寧ろ心理上の原因から生じた音の置換たるに過ぎぬ。日本語に見る此の種の例は尙各國の語に見る現象である。若し支那語に於いて又日本の字音に於いてかゝる現象が見出されることがあらうとも、それは單に心理現象として見る可きものであつて、茲に云ふ音韻の法則などの

ちへ混入して考へることは許さない。音韻法則では無論音の側のことのみを主眼にして考察するのであるが、往々かゝる誤解のたねを生ずることがあるから一言茲に附言しておく次第である。

第七章 音の側より觀たる漢字誤謬の發見

字書の誤りが一般に誤りでなく宛かも一つの正字なるが如くに認められるに至るは一朝一夕のことではない。實に長い年月を要する。而して其の誤りに對して初めは屢注意を促して居る學者たちでもいつしか遂には却て誤字を認めなければならぬやうになる。何故かと云ふに世間一般の大勢の上の無言の承認は逆ふべからず、其の威化力の自ら抜く可からざるものがあるからである。

凡そ世間に誤字を流布する其の端緒たる者は、新聞雜誌上の活字と云ふよりも寧ろ、ペンキ屋などのものす商店看板である。或は郵便の信書に認められる所謂クヅシ文字である。されば文字の社會的勢力は常に實用の側に存在して、學術上の方面などには少しも構ひなくすむ。故に文字發展の運命は殆んど常に文字の智識の十分でない人々の爲めに左右せられて行くもので、觀かたによつては文字は社會の上級の間に流れずして、下級の間を流れ、而かも其の下級の勢力の爲めに上級が制せられると云ふ命數を有するものと云ひ得られる。つまり文字發展の嚮導者はいつも下級のものより出で、上級

の未だ知らざるうちに、盛に通用文字として俗字、略字、新字を作つて行くのである。『俸』の字などは明治五年頃日々新聞がきめた新文字である。誤字と云ひ、正字と云ふ。素とより比較的の云ひかたで、其の限界は立てらるべき性質のものではない。文字の水掛論も多くは大抵此に存する。若し議論が楷書の上の字劃論であるならば、小篆の字形を引證せば、大抵一刀兩斷的に是非は決せられる。併し小篆なるものは今より二千年以前のもので、小篆そのものの字書に少なからぬ議論がある。よし之に論なしとするも、其の由つて來たつた素との籀文とか、更に古くは古文などを引き合ひに出して論ずる場合には、小篆の位置は頗る動搖して來る。その古文のものにでも體は幾種類もある。辭林の辭などにもその正俗略體殆んど百ばかりもある。以つて文字論の準據とすべきものの頗る得がたいことが察せられる。

自分の觀るところでは先づ最近に於ける文字の誤謬説は大抵唐以來今日までのものを、標準となし、其の間の時代の變遷は之を認めず、唐代の誤字、俗字をば其儘尙誤字なり、俗字なりとなせり。而して正字と云へば多く六朝時代以前のもを引證して居る。これはかつて徳川時代の和學者が雅言の標準を平安朝以前に置いたのと同じ轍を繰り返して居るものである。六朝時代に俗字の濫造されたことは非常なものである。唐の時代には尙其の餘波を蒙つて居る。今日書く箇の字、看の字などの俗體は當時既に書かれて居た字書である。その正字は圖、看である筈である。

六朝及び隋唐のものは云はずもがな其の後のものも或る程度までは日本に取り入れて然る可きことで、必ずしも漢魏以前の古體に合しないからとて排斥すべしとはまいらぬ。要は唯世間一般の潮流と共に、その大勢の趣くところに文字の運命はかゝつて居るものである故、文字の正誤の論は其の實用上に重きをおき一個人同志の主張などは全く別にして見なければならぬのである。

尙茲に注意すべきは誤字とか俗字とか云ふうちには却つて往々、古字の正體に近い形が存することである。これは言語の方で、地方の俗語にまゝ古語が残つて居るのと同様である。今日より見れば誤字と見ゆるものでも六朝時代のものには、時として、周代頃の古文の片見がその儘の畫で残つて居ることがある。故に俗字のうちには古代の佛と所謂俗字との二様のものがある。左に六朝南北朝より隋唐にかけて當時の俗字の一般を示し併せて今日の誤字、俗字と目せられて居るものに及ぼさうと思ふ。別表のうち六朝時代の俗字は北齊武平元年隴東王胡長仁感孝頌及び後魏太安二年中岳嵩高靈廟碑より抽きとり、南北朝のものは魏魯郡太守張府君清頌の碑及後魏時代の少林寺四面像記、李仲璇修孔廟碑等より取る。隋代のものには隋大業七年曲阜文廟同文門內碑より、唐代のものは、太宗贈奉師魯國孔宣公碑などより取る。尙金元のものには居庸關の石刻及河南祥符宴臺國書碑より取りたるものであつて、最後の安南文字は安南漆本嗣德三十四年版の大南國史演歌のうちより摘録したものである。

左表によつて觀るに文字の音符は古來如何に等閑視せられて居るかがわかる。即ちこは明かに當時

強	軒	萼	教	拔	妊	濶	庭	妹	御	缺	詰
.....
強	軒	萼	教	拔	妊	濶	庭	妹	御	缺	詰
.....
弘	干	萼(類)	教(看)	拔(髮)	妊	活	壬(呈程)	未	午	夬(抉)	吉

近 輩

詰	舊	覽	刺	均	鈎	場	惕	適	琢	逐	壇
.....
詰	舊	覽	刺	均	鈎	場	惕	適	琢	逐	壇
.....
告	臼	監	束	勻(鈎)	句	易(湯)	易(剔)	商(嫡)	豕	豕	旦

字	文	南	安
禱	裏	帽	新
.....	程
.....	孫
.....	茂
.....	格
.....	賢
.....	糊
.....	神
.....	麴
.....	黽
.....	翹
.....	森
.....	巴
.....	迂
.....	猥
.....	吟
.....	習
.....	仁
.....	粘
.....	臥
.....	多
.....	鍾
.....	賃
.....	遡
.....	鮮
.....	馭
.....	躑
.....	蹊
.....	悉
.....	姦
.....	姦

ばよろしいので、要は標準を一般世間におくより外に道はない。理屈などは一々行はれて行くものでないが、人は往々説文をたてにとる。併し説文は古文から見ると矢張り俗字が多く、その古文には又正俗の別が中々容易に立てられないと云ふ風で理論上からは今日頗るむづかしい。茲に字典を推すのも唯止むを得ざる便宜に出でたのである。

第八章 坪井文學博士よりの音韻に 關する文書六通

其の一 (本編第四章三八五至五一三頁參照)

拜啓漢字音韻に關する御研究今回御結了の由全部面白く拜讀致候益進で御開拓有之度願上候扱「人」
 「日」等の類字の北平音頭音は支那國有の父音にて、ローマ字にては之を現すこと難き由御説に候(第
 四章四九七頁參照) 此頭音たる父音はLを響く位置に舌端を置き而してフランス流のJを發するもの
 なりや又は單にフランス流のJより弱きものなりや如何。若し前者ならば Czechisch に類例あり。R
 を響く位置に舌端を置き而してドイツ流のschを發するものは也 Czech 語に於て此の父音vRを以つ
 て示す。Pol 語にも此の父音ありて rz) を以て之を示せり。彼地探險家たる prszwalski の rz) 是

也。此類例に依りて支那父音の場合にはLを以て示すべし。若し後者ならんにはYを以つて示しては如何。是はCech語の父音の一にてschの極めて弱きもの。フランス流のJより弱し。右御宿考まで申述候

四十一年四月廿八日

九 馬 三

國語研究室に於て

後 藤 君

梧 下

其の二 (本編第四章四七六頁參照)

口代

本日御質疑の件歸宅後相整候處出典は明末編輯の東西洋考なるを確認候同書西洋針路條に

吉寧馬哪山

吉寧馬礁

出候。是は疑もなく南洋のKarimata島に有之候。同名異譯の段御注意の事に候尙ほ

文郎馬神國古稱
文銀

と出づ。是はセンベスのBanyermassinの音譯なり。小生の報告書(三十五年十一月十五日官報參

照)に明記せるが如し。

以上

十一月四日夜

坪 井 生

後藤朝太郎 殿

硯 北

其の三

學問に季節なし。大晦日に講義を始めたる古人の例あれば染筆せしめ候。十二月號史學雜誌に貴説あり。其中に刎は从刀勿聲なりとて(第十章結論の一部を參照)現今の勿音に讀まば誤なる旨御説あり。誠に御尤の次第なり。小生近頃必要ありて勿の古音を調査候。左に卑説を開陳候條無腹藏御批評有之度候。

六朝時代の勿吉を唐代には鞞鞞と書けり。吉、鞞の唐代の音はketなること音譯字に依りて明白なり。又唐代に書ける摩訶未を宋代には麻霞勿と書けり。麻訶末はMahamatなり。此のAはアラビア假名(Aih)に當る。(Aih)はエジプト、マロッコ邊に於てLと讀みヘルシア、インド邊に於てAと讀む故にエジプトに於ては同名をMehemetと呼ぶなり。竝にMuhammedの俗稱なり。依て六朝乃至南宗の始までに於て勿は末の音なりし事明なり。翻て勿聲の類字を集むるに左の二十五字を得たり。

思ふに kwot (kot) は戦争に因んだ語で勿は旗に因んで字源を有して居る。旗の字の別字に旂の字を見るに依つてもわかるが尙勿の字の古文を見ても察知せられる。即ち勿の古文を鐘鼎文から比較し



攷古 牧敦 に見るに説文に、勿旗也、大丈夫之所建象其柄有三旂。と周禮春官司常攷古 九旗雜帛爲物とある。物の音は kot 従つてその勿の音は kot で旗

の義である。然るに已に論語などに、非禮勿視、とある。此の勿の字に就いて特に御注意願ひたい。自分は思ふに勿は即ち莫の義で普通である。即ち mak の M で互に通じてゐたものと思はれる。全くの語音の假借である。意味に於いて旗と莫との關係から起つたものではない。又起りさうなわけもない。して見れば M (B) はよほど古くより K から別に分れて存してゐたものと思はれる。

最初旗のことは kot と呼んでゐたものとする。其の今日に於いてよく知られたる旗の字は如何。説文、釋名などによると熊虎の象を畫いた軍旗がそれが即ち旗と云ふもの也と云ふてある。



(一) 直乙且



(二) 若發鼎



(三) 孟鼎

(一)(二) は旗の字の古文で、(三) は旂の字である。旗の字に含まるゝ「其」の字は音符であるが斤とは會意である。斤は斧の古文である。吾人は湖北で八旗とか云ふ後世の旗が軍旅に關した

語なるを思ふ時は旗の古語は古代に於いて既に旗そのものに密接の關係のありしことがわかる。

勿の古音が果して kot (kwot) で唯音の上で旗の義の kot とナカレの義又無の義の kot とが相通じて同音なるところより遂に旗の字を離れて専ら後には勿れの義のみに代用せられたるに至り今では原意は全く忘れられてしまつた。而して無のことを kot と云ふは契の kot 割の kut 月 (カゲル) の quat, guet 掘の kut 等と共に虧げるとか切りすてるとかの義から起つて居るものらしい。

終りに語尾音 Auslaut の場合に就いて述べて見よう。

中音の母音のことは暫く御預りにして置いて Auslaut のことを見るに仰せの通り K, T, N の音譯共通の現象は古來頗る多し。併し果して玄牝三藏其他、音譯に精密なる人々が悉く然るか否が歸納的に Hirth 先生の言の如きかどうか。自分は此の數年來實はその試験をこころみつつある。後日まとめて見たいと思つてゐる。併し何れにしても勿の字音に於いて又其他支那語で T と N との intercha nge は頗る其の場合が澤山ある。申し上げる迄もないが

且 { dat 悞
tan 坦

産 { sat 孽(薩)
sat 産

刺 { lat 刺
lan 懶

などがある。無論次ぎに立つ dental の音の前に生ずる入聲の同化の如く assimilation から起ることもある。又 D の如く T や N に Tungenspitze を齒の上裏

にあてる位置、(發音位置は全く同じ)の同じきが故互に轉じあふこともある。それ故に、それと同じ理由にて、

勿 } bot, mot……………物
fun, pun……………物

の如き T, N の轉換があるのである。併し kot, hot の音の場合の勿が kon, hon となつた例は見出さない。又茲に物、物を fun と云ふは日本の訛音で本音は bun, nun である。尙韓語の音、音の L が支那古代の T と發音位置の同様なるは云ふを俟たない。

故に説文四編下に勿は从刀勿聲とあるは勿に kwot, kot, bot, mot, bun の多音ある中最後に述べた bun が始めて該當することになるのである。物を pun と云ふは接物の如く音の同化影響による時のみ起り本來の古音に非ず。とかやうに所存仕ります。亂筆御海容の程を、何れ委細は不日參堂拜芝の上申述たく存じます。

四十二年一月三日

朝 太 郎 拜

坪 井 先 生

函 丈

其の五

前略

本日は態々御出来御意見書御惠投被下感謝の至奉存候早速再三熟讀細に貴意を得申候實は昨冬小生史學會講演の順にあたり候儘會て意見を有する朝鮮古地名の二三に就いて自説を述候積の處時間無之不得已クダラの一條のみ講演して席を下り之と共に腹稿有之候分を記述にて原稿と致し史學會に相送り候次第に候其の中に『忽』字の字音調べ必要と相成り半日程の間に『忽』の古字に就き相考へ自説を樹てて記述致置候。雜誌に出し候分は概略に候も貴處へは稍精しく相述候て貴見を窺候次第に候然處三日間に精密の御考證有之本日拜讀致し今更ら貴處の御勉勵に敬服候自後益御奮勵奉祈候。依て小生の書き置き候勿の原頭音説取消申候條御安心被下度候。貴説の如く kw の頭音を有する語は漢語には甚多く勿も成程此類の字音の一なるべく然るに古朝鮮の地名に忽字屢出で、皆『邑』とか『城』とかの義なるに其の音 hol にて研究者孰れも困居候へば小生新説を出し候て忽も勿と同音にて毫若くは是なりとの意見を道破候譯に候。斯くなくては古名の説明相立申さず又慶尙道方面に於ては勿をも忽をも等しく邑の義に用る申候古例有之候左手此事は是にて差措き B, P, W はウラル、アルタイ語に於て轉用の例歟と被存候其例は蒙古語の B は頭音にあれば B 中音(語中)にあれば W 尾音に於ては P となるなり。故に同じ B を用ゐても峠越の場合には dawwan と讀み、羅布湖^{ホップ}の場合には Lop と讀むなり。又 V, W 同音なりとの御説御尤もに候之れはオスマニリ、トルコに於て同じ、字の場合に依

りVともWとも(V-W)讀む例あるにて明なるべし。尙御面談の節可申述今夜は是にて摺筆候不宣

四十二年一月六日夜

坪井九馬三

後藤朝太郎様

硯 北

其の六

前略

來月號史學雜誌に忽の新羅時代の音は今朝鮮音の如く古音に非ず。量或は量たりし由の小生の考證を載する筈なり。就而は貴處の忽の字音考埋没致置くは無念に候條別紙に増補を加へられ二月號に御掲載相成候様致度此段申進候也

勿論小生の手紙中に用ひるに足る分あらば御引用御勝手に有之候以上

一日二十四日夜

坪井生

後藤朝太郎様

硯 北

其の七

前略

昨日御返壁候貴下の草稿中に莫を Bagatur のバクに御充候様に記憶候是は何る證據有之候歟
莫の音は bat, mat なりや將た異者なりや。是も調査を要候。莫は募、暮、慕等の場合に於ては do の音なり殊に暮の古字は莫なれば注意を要候。

匈奴の英主冒頓を Bagatur と讀むとはヒルト氏の説なり予も之を賛成する。予の賛成する故は左の如し。

冒頓は Baghatur の音譯なり。gh は軟化してUと發音する故にバウを bagh に借りたるなり。頓は tun なれども借りて tur を顯すべし。故に冒頭の二字にて Baghatur を現すに充分なりとす。

以上兩聲の下に思出候儘之を記す。

廿五日夜

坪井生

後藤朝太郎様

硯 北

その翌廿六日本郷彌生町の邸に先生を訪ひ支那音譯一般に就いて特に勿、伐、弗の新羅音失里の高麗音を論談し次で冒頓、旭烈兀、莫の音に就いてたづねつ問はれつ懇談數時間にわたる。尙次章『坪井博士の忽音攷』は同博士の一月廿四日の信書に本づき四十二年三月號の史學雜誌にのせたものであるが尙こは坪井白鳥兩博士に對する予の説なり。

超へて三月二日（火曜日）坪井博士より親しく例の話有之由の通知を拜受し即刻參堂。博士の説の史學雜誌に公にせられたる論文について更に論談、快談、約三時間の長座を失禮したり（三月二日のふところ日記）。

つらつら自分の既往の研究發端を顧て見るに、抑も支那の音韻研究に interest を起し是非音韻の沿革史を辿つて見ようと云ふ決心の胸中に湧き起つたのは全く歴史の方面から氣附いたことで、今から六年前丁度明治三十七年の頃からである。爾來東洋史の方面から絶えず、諸教授より此の側の刺戟を受け、愈益その研究の必要を感ずるに至つた。茲には唯次章との連絡上特に本章を設けて坪井博士よりの御信書を掲げた次第であるが、尙白鳥博士市村博士等よりも常々此の側に於いて少なからぬ音韻研究上の材料を與へられ、爲めに東洋史に就いて不肖は益興味を深くすることが出来たのは誠に幸な次第である。

第九章 坪井博士の「忽」音攷に就て

「忽」の字音は朝鮮の言語研究の上又朝鮮史の文獻學的研究の上に重要な價值を有し、十數年以來屢白鳥博士、宮崎博士、金澤博士、弊原博士、中田學士等の比較研究が出て居た處史學雜誌本年二

月號に於いて又坪井文學博士からの嶄新なる考證が出た。自分は此の際支那の音韻史上から忽音に就いて少しく卑見を述べ添へて置かうと思ふ。實は此の忽音に就いて明治四十年十二月三十一日夜以來博士と文通對談前後六七回にも及んだ次第であつたが、博士の最後の高説は同誌二月號に於いて見受けられる。即ち朝鮮古地名不耐城の末段に、

「(前略) 拔麻、伐、弗、火、化泚(泚) 夫里、勿、忽、焮、牟羅など皆是なり。此中に忽は呼骨切にて音笏コツ現今の朝鮮音にて^ハなれば弗と同一の音譯文字なりとは認め難しとの異議も出でまじきにあらねど説文に據れば忽は「忘也从亡勿聲」とありて勿と同音なり又慶尙道の古地名にも買省郡、一云馬忽あり水谷城縣、一云買忽とあれば旁々以つて忽の古音は勿なりしを認めざるべからず」とある。吾人は今茲に百濟新羅高句麗の言語方言について多く云ふことは出来ない。唯城のことを pul (böl, mu) とも kol とも方言の差で云つて居たものと前提して置いて、扱博士の「忽の古音は勿なり」との點を音聲學の方面から觀察して見よう。

從來白鳥博士の定説では「忽」は新羅時代の kol の音譯なりとせられたるに反して坪井博士からの新説では「忽」は弗、伐、夫、里などと同様にこは當時 pul の音譯ならんかとのことなり。今支那原土の音韻史上から觀て忌憚なく愚案を陳べんに、

一 『忽』の語頭音(Anlaut)の場合

博士の引用せられたる如く説文(第十篇上)には「忽」忘也从心勿聲とあり、且つ御説の如く勿の音に就いてはあらゆる總べての場合を考察する必要がある。直ちに忽音の一つを以つて古音を決定することは出来兼ねる。案ずるに、忽の古音は勿の音なるに相違なきも外に『刎』の字『物』の字などもあるにより其の『勿』の音其のものを明瞭にして置かなければ科學的に十分とは云ひにくい。嘗つて博士の御書面にも見えたる如く勿なる音符にはK, Pの兩語頭音がある。併しKの方は本來からK又はK'の音であつたかと思はれる(後世の音はHなるも)がPの方は本來PでなくP'でもなく又Fでもない(刎物物を fun と云ふは訛音)實はBに近き響を有せし支那特有の半濁で日本や西洋にある如き聲帯の振動の甚しきB音ではないのである。今も諸地方に残つて居るが聞きかたに依つてはPともBとも聞える音である。接吻を seppun と發音するは音の同化(assimilation)であつて物固有の音とは違ふ。故に勿の語頭音は寧ろK及びB(半濁)と見る可きである。然るに其のBは鼻音に轉じてM音に變ずる(馬の音にも *gama*)。古代の浙江方面には殊に此のM音多く而してBは古く北方地方(黄河方面)と今の福建省南半及び我が臺灣に多く行はれて居る音である。さて B, M の北方地方に於ける其の時代の順序に就ては白鳥博士の異説もあるが、問題の『勿』

の字に就いてはMの音よりもB音の方が比較的古くはないかと思はれる。然るに忽の字などに於ける語頭のK音は更らに一層古い原音ではないかと推定せられる。勿はすべて其の語源上否定、殺伐、絶滅、破壊等の意を現はせる文字に其の音符として用ひられ而して其の古音變遷の順序は音韻學上大略次ぎの如くに考へられる。

勿 kwot — khot (k'ot) — hu
 wot (vot) — hot — not — mu

KとWとの關係は他に和が kwa, (hwa) wa 恵が kwei, wei 穢が kwai, (kwei) we 又越が『壹越』^{イチャコツ}の時に yit-kwot (音樂上の術語) 又梵語の音譯では pat (= Danapāti) をつし普通に wot, wet と云へる如き卑近なる例のあるによりても如何に其の音韻關係の密接なるかわかる。然るに支那では其のW音が更らにBの音と關係を有する。忘 bang が wang となり媿 bien が wan となる。現に物 but, mut 勿 mut の如き音も今の北平音では總べて wu の音となつて居る。以上は K, W, B 三音の首韻關係であるが次ぎに同じ gutturale の音に屬する K, K', 及び H が互に相轉じ合ふことは尙多くの國語に見出さるる現象である。

勿の假定古音 kwot (k'ot) が假りに説文の「忽忘也从心勿聲」とある勿聲に適用し得るならば、即ち忽の古音も亦 kwot の音に比定せられ得べく、而して『忽』の北平音 hu は即ち其の古音より出で

しものならんか。忽の日本音コツ (kotsu) は支那音 hot の日本訛音で韓音 **ㅈ** に相當するものである。尙「物」の音 but, mot の如きも kwot の K が H となり遂に drop して、あとの wot vot より but, mot の音の發達したものではないか。韓音 **ㅈ** pul は之に當たる。

勿吉(六朝時代)が唐代の靺鞨に音譯上では比定す可きものなりとするも果して勿の語頭音の M なるか否かは未詳。併し孰れにせよ、M, B 共に唇音 (labiale) に屬して勿の假定原音たる K に比較する時は素より順序として後の發達に屬する音。結局唇音 B, M は喉音 (K) よりも近音であつてその中には北部支那で西暦十四五世紀頃即ち元朝前後に於いて盛に W の音にゆるんでしまつた傾向が見られる。撫、舞、物、勿の音が今日孰れも wu となれるも即ちその例である。吾人は人茲に「勿」の古音を推定する前に K, M (或は B) 二音の併立せる他の類例を見よう。

- (一) 無 kwu { ku 撫
mu 撫
- (二) 黑 kwok { kok, hek 黑
mok, bok 默
- (三) 麥 kwak { kok 麥 (音別)
muk, dak 麥
- (四) 每 kwai { kuai, kai 晦海
mai, bai 梅侮

尙快 (kwai) に對して袂 (bei) のあるのも茲に併せ考ふべきもので上例によれば最早や「勿」に kot, bot, mot 等の音の併立が偶然にあらざることを知る。併し尙之が起原を二重子音と見し、kbot,

knbot なることに就いては他の kian, pian などのやうな調子には行かないやうに思ふ。西藏其の他の同語族參照。依つて之は寧ろ假定に kwot なる形を立て其の内 W より B, M の發達したものとする方が順序であるかと思ふ。扱かくすれば K, M から K, M (B) と兩音が分裂して生じたこと見られ得るが、さて其の裏面に於いて意義上の共通點が見られるかと云ふに確かに其の伏在して居ることを發見する。即ち

- kwot (決滅) { 決別 kot, kut, kat, ket, kit 骨、掘、割、決、月、契
絶滅 mot, mat, met, mit 沒、抹、滅、密

詩大雅皇矣に是絶是忽とある。其の忽は kot の音でなくして滅 (mot, bet) と讀む可く (毛傳) 又忽の義に關しては説文に忘也とあり爾雅の釋詁には忽盡也とあり。尙支那外部で暹羅及びキラント (Kiranti) の土語では鈎のことを kot と云ひブラフマ (Brahui) ベンガル (Bengal) 地方では無、否のことを mat と云ふ。これは支那の弗 (古音 but) 不 (古音 put) 奎章全韻の **ㄅ** に關係のある語で尙「滅」没」なども同語源の語である。以上の關係よりして決滅の義の but, mut なる音は、又 Kot の音に言葉として關係を有せることがわかる。されば「勿」の音字に **ㅈ** kot と **ㅈ** mot の音があり、邊に kot, mot の兩音の存する如きも是れ全く kwot の音の分岐した音と見られ同理にて「忽」にも kot (hot) の外に bot (mot) の音がある可き筈である。坪井博士の「忽」音攷は蓋し此の點に正

しく觸れて居るものと思ふ。

二 『忽』の語尾音(Auslaut)の場合

音譯の際に於ける語尾音の代用に關しては既にヒルト氏の説もあるが自分は茲に先づ支那古音に於ける T, N 兩音の轉換の例を擧げて韓音 L の入聲に及ばんとす。即ち T, N の轉換は、

且	dat	恒	産	sat	薩	刺	lat	刺	沒	mot	沒
	tan	坦		san	産		lan	懶		man	沒(北平音)

の如し。然るに、T 入聲の發音位置は N 音の外又 L 音にも酷似す。蓋し其の齒根と舌端を用ふる點に於いて。故に『L』はまゝ支那では語頭にて轉換するのであるが朝鮮では語尾にて轉換する。日、一が韓音で各(三)と發音せられ『忽』音 kot (kot) が毫(ho)となれる皆故ありと云ふ可きである。併し語尾音のことは取り別け問題とするのでない。

兎にかく事實上語尾 L は朝鮮に現存し勿の音の如きも mul となれり。されど方言で『忽』は廣東音 hot 安南音 hout 臺灣音 hut 未だ嘗て『忽』に but, mut の現存せるを聞かない。反對に音符『勿』は廣東音 nēt 安南音 vêt 未だ嘗て『勿』に kwot, huot の現存せるを發見しない。坪井博士が『忽』音改は偶以つて此の缺陷を埋められたるものなるか。暫く記して後日研究の參考となして置く。

附記、自分は以上の如く忽の支那古音を以つて、kwot とし、kot と dot とは唯之から分岐して發達した後の音也と考へるのである。が當時自分が聽講して居た白鳥博士の講義では、高句麗時代の『忽』の韓音は骨と同音で且つ是れが北方滿洲の方の『率本』(地名)の率の字に普通に用ひられて居ることのありより察すると、音韻上『忽』の頭音が K であればこそ、S 即ち率の字音に代用せられたものであるとのことである。つまり博士は K 音説である。言葉の分布上より案するに都邑の義の言葉は新羅の bol 高麗の kol の外に滿洲語又 Gold の語 (Schmidt 氏は之を滿洲の一方言とす) などにも擴がり多く kur (gol) の語根を推定することが出来る。されば置溝濃(北沃沮)など云ふ溝濃の語はひろく行はれて居たものと見られる。けれども之を以つて直ちに忽の古朝鮮の用ひざまが絶對にコツの音の一方に限られ、ポツの音は全然否定すべきものなりや否や。此の點に就いては其の後自分は更に宮崎法學博士の力を借りて時々研究を進めて居る。同博士の忽音考は近時 K, B 兩音説にやゝ傾かる。

第十章 説文に現れた音韻の現象

許慎の説文は今を去ること約一千八百年以前に出來たもので今日支那古代に於ける言語の研究資料

としてかの爾雅並びに揚雄の方言劉熙の釋名などと相並んで頗る重要な位置を占めて居る。單に言語上の研究資料となつて居るばかりでなく、或る程度迄説文は文字學上の研究資料としても亦少なからぬ手懸りを告げて居るものである。併しながら科學的研究の立脚地から云へば先づさきに金石文の學術的調査を竣たなければ其の文字資料としての眞價値はさまらなると同じやうに其の言語の研究資料としても亦更に他の種々なる言語學的研究を試みて見た上でなければ固より此れが眞價値は容易に決定せられないのである。

支那古代に於ける言語現象から見た説文の研究は今日の所謂言語學 (Science of language) 上の研究法からして此れを調べなければならぬことは無論である。が、併し自分の今日の研究程度は未だ其の點に十分でないところがあるから爰には題號の如く主に其の音韻の側だけを探つて少しく此れに就いて新しい研究を試みて見たいと思ふ。

一 『之』の字の古音 — Tak 又は Tok

説文解字第六の部に『之』は出也象艸過屮枝莖益大有所之一者地也云々とあり後唐の徐鍇(徐鉉の弟)

石鼓文

重刻

毛公鼎

積古

が音注に止耐切と見えて居る。併し此の反切が古音を示せるものとは決して攷へられない。『之』の字の古音

を窺ふには豫め先づ其の現在の音を見て置かなくてはならぬ。即ち此れが北清の現音は (Cin) であつて南清の方言音も多く Cin か又は [ɛn] の音で現れて居る。今この音の古音を觀察する一手段として此の發符を取つて居る所謂諧聲文字の側から研究を進めて行く種種の音現象が觀られるのである。

例へば説文解字第二に『特』の字が見えて之に朴特牛父也从牛寺聲徒得切と注してある。『即』も特

石鼓文

石鼓文

は Tok の音であつて旁の寺の字に依つて其の音が出されて居る。然るに寺の字の北平音は Sau で福州音は Sei 廣州音は Tsə の如き類であつて Tok など云ふ音は現在の『寺』の字には全く見出

されないものである。

侍、持、峙、痔などの字音が『寺』なる音符に依つて音の出で居ることは極めて明白で無論穩當なことと攷へられるが、『特』の字に於いて之と同じ説明法を用ふると云ふことは果して事實穩當なりや否やの問題。此れは單に説文の上だけの問題たるに留まらず尙支那の音韻史上頗る注目すべき問題であると思はれる。畢竟其の从牛寺聲徒得切とあるは音韻學上より觀て如何に判斷すべきか。左に少しく此の點に就いて觀察をこらし併せて『之』の字の古音確定に向つて論を進めて見よう。

先づ『特』の字の表音的要素たる『寺』の音符に就いて見るに此れが構造は決して今日の楷書に於ける如く『土』と『寸』とではなくて『素』とは『之』の字と『寸』の字から出來て居る。且つ其の

頗る近く又許慎の説の如く其の素とは地面より嫩き艸木の萌え出る様を象つた文字であつて説文に『之』は出也とあるのも此の故で此れは言語上最も注目すべき點である。而して支那の古代で『出る』『行く』など云ふ言葉は多く tai の音で現されて居る。時としては tai 又は sei の音に轉じて居ることもある。

楊雄の方言に帶 (tai) は之 (tai) 也 (行人) とあり。

釋名釋曲藝に詩 (tai) は之也志之所之 (tai) とある。

が如きは孰れも『行く』の義で又日本に於いても正之など訓する『之』の訓に之れが現れ、其他逝(去)を『行く』(死)と訓するものも此れと音韻上の關係を有する爲めかと思はれる。尙爾雅に『之』は子也とあるが此れは『之』の第一義『出』の義に關聯したるもので幼兒を以つて嫩い草木に譬へたものであらうかと思はれる。此の外尙普通文字の方で『之』は是(古音 tai) 此(古音 tai) などと同種に用ひられて居る。日本で『是』は dai 『此』は sei の古音で現れて居るが此れ等と『之』が同種に用ひられて居るのはつまり其の間の音韻關係が近いと云ふ一傍證になるのである。要するに『之』の字の古音は sei であつて素とは『出で行く』の義を有して居たものである。今の福州音に『之』の諧聲文字『寺』が sei と讀まれて居るのも茲に考へ併す可きもので『兌』 tai, dai の諧聲の『説』の字が sei, jei と讀まれて居るなどのことも音韻學上同じ道理である。

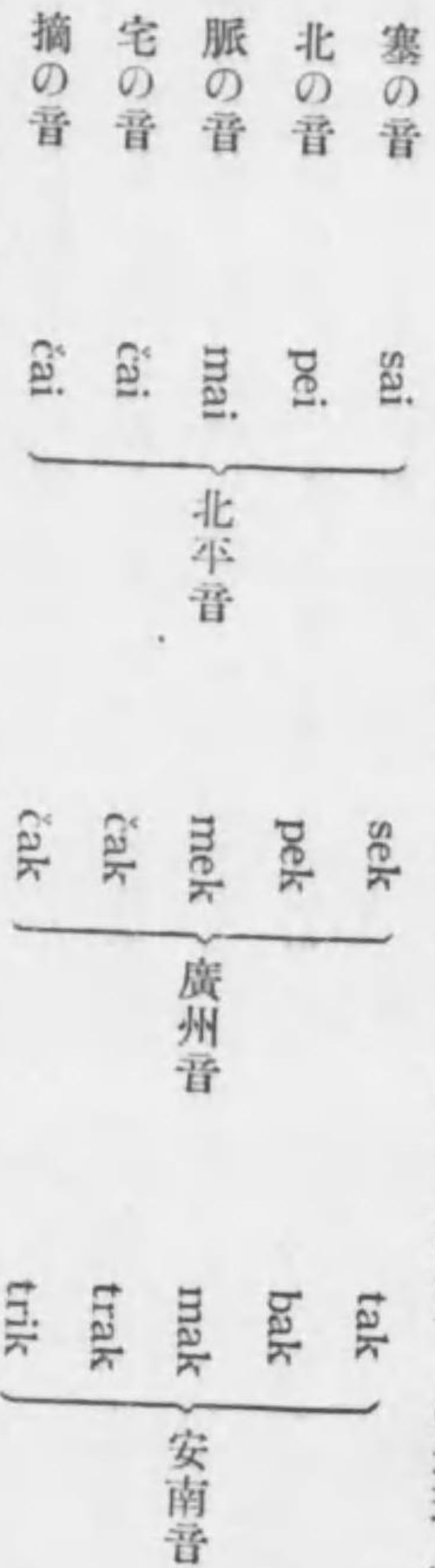
かやうに觀て來る時は『之』の古音に sei の古音があつたことは固よりのこと尙更に一層古い音として tai の音の存して居たことが察せられる。即ち語頭音が T で其れにつづく二重母音は ei よりも寧ろ sei の音であつたことがわかる。尙此れを確かむる爲めに更に『之』の諧聲文字のうちで現に tai の音を有するものを左に擧げて見よう。

説文解字彳の部に見えて居る『待』の字此れが即ちその一例であつて同書に『待』は俟也从彳寺聲徒在切とある。此の實例に於ける『寺』の音が sei であることは明々白々なる事實である。尙『臺』の字の音 tai も其のあたまたまの士即ち士から音が出で居るのである。依つて其の『之』が古く tai の音を有して居たことは直に考へられるのである。

次に然らば『之』の古音 sei は其の古音として眞に終極の古音と見るべきものであるかどうか。自分は支那語の音韻沿革史上から見て未だ此れを以て眞の根本的古音として認むることは出來ないのである。左に其の理由とするところ及びその眞の根本的古音と思はれるものに就いて少しく説いて見よう。

嘗つて本編第四章四四二頁『高大』の義を論じたところに於いて其の言語上の立場から『之』の古音を sei として説き、其れ以上に派することはしなかつた。然るに其の後の研究によりて見ると今日の支那語で北方に sei, sei の二重母音で終るものが南方地方では入聲音で残つて居るものがあり。又古

代の支那音に於いて tai, lai, kai, mai, sai などの如き ai の韻で終れる單綴 (monosyllabic) の音が多くは素と入聲音のものから後にくづれて發達して來て居るやうな事實を發見した。且つ又楊雄の方言に荆吳楊甌之間 (即ち今の江西江蘇福建地方のことを指す) で大なることを濯 tak と云ふとあり。尙爾雅にも濯蓆 (古音 tak) 碩 (古音 tok) は大也と見えて居て詩經にも其の用例少くない。されば古代には大の義を tai の音で現はして居たばかりでなく尙 tak の古音に依つて居たこともあることが考へられるのである。此れに依つて觀ると『之』の古音の tai は素と更に或る古い入聲音から出て居るのではないかと云ふ疑問が當然起るのである。何となれば今日の地理上で、



の如きものがあまた發見せられる。加之、次に字音の上から古代に於ける音韻現象を調べて見るに又之と同じ現象を見出すのである。例へば

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 駭の音……………kai (gai) | 刻の音……………kok |
| 弋の音符に對して | |
| 代の音……………tai | 忒の音……………tok |
| 禿の音符に對して | |
| 頽の音……………tai | 禿の音……………tok |
| 益の音符に對して | |
| 隘の音……………ai | 益の音……………yak (ak) |
| 七の音符に對して | |
| 切 (一切) の音……………sai | 叱の七……………sit (tsit) |

の如きものがある。此れ等は禿、益、七に於いて窺はれるやうに古く始めは入聲音で讀まれて居た音が後に緩く軟化して母音で現れるに至つたのである。亥の如きも始めは kok (刻) 又は kak の音であつて駭の字に於ける亥の音 gai, kai はその第二次的の音であると思はれる。尙朝鮮などに残れる現在の字音に就いて上述の音韻比較を試みても亦同一の結果を見るのである。

かくの如き音韻變遷の大體の傾向を前提として今『之』の字の古音 tai に就いて考ふると上に列擧した現象と頗る相近い歴史を有するものの様に思はれる。即ち『之』は素と入聲の tok 又は tak

推定せられるのであるが、併し爰に論じて居るものに就いて果していかがであらう。予の不肖は之を爰に確然と断定するだけの材料は未だ見出さないのである。

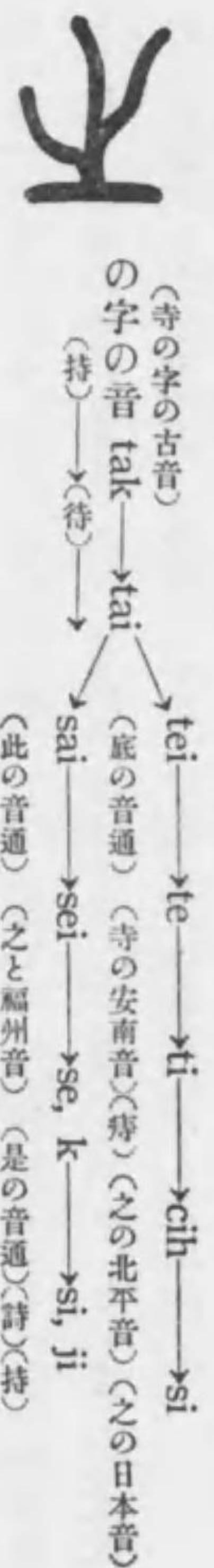
次ぎには歴史的の音を離れ又文字上の音をも離れて全く現在の地理上から同一語族に属する他の部族の言語を調査して見るに、安南では『行くこと』を *tat* (達) と云ふ(大南國史演歌内屬二十一頁) 西藏、ヒマラーヤ、暹羅、安南方面の言語では今日『行くこと』又『出づること』に於いて丁度 *tok*, *tak* の音未だ見あたらぬ。けれども『伸び行くこと』を

- ギャルング語 (Gyarung) *tayok*
- カムライ語 (Kamti) *takhun*
- 暹羅語 (Siamese) *yok*
- アホム語 (Ahom) *tang, yok*
- と云ふ例があり。又『伸び上ること』を
- 緬甸語 (Burmese) *tha*
- 安南語 (Annamitic) *day*
- アホム語 (Ahom) *ti*

など云ふ語から考へて、此れ等外部からの比較によつて見ると A. O. の音が此の語に多いやうに見

受けられる。又此の現象は引いて以つて『之』の古音が *tai* と云ふよりも *tak, tok* の音であるとの積極的の證據とはならないまでも少くとも其の傍證の一つとして見ることは出来るのである。

以上種々の方面から述べ来たつたところに依れば『之』の字の音韻沿革の順序は大略次ぎの如き發達の経路を取つて今日に來たれるものである。其の最古に於ける中間母音を假りに以上の例から推して暫く A で以つて現はして置き其の歴史的變遷を見ると、



『之』の音符はかやうな音の歴史を有して居て其の殆んど各のステージに其の諧聲文字の古音の佛を残して居る。即ち『寺』の字は其れが出来た當時は尙未だ *tok, tak* などの音を有してゐたものと思はれるが、其の名残りを『特』の字の上に留めて次いで *tai* の音とつたり『待』をその片見に残して早くも更に *cih* から *ci* にと變化した *ci* は濁つて日本音の持の字に其の名残りをとどめ其の濁らない方のものは南の方安南に今日残つて居ると云ふやうな状態である。即ち古音が複合 (Compound) の文字に残つて『特』には第一期の古音を留め『待』には第二期の古音を残し『詩』の字などに至つては實に後世のもので其の七期、八期の音を發達させて居るのである。固より詩の字の音も素とは第一

期又は第二期の音に屬してゐたものかも知れない。兎も角かやうに複合文字のうちに『之』の古音が順次辿つて派られ得ると云ふことは言語學上で日本の複合語のうちに往々古音が辿られうる（上田博士の説）のと其の趣を同じうして居る現象であつて此れは支那の音韻研究上頗る興味のあることである。

之を要するに『之』の字の最初の古音は tok 又は tok であつて『之』を音符として『寺』の字の作られた當時は尙此の音で呼ばれてゐたものらしい。果して然とすれば『特』が从牛寺聲徒得切と説文に注せられてゐる點は敢て不穩當ではなく。反つて爰に寺聲と云ふ此の寺が『之』の音で讀まなければ『特』の音が出ないと云ふことを告げて居る譯である。畢竟するに『之』の古音は此の研究に依ると tok の音の外に更に根本に tok の古音の存して居たと云ふことを暫く假定説として出して置くのである。尙之を毛の字と比較すると一層此の説は確實になると思ふ。

附記 支那人が古來之の字を音符として作り上げた諧聲文字は單に以上に挙げただけの文字ではない。嚴可均、朱駿聲などの蒐集したものに依つて算するも總體で三十七字の多きを致して居る。併も其のうちに今日死字もあり、廢字もあるが先づ生（**𠂔**）の字から十一字の複合文字が出来て、餘は其れから更に二次的又は三次的に發達して枝を生じたものである。即ち、



の音字

- 一、 芝
- 二、 志(𠂔)——誌
- 三、 寺——持持時、特時、詩(𠂔)、峙時、峙時、痔、等、部、侍、特、待(𠂔)
- 四、 𠂔(時に同じ)
- 五、 崩
- 六、 𠂔
- 七、 𠂔——澁、𠂔、𠂔
- 八、 事(𠂔)
- 九、 臺——臺、臺(士は𠂔の變形)
- 十、 市(𠂔)(肺に於ける市は全く別)
- 十一、 𠂔(嚴可均聲類に讀若躍之省聲とある)



此の一節は過日學兄飯島忠夫氏から『特』の字がなぜ 𠂔 の音符に依つて居ながら tok の音の出されて居るか、との興味ある質問を受けたるに依り同氏に之を答へんが爲め且つは一般讀者から更に又一層學術上興味の高い手懸りを寄せてもらはんが爲め茲に不肖目下の考を述べた次第である。

(四十一年四月三十日稿)

